☆
ニ1-02
一肇
魔法少女まどか☆マギカ（下）

著 一肇 × 監修 虚淵玄
のタッグが紡ぐ
公式ノベライズ

まどマギ
公式ノベライズ

劇場版 魔法少女まどか☆マギカ［新編］叛逆の物語 10/26より全国ロードショー

☆星海社文庫。

星海社文庫

Presented by Hajime Hinomoto
Based on the story by Magica Quartet
Published by SHINKAISHA

小さな愛蔵版、か

9784061389571

1920193007206

ISBN978-4-08-138957-1
C0193 ¥720E（0）

定価：本体720円（税別）

DIVE INTO
THE BOOKREVIEW
&INFORMATION!

キュゥべえの恐るべき計画が明らかにされる時、少女たちは自らに課せられた運命の残酷さを知る……。

〝ワルプルギスの夜〟を前に次々と命を散らしていく魔法少女たち。彼女らを救うべく、まどかが下した運命の決断とは――？

監修虚淵玄×一肇のタッグで生まれた公式ノベライズ『魔法少女まどか☆マギカ』、ここに完結！

ストーリー原案 虚淵玄
一肇×安倍吉俊

☆星海社FICTIONS
「フェノメノ」シリーズ
それは、ありとあらゆる怪異を詰め込んだ青春怪談小説。
最新作「フェノメノ弾 四回廊事件」今秋発売予定！

ニトロプラス制作ビジュアルノベル版『願いの叶う家』
現在、無料配信中。http://www.nitroplus.co.jp/game/phenomeno/

一肇 Hajime Ninomae

作家。ニトロプラス所属。『桜ish一推定魔法少女一』（角川スニーカー文庫）でデビュー。現在、星海社 FICTIONS より『フェノメノ』シリーズを刊行中。他、代表作として『くくる』『幽式』（いずれもガガガ文庫）などがある。
ツイッターアカウントは @nino_haji

何が飛び出すか
誰にもわからない！

星海社ウェブサイト
最前線
http://sai-zen-sen.jp

たった今、ここが「最前線」。
そう断言できる才能と作品を
全力で打ち出していきます。
すべてはここから始まります。
「最前線」編集長兼星海社代表取締役副社長 COO 太田克史

☆
ニ1-02

一肇

魔法少女まどか☆マギカ（下）

星海社文庫

Presented by Hajime Nisemor
Based on the story by Magica Quartet
Published by SHINKAISHA

Design BA OKO

9784061389571

1920193007206

ISBN978-4-08-138957-1
C0193 ¥720E（0）

定価：本体720円（税別）

DIVE INTO
THE BOOKREVIEW
&INFORMATION!

キュゥべえの恐るべき計画が明らかにされる時、少女たちは自らに課せられた運命の残酷さを知る……。

〝ワルプルギスの夜〟を前に次々と命を散らしていく魔法少女たち。彼女らを救うべく、まどかが下した運命の決断とは――？

監修虚淵玄×一肇のタッグで生まれた公式ノベライズ『魔法少女まどか☆マギカ』、ここに完結！

II

一肇 Hajime Ninomae

作家。ニトロプラス所属。『桜 ish ー 推定魔法少女 ー』（角川スニーカー文庫）でデビュー。現在、星海社 FICTIONS より『フェノメノ』シリーズを刊行中。他、代表作として『くくる くる』『幽式』（いずれもガガガ文庫）などがある。
ツイッターアカウントは @nino_haji

一肇
魔法少女まどか☆マギカ

魔法少女まどか☆マギカ

PUELLA MAGI
MADOKA MAGICA

She will know yet if this encounter is a mere coincidence or a necessity
Which would be, an encounter that would change her destiny—

下

星海社文庫

魔法少女まどか☆マギカ（下）

一肇

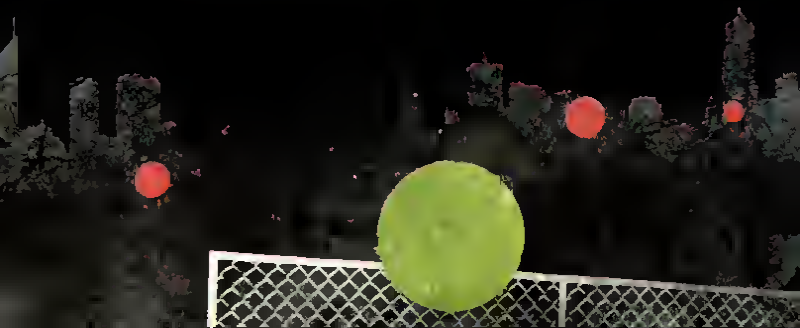
Illustration／原画・谷口淳一郎　彩色・ざいん

CONTENTS

第七章「哀しみも、苦しみも」007

第八章「わたし、サイテーだよ」041

第九章「友達なんて、いないんだから」081



第十章「もう誰にも頼らない」133
第十一章「あなたもわたし」203
エピローグ❷「最高の友達」275
あとがき294

第七章　哀しみも、苦しみも

——まどか、あんたは何にだってなれるんだよ。
わたしが落ち込んだりすると、ママはいつもそう言ってくれて——
わたしも、もしかしたらいろいろ頑張れば、いろいろな夢を叶えることもできるかなって——そう思いかけてて。
でも、夢はいつだってなかなか叶わないから夢と呼ばれるわけで……
もしかしたら、一生夢のままで終わるかもしれないことの方がずっと多くて……
夢を叶えるために何かを犠牲にしなきゃいけないことがあるのも、もちろんわかってるけど——でも、それは、自分でちゃんと犠牲にするものを理解して夢を叶えているはずでした。気がついたら、夢の代わりに何かを奪われているなんて——そんなひどいことがあるわけない、と思ってました。

「キミたちは、いつもそうだね」
赤い瞳を輝かせて、キュゥべえは言います。
「事実をありのままに伝えると、決まって同じ反応をする。訳がわからないよ。どうして

人間はそんなに、魂の在処にこだわるんだい？」

悪びれる様子もなく、淡々と話すキュゥべえの言葉は、ひとつひとつが胸に突き刺さるようでした。わたしたちが子供すぎたのだと泣きたくなるほど、年を経た大人の言葉のように思えました。

腕の中で冷たくなっていく、さやかちゃんの身体の重みとともに――

わたしは、ただただ、涙に暮れていました。

「ひどいよ……そんなの、あんまりだよ……」

受け止めきれないほどの哀しみを前に、わたしが言えることはそんな子供みたいな言葉だけでした。

さやかちゃんが、これ以上傷つかないように。

さやかちゃんが、これ以上苦しまないように。

ただそれだけを願って――わたしは、さやかちゃんのソウルジェムを夜の高速道路へと投げ捨ててしまったのでした。さやかちゃんの命ごと、わたしは捨ててしまったのでした。

「……さやかちゃあん……ごめ……ごめんなさい……」

わたしがさやかちゃんの頭を抱き抱えて、髪に鼻先をうずめてそう叫んだ時でした。

「――鹿目まどか」

声がして、ぐしゃぐしゃの顔を上げると――そこには、暁美ほむらちゃんが立ち尽くし

ていました。いつもの冷たく白い顔にはどこか血の気が差し、ほんのわずかに息を切らしているのがわかります。

そして、ほむらちゃんが無言で差し出してくれたのは――

わたしがさっき高速道路に投げ捨てた、さやかちゃんのソウルジェムでした。

「……ほ、ほむらちゃん」

「急いで。もう光がずいぶん弱くなっている」

わたしが慌ててそれを受け取り、そしてさやかちゃんの手のひらに置いて上から両手で握りしめると――ソウルジェムの光が、さやかちゃんの身体に乗り移るように目映く輝き出しました。そして、一度、ぶるりと身震いして――さやかちゃんは、静かに目を開きます。

「さ、さやかちゃん！」

「あ……」

「さやかちゃん、よかった！　よかった……」

もう、立ち上がれないほど力が抜けてしまったわたしは、結局また涙が止まらなくなって――

「……何？　何なの？」

何が起きたのかわからないさやかちゃんが、呆然と辺りを見回すのも構わず――

わたしは、また抱きついて泣き叫んでいたのでした。

○

「騙してたのね、あたしたちを……」
夜の橋の上で、さやかちゃんはキュゥべえに詰め寄りました。
「僕は魔法少女になってくれって、きちんとお願いしたはずだよ。実際の姿がどういうものか、説明を省略したけれど」
「なんで教えてくれなかったのよ!?」
「訊かれなかったからさ。知らなければ知らないままで、何の不都合もないからね。事実、あのマミでさえ最後まで気付かなかった」
その指摘に、わたしはスカートの端をぎゅっと握ります。
ほむらちゃんが、黙って去って――
杏子ちゃんが、激しく街灯を殴りつけてから飛び去って――
夜の鉄橋には、わたしとさやかちゃんと――そして、かわいらしい容姿に今や不吉としか言いようの無い赤い瞳を輝かせるキュゥべえだけがいました。
「そもそもキミたち人間は、魂の存在なんて最初から自覚できてないんだろう?」

そう言うと、キュゥべえはさやかちゃんの頭から胸元に視線を向けます。
「そこは神経細胞の集まりでしかないし――そこは循環器系の中枢があるだけだ。そのくせ生命が維持できなくなると、人間は精神まで消滅してしまう。そうならないよう、僕は君たちの魂を実体化し、手に取って、きちんと護れる形にしてあげた。少しでも安全に魔女と戦えるように、ね」
「大きな……お世話よ！　そんな余計なこと……」
そう唇を噛んで反論しようとするさやかちゃんを――
「キミは戦いというものを甘く考えすぎだよ、美樹さやか」
ひときわ冴え冴えとしたキュゥべえの声が遮りました。
「たとえばお腹に槍が刺さった場合、肉体の痛覚がどれだけの刺激を受けるかっていうとね……」
そう言って、キュゥべえはもといた手すりから地面に降り立つと、さやかちゃんの手のひらからこぼれ落ちたままのソウルジェムに軽く触れ――
「……ひっ」
わたしの目の前で、さやかちゃんはお腹に手を当て、倒れ込みます。
「ひっ――ッ!!」
「さ……さやかちゃん!?　さやかちゃん、大丈夫!?」

「これが本来の『痛み』だよ。ただの一発でも動けやしないだろう？」

キュゥべえは冷静な声で説明し――前足を、ソウルジェムから離しました。

「思い出したかい？　佐倉杏子との戦いを。キミはずいぶんと佐倉杏子の槍をその身に受けたはずだ。キミが最後まで立っていられたのは、強すぎる苦痛がセーブされていたからさ。キミの意識が肉体と直結してないからこそ可能なことだ。おかげでキミはあの戦闘を生き延びることができた」

肩で息をしながら、さやかちゃんは涙目でぐっとキュゥべえを睨みつけます。

そんなさやかちゃんに、キュゥべえは淡々と話し続けました。

「慣れてくれば完全に痛みを遮断することもできるよ。もっとも、それはそれで動きが鈍るから、あまりお勧めはしないけど」

「……何でよ……どうしてあたしたちを、こんな目に……」

顔を歪ませ、そう尋ねたさやかちゃんに――

「――どうして？」

キュゥべえは、いつもの調子で答えます。

「戦いの運命を受け入れてまで、キミには叶えたい望みがあったんだろう？　それは間違いなく、実現したじゃないか」

初夏の積乱雲が、もくもくと地平にありました。
爽やかな風が吹き渡り、時折、わたしの前髪を揺らしていきます。
真新しい見滝原の町並みは、今日も平和で、のどかで、優しくて――
そんな町並みを学校の屋上から見つめながら、でもわたしの心はずっと重苦しいままでした。

○

「ほむらちゃんは、知ってたの？」
そうわたしが尋ねると――
わたしの横で、ほむらちゃんが小さく頷くのを感じました。
「どうして……教えてくれなかったの？」
昼休みのチャイムと同時に、わたしは屋上にやってきました。
さやかちゃんは学校を休んでいて――ひとりでいろいろと考えをまとめたくてここに来たんだけど……
いつしかそこには、暁美ほむらちゃんがいました。
しばらくお互いに話しかけることもなく――わたしはフェンス越しに見滝原の町並みを

見るともなく見つめていて、ほむらちゃんはそんなわたしの横で黙って立ち尽くしていました。

「前もって話しても、信じてくれた人は今まで一人もいなかったわ」

その言葉にゆっくり振り向くと、そこには、いつもの冷たい瞳をわたしに向けたほむらちゃんが、長い髪を風に舞わせていました。

「キュゥべえは、どうしてこんな酷いことをするの？」

「あいつは、酷いとさえ思っていない」

ほむらちゃんは、まるで感情を窺わせない表情でそう答えます。

「人間の価値観が通用しない生き物だから。何もかも、奇跡の正当な対価だと、そう言い張るだけよ」

「ぜんぜん、釣り合ってないよ！」

わたしは、思わず叫んでいました。

「あんな身体にされちゃうなんて……さやかちゃんは、ただ好きな人の怪我を治したかっただけなのに……」

「奇跡であることに違いはないわ。不可能を可能にしたんだから」

「……」

「美樹さやかが一生を費やして介護しても、あの少年が再び演奏できるようになる日は来

なかった。奇跡はね、本当なら人の命でさえ贖えるものじゃないのよ。それを売って歩いているのが、あいつ」

その言葉で、夜の闇に不吉に浮かぶキュゥべえの赤い瞳が思い出されて――

不意に、わたしの足下が無くなるような感覚に襲われます。

「じゃあ……」

キュゥべえの瞳を追い払うようにひとつ首を振って、わたしは言い換えました。

「さやかちゃんは……もとの暮らしには、戻れないの？」

しばらく黙ってわたしの顔を見つめていたほむらちゃんは、わたしから目を背けて言います。

「……前にも言ったわよね。美樹さやかのことは諦めてって」

「でも……」

わたしは、あの小さな暗い工場跡で、たくさんの無表情な人たちに囲まれた時のことを思い出します。絶対に混ぜちゃいけない洗剤同士を混ぜて、集団自殺をしようとしたあの人たち。魔女に魅入られた仁美ちゃんと工場の人たち。そこに魔女の結界が現れて、マミさんの最期を無数のモニターに映し出されて。わたしは、あの時一度は諦めたのでした。これは、罰なんだって。マミさんとの約束を果たせなかった自分に与えられた罰なんだって。命を失うよりももっと深い絶望感とともに、わたしはわたしを諦めたのでした。

だけど――

「……そんなわたしを、さやかちゃんは助けてくれたの」

そう小さく呟くと、ほむらちゃんは顔を上げて見つめてきます。

「さやかちゃんが魔法少女じゃなかったら、あのときわたしも、仁美ちゃんも、死んでたの……」

「感謝と責任を混同しては、駄目よ」

ほむらちゃんは、冷たく言い放ちます。

「あなたには、彼女を救う手立てなんてない。引け目を感じたくないからって、借りを返そうだなんて、そんな出過ぎた考えは捨てなさい」

「……どうして？」

「……」

「ほむらちゃん、どうしていつも冷たいの？」

悔しくて、悲しくて――

きっと、すべてほむらちゃんの言ってることの方が正しいのに、わたしはほむらちゃんを睨みつけるようにそう言ってしまってました。

「そうね……」

すると、ほむらちゃんはどこか悲しそうに――

また、どこか遠くを見つめるように、わたしから視線を外します。
それから、ほむらちゃんは、中指で指輪となっているソウルジェムを見つめて言いました。
「それは、きっと――もう、人間じゃないから、かもね」
ほんの、二週間前――
わたしは、ただの中学二年生でした。
幸せで、温かな世界に生きる、ただの子供でした。
自分がどれだけ守られた世界にいたのか、それさえ知らず、気がつかず――
毎日を、のんびりとした悩みに包まれて暮らしていました。
けど、それは本当に、守られた世界で……
魔法少女として契約した少女たちの血の涙に囲われた世界で――
わたしは、ただそこで笑っていました。
もう、わたしには、あの日と同じように笑える日がくることはないのかもしれません。
マミさんの悲しそうな笑顔を知ってしまい、さやかちゃんの涙を知ってしまい……
そしてほむらちゃんの、冷たく、すべてを諦めたような眼差しを知ってしまった、今――
もう、同じように笑うことはできないのかもしれません。

そして、ことここに及んでも……

わたしには何もできないのでした。

キュゥべえにその理不尽を問い質すことも、ママや先生に相談することも。

さやかちゃんやほむらちゃんと同じように、魔法少女として契約することも。

すべての道が閉ざされて……ううん、道すら見えない闇夜を歩くように、ただ転ばないようにそれだけに気を遣って——ただ、目の前の暗い道を一歩一歩、どこに進んでいるのかさえあやふやなまま……毎日を過ごしているのでした。

来年は中学三年生で、高校受験がやってきて——

このまま、さやかちゃんや仁美ちゃんと同じように、見滝原高校に進んで。

そこでまた楽しく三年間を過ごして——できればそこで将来やりたいことを見つけて。

そして、すこしだけ自分の足で立てるように、しっかりとした考えを持てるようになって。

そうしたら、さやかちゃんに心配ばかりかけてるわたしじゃなくて、たまにはさやかちゃんを助けてあげられるようなわたしになっているはずで……そして、それが本当の友達であるはずで——

そこまで考えた時……

わたしは、はっとしました。

長い間、ずっと考えていた〝友達とはなんだろう〟という疑問の答え。

それは、どちらかが一方的に助ける関係じゃなくって、互いに困った時に助け合える関係じゃないのかなって、ふと思い至ったのでした。わたしは本当に自分に自信がなくって——だから、今までさやかちゃんに対しても、仁美ちゃんに対しても、どこか引け目を感じていて。わたしが一方的に助けられて、構ってもらってる、という意識が拭えなくって。そして、その正体は、わたし自身に対する自信のなさからくるものでした。

今、本当に、さやかちゃんは泣いて、苦しんでいて——

それなのに、一緒になって泣いているだけのわたしって何なんだろうって……気がついたのです。

もし、今——

キュゥべえが横にいて。

どんな願いでも叶えてあげるって言われたら。

わたしは、何を望むんだろう……？

さやかちゃんも、わたしも、みんなが幸せになるその方法——

でも、それが心の底からほんのすこしだけ浮かび上がったところで——すぐに、わたしの心を重すぎる現実が覆っていって……

やっぱりその答えは、深い闇の底に沈んでいくのでした。

「おはようございます、まどかさん」

いつものように、学校へと向かう途中でした。

仁美ちゃんと出逢ったわたしは「おはよ、仁美ちゃん」となるべく元気に返事を返します。

○

わたしの心とは正反対に、翌朝も気持ちのよい青空が広がっていました。

澄んだ空気の中、温かな日差しの下――

志筑仁美ちゃんは、もういつもと変わりない晴れやかな表情で笑いかけてきます。

あの日の翳はすっかり洗い流されていて――瑞々しい季節そのままに、微笑んでいました。

そしてそれはきっと――とてもいいことなんだと思います。

魔女に憑かれた人がいつまでも心に傷を負ったまま生きていくとしたら、世界の裏で懸命に戦ってくれたどこかの魔法少女が可哀想で――でも、そうは思うんだけど……

それでも、ほんのすこし。

こうして、たくさんの魔法少女たちの記憶はこの世界から消えていくんだって、悲しく

なります。

「あら、さやかさん」

その仁美ちゃんの声で、わたしが顔を上げると、

「あ、ああ。――おはよっ」

駅方向からの道が合流する通りで、さやかちゃんが手を振りました。

さやかちゃんは、いつものショートカットがとても似合っていて、陽の光を浴びたその笑顔はいつものように元気いっぱいで――

「さ、さやかちゃん、おはよー！」

わたしもめいっぱいお腹の底から元気を出して、そう挨拶します。

でも――さやかちゃんと小学生の頃から一緒のわたしには、その笑顔が作り物であるとすぐにわかりました。よく見れば、瞳はガラス玉のようにしか輝いていないし、動作は、どこかがぎこちないのでした。

「昨日は、どうかしたんですの？」

「んーと……ちょっとばかり、風邪っぴくてね」

懸命に明るく答えるさやかちゃんだけど、わたしは、逆に心配になります。

思わず、ホントに大丈夫？　と問いかけようとした、その時――

（大丈夫だよ。もう平気。心配いらないから）

すかさず、頭の中にさやかちゃんの声が響きました。
「もう熱も下がったし、全然平気！　さーて、今日も張り切って――」
そう、さやかちゃんがことさら元気よく両腕を空に伸ばしかけたところで――
わたしたちは、前方に、ひとりの少年の姿を見つけました。
それは――
松葉杖をつきながら登校途中の、上条恭介くんでした。
「あら……上条くん、退院なさったんですの？」
驚いたように、そう呟く仁美ちゃんだったけど――
さやかちゃんはただ黙って、懸命に一歩一歩進む、上条くんの背中を見つめ続けていました。

「上条、もう怪我はいいのかよ？」
クラスに戻ってきた上条恭介くんは、男子女子問わず、まるで転校生のようにみんなの注目を浴びていました。久しぶりに登校したこともあると思うけど、それ以上に、上条くんの明るい、生の輝きに満ちた笑顔が、皆を引き寄せているんだと思います。
「家に籠っていたんじゃリハビリにならないしね。来週までに松葉杖なしで歩くのが目標なんだ」

クラスの男の子たちに囲まれて、上条くんは笑顔で答えていました。
「上条くん、とても明るくなりましたわね」
「え……うん、そうだね」
仁美ちゃんも嬉しそうにそう言うけど——
わたしは、さっきから上の空のさやかちゃんが心配でなりませんでした。
「良かったね、上条くん」
その様子に我慢できなくなって、わたしがそっと声をかけると、
「……うん」
さやかちゃんは、どこか遠くを見つめるように頷きます。
「さやかちゃんも行ってきなよ。まだ、声をかけてないんでしょ？」
「あたしは……いいよ」
小さくそう呟くと、さやかちゃんは自分の席に戻り、顔を伏せてしまいます。
それはまるで——さやかちゃんの持っていた明るさのすべてが上条くんに移ってしまったようで。
そして、さやかちゃんがそんな自分を恥じているように思えてしまうのでした。
「……さやかさんと上条くん、うまくいってないんですの？」
突然、仁美ちゃんが囁くように訊いてきて——

「え……いや、そんなことないと思うんだけど……」

どう答えてよいかわからなくて俯いていると、仁美ちゃんは、ふうんと黙り込んでしまいます。

それからも、上条くんの席の方からは、明るい笑い声が聞こえてきました。

そのさざめきは、幸せそうで、温かなものであるのに——なぜか、それがまるで鋭い刃のようにさやかちゃんを切り刻んでいる気がしました。机でひとり腕の中に頭をうずめているさやかちゃんだけに、別の時間が流れているように思えました。

もちろん、誰にも罪はなくって——

それでも、仁美ちゃんにしろ、上条くんにしろ、魔法少女という存在に救われたことすら覚えていないことがどうしようもなく悲しいのです。その幸福と引き換えに、どこかでひとり苦しむ魔法少女がいて——そして、そのおかげで今の幸せがあるんだって気がついてもらえないことが、どうしてもうまく呑み込めないのです。

いつしかわたしは心の中で、もうやめて、と叫んでいました。

そんなに楽しそうに笑わないで。

幸せそうにしないでって……そんな勝手なことを祈っているのでした。

そして、どこか居心地の悪いその日の授業も終わり——

わたしとさやかちゃんが帰り支度をしていた放課後のことでした。

「――さやかさん、まどかさん」
すでに帰り支度を整えた仁美ちゃんが、わたしたちの後ろに立っていました。
「すこし、お話があるのですけど……いいかしら」
その仁美ちゃんの眼差しは――
どこか潤んでいて、それでいてその奥に燃えるような決意があって――
顔を上げたさやかちゃんも、わたしも――
気圧されるように、頷いてしまっていました。

「……話ってなに？」
いつものファーストフード店で、わたしとさやかちゃんは、仁美ちゃんと向き合うように座っていました。
目の前のアイスティーを一口すすると、仁美ちゃんはまっすぐにわたしたち――ううん、どちらかといえば、さやかちゃんを見据えて言います。
「恋の相談、ですわ」
その言葉に、わたしもさやかちゃんも息を呑みました。
「私ね、前からさやかさんやまどかさんに秘密にしてきたことがあるんです」
何かとてもよくないことが始まる気がして――

わたしの心臓が、ただとくとくと高鳴り始めます。
「秘密……って？」
そう訊き返す、さやかちゃんの声もどこか掠れていました。
仁美ちゃんは、ひとつ息を吸い込むと、そこから一息に言います。
「ずっと前から――私、上条恭介くんのことお慕いしてましたの」
「……」
「……」
……やめて。
……今、そんなことを言わないで。
わたしの心は、そう叫んでいました。
けど――
「……そ、そうなんだ」
やがて、さやかちゃんは固い笑顔で応えます。
「あ、ハハ……まさか仁美がねぇ。なーんだ、恭介のヤツも隅に置けないなぁ」
それは、動揺を押し隠そうとして無理矢理笑っているようで……わたしは隣で何も言うことができませんでした。
仁美ちゃんは、見たことも無いほど緊張した顔つきで、そしてどこか震える声で続けま

す。

「さやかさんは、上条くんとは幼馴染みでしたわね」

「あ……うん、そう――まあ、腐れ縁ていうか、なんていうか」

「本当に、それだけ？」

「……」

「私、決めたんですの。もう自分に嘘はつかないって」

意を決したように、仁美ちゃんはさやかちゃんをまっすぐに見つめて言いました。

「あなたはどうですか？　さやかさん、あなた自身の本当の気持ちと向き合えますか？」

「仁美……」

「私、明日の放課後に上条くんに告白します」

その言葉は――

かろうじて繋がっていた、何か大切なものを断ち切っていました。

ぐらり、と何かが傾き、ゆっくりと暗黒の坂を転がり始めたのを感じます。明るい音楽の響くファーストフード店が、まるで映画のセットのように作り物であるような気がしていました。

「丸一日だけお待ちしますわ。さやかさんは、後悔なさらないよう決めて下さい。上条くんに――気持ちを伝えるべきかどうか」

こんなことになってしまう前にも、一度だけ――

さやかちゃんの顔が苦しく歪んでいるのを見たことがありました。

それは、小学六年生の夏休み前のこと。

さやかちゃんの家で飼っていたロッキーが、死んだ日のことでした。

『――あいつはね、不思議な犬だったんだ』

泣きはらした瞳で、遅刻して学校に来たさやかちゃんはそう呟いていました。

『雑種だし、拾ってきた犬だったんだけど……あたしの元気がない時はすぐにわかって、気がつくといつでも横にただ座ってくれたんだ。何を言うわけでもない。鼻をすりつけてくるわけでもない。けど、気がつくとそっと横にいるんだ。あたしはバカだから、あいつに向こうに行ってろ、とか言っちゃったりしてさ――そうすると、どこか悲しそうにすこしだけ離れて。大好きな散歩にも行かず、ご飯も食べず、あたしが元気を取り戻すまで、ずっと近くにいてくれて――まるで、あたしの心に乗っかった重いものを一緒に支えるように、いつもいつもそこに居てくれるやつだった』

先生が来るまでの間、さやかちゃんはそう掠れた声で呟いていました。

わたしはたださやかちゃんの席の横に立ち尽くし、その言葉を聞いていました。

『大ってなんで、あんなに人の気持ちがわかるんだろ？　言葉も話せないし、道具を使えるわけでもないのに――一番大事なことをちゃんとわかってて、いつも人に寄り添ってくれてる。けして大の方から人を裏切ることはないんだ。どんなにあたしが邪険にしても、信頼し続けてくるんだ』

『……さやかちゃんのことが大好きだったんだよ』

わたしがそう言うと、さやかちゃんは、大粒の涙をぼろりとこぼして首を振りました。

『あたしは好かれるようなことなんてしてない。あいつがあたしにくれたものをぜんぜん返せてない』

そう言って――

耐えきれなくなったさやかちゃんは、教室でわんわんと泣き始めていました。

やがて教室にやってきた先生も驚いて、教室中が大騒ぎになったんだけど――

あの時のわたしは――

ただ、どうしてよいかわからずにさやかちゃんの肩に手をかけて、一緒に目に涙を溜めていただけだったけど……今、不意に、ロッキーの気持ちがわかるような気がしていました。

きっと、ロッキーも今のわたしと同じようなことを思っていて――
大好きだよって伝えるにはどうしたらよいかわからなくって、困っていて、ただ寄り添うことしかできなかったんじゃないかって……そう、思うのです。
ファーストフード店から家に帰り着いて、制服から着替えもせずにずっと、さやかちゃんにどうしてあげたらいいのか考えていたら、突然、あの日のことを思い出したわたしでした。
今のわたしは、まるで犬のロッキーのような存在で――
一方的に心配かけて、いつも気にかけてもらって……その有り難さをどうしたらさやかちゃんに伝えられるのかいつも考えているような、そんな存在でした。
そのことに気がつくと――
わたしは、立ち上がっていました。
時計を見ると、もう六時近くになっています。
一階では、パパが夕食のしたくをしていて、ママは多分また遅いのでタツヤと三人の食事が始まる時間だったけど――わたしは部屋を飛び出していました。
「まどか、もう食事だよ?」
玄関で靴を履いていると、エプロン姿のパパがそう声をかけてきます。
「えっと……ちょっとそこまで。友達と会ってくる。すぐ戻るから」

嘘の苦手なわたしは、そう矢継ぎ早に答えて、何かさらに訊かれる前に家から飛び出していました。

そうだ――

わたしに、今、できること。

それは、ただどこまでも寄り添うこと。

どこまでも、どんなことになっても、さやかちゃんに寄り添ってあげるだけなのでした。もっとちゃんと役に立ってあげたいけど、それが具体的にどうすることなのか浮かばないので仕方がありません。でも、ロッキーのようにただ寄り添ってあげることで、さやかちゃんの心がすこしでも軽くなるなら……こんなわたしもすこしだけ存在する意味があるんじゃないのかな、と思ったのでした。

夕闇が濃くなる町並みを駆け抜け、懸命にさやかちゃんの家へと向かいます。

息を切らし、何度か転びそうになり、それでも必死に駆け続けて――

さやかちゃんの住むマンションの入り口にたどり着いた、その時でした。

エントランスの明かりに照らされながら、さやかちゃんが出てきました。

キュゥべえがそばにいるのを見て――これからまたひとりで魔女退治に行くところだとわかり、間に合った、とほっとします。

「さやかちゃん」

そう声をかけると、びっくりしたようにさやかちゃんはこちらを見ました。
「まどか……あんた、なんで？」
「ついてって、いいかな？」
切れた息を整えながら、わたしはそう告げました。
「さやかちゃんに、独りぼっちになってほしくないの。ただ、さやかちゃんのそばにいたいの。何の役にも立たないけど、わたしがそうしたいの。だから……」
結局、いつものように気持ちをうまく伝えられないわたしだけど……
そう言うと、さやかちゃんの瞳がみるみる潤んでいくのがわかりました。
「あんた、何で……何でそんなに、優しいかなぁ……あたしには、そんな価値なんてないのに……」
そう言うと、突然顔を手で覆いました。
「あたし……あたしさ」
咽ぶような声で、さやかちゃんは言います。
「今日、後悔しそうになっちゃった」
その言葉で、わたしはファーストフード店でのことを思い出します。
仁美ちゃんも上条くんのことが好きだって知った時の、何かが切れたような気持ちを思い出します。

「あのとき仁美を助けなければって……ほんの一瞬だけ、思っちゃった……正義の味方、失格だよ……マミさんに、顔向けできない……」

肩を震わせてそう苦しげに呟くさやかちゃんの背中に――

わたしは、自然と手を伸ばし、そしてそのまま抱きしめていました。

だけど、やっぱりわたしの口からは気の利いた言葉なんて出てきません。バカみたいだけど、そのまま懸命にさやかちゃんの背中をさするように、さやかちゃんの身体から溢れてくる哀しみを受け止めていました。

「仁美に、恭介を取られちゃうよ……」

「……さやかちゃん」

「でも……あたし、何もできない……」

泣きじゃくるさやかちゃんの哀しみは――

わたしなんかじゃ受け止めきれないほど大きなものでした。

初めて、さやかちゃんが上条くんのことが好きだと知った時から、どれほどの時間が経ったんだろう。男勝りで、いつも明るいさやかちゃんが、上条くんのことを話す時だけ、どこか照れたように女の子の顔を見せるのを、わたしはどれだけ目映い思いで見つめてきたんだろう。

わたしの瞳からも、後から後から涙がこぼれ落ちていく中――

「だって、あたし……もう死んでるんだもん……ゾンビだもん……こんな身体で、抱きしめてなんて言えない……キスしてなんて、言えない……」

冷たく降り注ぐ、青い月明かりの下で——ただ、さやかちゃんの嗚咽まじりの声が響いていました。

きっとあの時、断ち切られたものは——

さやかちゃんがずっと夢見ていた、上条くんとの未来で——

普通の女の子が、普通に夢見ていただけのささやかな願いでした。

その目映い願いの中心には、教会があって……そして、大人になったさやかちゃんと上条くんが結婚式を挙げているのでした。

たくさんの白い鳩が舞い上がる中——

誰もが幸せいっぱいの笑顔で、ふたりを祝福していて。

そこからの人生には、もう思い悩むことなんて何もなくって。

青空だけが広がり、ずっと春だけが続いていくような世界で。

でも——

そのすべてが、夢に過ぎなくって。

もう何をどうしても叶えられなくなったと思い知らされて。

いつか叶えられたかもしれないその希望が、あの時、無情に断ち切られていて——

さやかちゃんの背中に置いた手からは、世界を覆い尽くすような、痛みと、苦しみと、哀しみが渦巻くように伝わってきました。ひとりでは押しつぶされそうなほどのその重みを、ただ必死にさやかちゃんの横に寄り添うことで、なんとか受け止めようと願うわたしだったけど――

暗くなっていく町並みと共に、わたしの心も哀しみに潰されていくのでした。

○

「〝影〟の魔女――その性質は〝独善〟。属性は〝影〟。見た通り、影絵に似た結界に潜み、使い魔との連携では最上位に位置する強力な魔女だよ。気をつけて、さやか」

そんなキュゥべえの言葉が響く中――

「がんばって、さやかちゃん……！」

わたしはただ両手を握りしめて、やっぱり応援することしかできません。

キュゥべえの言葉通り、その魔女の結界の中は、気味の悪い影絵が浮かぶスクリーンのようで――そこから次々に襲いかかる、蛇のような使い魔たちの攻撃を、さやかちゃんは必死に防いでいました。

けたけたと嗤う声が響き渡り、悪意を持った気味の悪い足音がわたしたちを囲んでいき

ます。予想もできないタイミングで、予想もできない場所から繰り出される使い魔の攻撃を、さやかちゃんは懸命に長剣で弾くけど――でも、それはいつも一歩遅くて……伸びた影は、さやかちゃんの身体に突き刺さり、切り裂いていきます。

「くッ……」

倒しても倒しても湧き出る使い魔の攻撃に、きりがないと思ったのか――

さやかちゃんは一度周りの影を剣で弾き飛ばすと、その奥で待ち受ける魔女の本体へと駆け出しました。

けれど、駆け寄ると同時に繰り出されたさやかちゃんの攻撃は、あと少しのところで届かなくって――逆に、魔女の身体から伸びた無数の影に呑み込まれてしまいます。

「さやかちゃん、危ない……！」

わたしが思わず叫んでしまった、その時――

「ったく……見てらんねえっつーの」

不意に現れた、もうひとつの影。

それは、長い髪を結った見覚えのある影で――

長い、長い、槍を構える、佐倉杏子ちゃんのものでした。

杏子ちゃんは、一度くるりと槍を回転させると、ものの見事にさやかちゃんを取り込んだ影を斬り飛ばしました。

「いいからもう、すっこんでなよ。手本を見せてやるからさ……」
そうさやかちゃんを庇うように、魔女へと一歩踏み出した杏子ちゃんに――
「邪魔、しないで……」
ゆらり、とさやかちゃんは立ち上がります。
「おい、おまえ――」
「一人で……やれるわ」
低い声で呟くと、さやかちゃんはふらつく手で長剣を構え直します。
そして杏子ちゃんを突き飛ばすように――再び、魔女へと突進し始めました。
そこに再び地中から、無数の太い蛇のような魔女の攻撃が迫って――さやかちゃんの身体に突き刺さると同時に、さやかちゃんは渾身の力で長剣を振り抜きます。
それは、相打ちといった感じで――
さやかちゃんものけぞる代わりに、魔女の枝もばらばらに切り刻まれていました。
「……さやかちゃん!?」
再び倒れ込んださやかちゃんの血の吹き出し様があまりにもひどくて――
思わず、わたしは叫んでしまいます。
けど――
けれど、そこに、くすくすと誰かの笑う声が響きました。

「……はは、ホントだぁ……」

それは、さやかちゃんの声でした。

今までに聞いたこともないような声色で――いつまでも楽しげに笑っていました。

「……あはは……その気になれば、痛みなんて……完全に消しちゃえるんだぁ……」

それは、とてもうそ寒くなるような声で――

まるで、いつものさやかちゃんの面影を残していなくって――

肩を、胸を、お腹を、膝を――魔女の枝に突き刺されて、血まみれになったさやかちゃんの乾いた笑顔は、わたしをぞっとさせるのでした。

「アンタ、まさか――」

杏子ちゃんの息を呑む声が聞こえてきた瞬間、ゆらり、とさやかちゃんは動き出します。

ふらふらと近づくそんなさやかちゃんに、魔女はどこか怯えたように次々と鋭い攻撃を繰り出します。そしてそれを避けもせずに、さやかちゃんも長剣を振りかざし――さやかちゃんの身体からは血が噴き出していくけど、その度に、魔女も次々と影の使い魔を無くして追いつめられていくのです。

けど、それは――

あまりにも見るに堪えないもので――魔女と魔法少女の戦いというより……いつかテレビで見た、アフリカの動物たちの身体と身体、力と力だけでぶつかり合う殺し合いのよう

で……

見守ってあげないといけないのに――

わたしはいつしか顔を背け、

「やめて……もう、やめて……」

そう、声にならない声で叫んでいました。

けれど、さやかちゃんの乾いた笑い声だけはいつまでも耳に届き続け――

やがて、ガラスの割れるような音とともに――辺りは静かになったのでした。

第八章　わたし、サイテーだよ

「はん、やり方さえわかっちゃえば簡単なもんだね……これなら負ける気がしないわ」

さやかちゃんの声が響いて、そっと目を開けると——

そこは、影絵のような魔女の結界が消えていくところでした。

べきべきと形を無くしていく世界の中心で——

さやかちゃんが、立ち尽くして笑っていました。

その藍色の衣装はあちこちが破れ、黒ずんでいました。

いえ——黒じゃなくって……それは血でした。さやかちゃんの身体から流れ出た血で、衣装が黒く見えるだけなのです。

「……さやか……ちゃん」

その声に、振り向いたさやかちゃんの片目は潰れていました。何かどろどろとしたものが目があった場所から流れ出ていて、唇の端からも、鼻からも、その他至るところに血が滲んでいました。腕の一部は裂け、足も骨が見えるほど抉られていました。生きているのが不思議なほど——さやかちゃんは、ぼろぼろに切り刻まれていました。

「ひっ……」

わたしの喉が鳴った瞬間――

さやかちゃんのソウルジェムが温かく輝き始めます。そして、その光はさやかちゃんの身体中に広がり、傷口に留まり、また目映く光り始めます。そうして見る見るうちに、さやかちゃんのすべての傷は癒され、元の形へと整えられていくのでした。

いつものさやかちゃんに戻った、その時――

魔女の死骸は、塵のように消え去り、結界も消え失せていました。

後には、鈍く光るグリーフシードがひとつ残されています。

ゆっくりと近づいてそれを拾ったさやかちゃんは、

「あげるよ。そいつが目当てなんでしょ？」

そう言って、グリーフシードを杏子ちゃんに放り投げます。

「おい……」

「あんたに借りは作らないから。これでチャラ。いいわね」

そう言い放つと、わたしの方に向き直って――

「さあ、帰ろう。まどか」

さやかちゃんは、力なく微笑みました。

けど――

けど、わたしの身体の震えは止まりませんでした。

まだ、さっきのぼろぼろになったさやかちゃんの姿が目蓋の裏に焼き付いていて――
足が動かせなかったのです。
「なに震えてんのさ？　もう大丈夫だってば」
そう言って、さやかちゃんはソウルジェムを一度光らせ、元の制服の姿に戻ります。
それでも……わたしには、そこに立っているのが、わたしの知っているさやかちゃんじゃないような気がして――
何と答えてよいのかわかりませんでした。
「……うゥ」
その時、不意に、さやかちゃんは身体をよろめかせます。
それで、わたしはようやく我に返って――慌ててさやかちゃんを支えます。
「……無理しないで。掴まって」
さやかちゃんは、何も言わずわたしに身体を預けてきてくれたけど――
「ちょっと、疲れちゃった……」
そのさやかちゃんの小さな呟きに、ついさっきまでこの肌が、骨が見えるほど傷ついていたことを思い出して――
わたしは不意にこみ上げてきた涙を、必死に我慢するのでした。

杏子ちゃんは、追ってきませんでした。
わたしとさやかちゃんは、ふたりでよろめくようにもうすっかり暗くなった道を歩きます。
たくさんの血を流したせいか、それとも魔力を使いすぎたせいなのか——
街灯に照らされるさやかちゃんの顔は怖いほど白く透き通っていました。
唇に血の気はなく、瞳は虚ろでした。
ぽつり、と頬に水滴を感じて——
暗い空を見上げると、雨が降り出していました。
ぽつり、ぽつりと雨に濡れながら、わたしたちは一歩、一歩と町へと戻ります。
気のせいか、指輪へと戻ったさやかちゃんのソウルジェムが、いつものような鮮やかな青でなく、どこか弱々しい、淡いものとなっているのが心配になったけど——温かな光を目指して、温かな安らぎを目指して、わたしたちは歩き続けました。
それでも、さやかちゃんの足は今にも転びそうなほどおぼつかなくって——一度どこかで休憩しないと、と思っていたその時、わたしは前方にバスの停留所があることに気がつきます。
「あそこ……さやかちゃん、あそこで雨宿りしよ？」
そう言うと、わたしはさやかちゃんの身体を引きずるように、バス停へと足を向けまし

た。

透明な筒状のパネルで覆われたそこには、ちゃんとベンチもあって、灯りもあって——とにかく一息つくことができそうでした。バスの運行はもう終わっていて、ここで待っていても町まではまた歩いていかなくてはならなかったけど、それでもここで一度休むのが一番だと思えました。

ベンチに沈み込むように座るさやかちゃんは、とても疲れきっていて——まだ肩で息をするように、何度も身体を上下させています。

わたしもさやかちゃんの隣に座り込んで、夜の町を見つめ——そして、さっきのさやかちゃんの戦いを思い出して、身体が震え出します。あんな戦いを続けていたら、近いうちにさやかちゃんは本当に死んでしまうような気がして仕方がありませんでした。

「さやかちゃん……あんな戦い方、ないよ……」

しばらく、互いに無言でそこに座っていたわたしたちだったけど——

やがて、わたしはそう言っていました。

「痛くないなんて、嘘だよ……見てるだけでも、痛かったもん。感じないから傷ついてもいいなんて、そんなの、駄目だよ……さやかちゃん、いつか本当に壊れちゃうよ」

「……ああでもしなきゃ、勝てないんだよ。あたし、才能ないからさ」

「あんなやり方で戦ってたら、勝てたとしても、さやかちゃんのためにならないよ……」

「……あたしのためにって、何よ？」

その冷えた声色に、そくりとしてさやかちゃんの方を見ると――さやかちゃんは立ち上がって、光の小さくなったソウルジェムをわたしの方に突き出していました。

「こんな姿にされた後で、何があたしのためになるっていうの？」

「……」

「今のあたしはね、魔女を殺す――ただそれだけしか意味のない石ころなのよ。死んだ身体を動かして生きてるフリをしてるだけ。そんなあたしのために、誰が？　何をしてくれるっていうの？　考えるだけ無意味じゃない」

「でもわたしは……どうすればさやかちゃんが幸せになれるかって……」

涙声で、そう告げた瞬間でした。

「だったら、あんたが戦ってよ！」

「……」

「キュゥべえが言ってたじゃん。あんた、誰よりも才能あるんでしょ？　あたしみたいな苦労しなくても、簡単に魔女をやっつけられるんでしょ!?」

それは――

『まどかが魔法少女になれば、マミよりずっと強くなれるよ』

いつかキュゥべえが告げた言葉で――

でも、そんなことはとてもわたしには信じることができなくって——

だって、何をするのも遅くって、自分がどう考えててどうしたいのか人に伝えることすらうまくできなくって、第一、自分が本当に望む願いが何かすらわからないわたしが——そんなすごい魔法少女になれるなんてとても信じることができなくって——

「あたしのために何かしようっていうんなら、まずあたしと同じ立場になってみなさいよ！無理でしょ？　当然だよね。ただの同情で人間やめられるわけないもんね！」

言葉を無くしたわたしに——さやかちゃんは叫び続けます。

「何でもできるくせに何もしないあんたの代わりに、あたしがこんな目に遭ってるの。あたしがあんたたちの代わりにこんな辛い思いをしてるの」

一言叫ぶごとに——

さやかちゃんのソウルジェムが、光を無くしていくようでした。

さやかちゃんのどうしようもない苦しみを表すように、暗く輝き始めているようでした。

「それを棚に上げて——知ったようなこと言わないで」

まだふらつく足のまま、さやかちゃんは、雨の中にゆっくりと歩いていきます。

その髪を、制服を、いつの間にか激しくなった雨が濡らしていきました。

「……さやかちゃん」

思わず立ち上がって、そう言いかけたわたしに——

「ついて、こないで」

ぞっとするような冷たい声と眼差しで、さやかちゃんはわたしに告げます。

そのまま駆け去っていくさやかちゃんを――

わたしは、追いかけることもできずに、その場に縫い付けられたように、ただ、見つめていました。

魔法少女が誰かの為に苦しんでいるなんて……わたしはわかったつもりでいて――今朝の教室でも、上条くんや仁美ちゃんが楽しそうにしているのを、どこか責めるような気持ちになっていて――そんなことを全部わかったような気になっていて、全然、わかっていなかったのです。

何もかも、全部……

まったく、わかっていなかったのです。

○

「――はい、というわけで荘園制度というのは食料の確保と治安維持にとって非常に大事な制度であると同時に、後の身分制度へと繋がっていってしまうものなのです。後にバブルを生む日本の土地神話は、実は、この時、確定したといっても過言ではないんですね！」

歴史の浪岡先生のきびきびとした声が教室に響くけど——

その話は、まるでわたしの頭の中に入ってきませんでした。

どうしても斜め前のさやかちゃんの様子が気になって、何度も見てしまいます。

あれから二日間——わたしとさやかちゃんは一言も話せずにいました。

朝、仁美ちゃんとわたしがいれば、さやかちゃんは避けるように通学したし、さやかちゃんと仁美ちゃんがいれば、わたしが近付き難くて、すこし離れて通学する有様でした。

『ついて、こないで』

あの晩の見たこともないような、さやかちゃんの冷たい視線と言葉が……わたしをさやかちゃんの前に立たせる勇気をどうしても阻んでしまうのです。

——あれからも、ひとりで魔女を退治しているのかな……？

そう思うと、心配で、同時にどこか怖くなってしまう自分がいました。

あの晩のさやかちゃんは、体中血まみれで、空っぽな笑い顔を浮かべて——ただ人形のように剣をふるっていました。その姿は声もかけられないほど、恐ろしくて、悲しくて——このままじゃいけないって思うけど、でもどうしたらよいのかわたしには全然わからないのでした。

教室には、いつもと変わりない風景が広がっていて——そこに、さやかちゃんがひとりで浮いているようでした。さやかちゃんがこれだけ苦しんでいるのに、何も変わらず流れ

ていく時間が不思議でなりませんでした。
やがて、その日の授業が終わり――
わたしは急いで昇降口に向かいます。
偶然ここで会った感じで――さやかちゃんに「一緒に帰ろう」と言おうと決めていました。
けれど――その時でした。
「今日もバイオリンの稽古ですの？」
そんな聞き覚えのある声がして顔を上げると――
そこには、下駄箱で靴を履き替えた上条くんに話しかける仁美ちゃんがいます。
わたしはなぜか下駄箱の陰に身を潜めて、ふたりの様子を窺ってしまいました。
「志筑さんも？」
「そ、そう……私も、ピアノのお稽古があって」
「お互いに大変だね」
「……ええ」
そんな会話を交わしながら、ふたりは連れ立って昇降口から出て行きました。
そのふたつの背中は――
近寄ろうとしては、離れて、また寄り添うように、わたしから遠ざかっていきます。

上条くんと仁美ちゃんは、時折、顔を合わせ、楽しげに笑い合っていました。
……どうしてなんだろう？
上条くんは、今再びバイオリンを演奏できる喜びでいっぱいで——
仁美ちゃんは仁美ちゃんで精一杯の恋をしているのはわかってて。
そこに、さやかちゃんの絶望を想像する隙間なんてないのはよくわかっているんだけど
……それでも、今、上条くんの隣で笑っているのがさやかちゃんでないのが、不思議で、悲しくて——
「……あ」
気がつくと、わたしの後ろには、さやかちゃんがいました。
暗く、空っぽな瞳で、上条くんと仁美ちゃんが遠ざかっていくのを見つめていました。
「さ……さやかちゃん」
わたしの呟きなんて耳に入らないように、ふたりを見つめていたさやかちゃんは——
やがて、黙って靴を履き替えると、その場から立ち去ります。
わたしは声をかけることもできずに——
結局、その悲しげな背中をいつまでも見つめているだけなのでした。

——今日こそ、さやかちゃんに話しかける。

そう心に決めて、次の日、わたしは家を出ました。

けれど、通学路でさやかちゃんに会うこともなく、結局、教室でも誰も寄せ付けないような雰囲気のさやかちゃんに気圧されて、授業が始まってしまいました。

「——まどか」

ふと、足下から声がして——

見ると、そこにはキュゥべえが、白く長いしっぽをふわりと振っていました。

一瞬、びっくりしてクラスを見回すわたしだけど、考えてみたら、キュゥべえの姿はみんなに見えないし、その声もわたしにしか聞こえないのです。

（……どうしたの？）

そう尋ねると、

「美樹さやかの消耗が、予想以上に早い」

相変わらずかわいらしい声で、ひときわ重い事実を伝えてきます。

（…じゃあ、なんとかしてよ）

わたしが思わず心でそう訴えると、
「それはできないよ。一度、契約したら、それはもうとんなことがあろうと取り消せないんだ。現に、美樹さやかの願いは叶っているわけだし」
その言葉に、わたしはそっと顔を横に向けます。
そこでは、机の横に松葉杖を立て掛けた上条くんが、真面目な顔つきで、先生の言うことをノートに書き留めていました。
「さやかは、もう僕の言うことも聞かないよ」
とこか諦めたようなその口調に、わたしがキュゥべえを睨むと——
「止められるとしたら、キミだけかもしれない」
キュゥべえはそう言い足しました。
「でも……」
思わず、口に出しかけて——
わたしは授業中だということを思い出して、慌ててまた心の中で呟きます。
(でも、わたしの言うことだって、さやかちゃんは——)
あの晩言われた、さやかちゃんの言葉が胸を刺します。
『何でもできるくせに何もしないあんたの代わりに、あたしがこんな目に遭ってるの』
それと同時に、いつかマミさんが言っていた言葉も思い出します。

『――あなたも気付いてたのね、この子の素質に』

それは――

たしか、マミさんに抱えられて病院に向かう途中のことでした。

ほむらちゃんが現れて、そして、マミさんがほむらちゃんに言った言葉でした。

――わたしの、素質。

そんなものをすこしも信じられないわたしです。

キュゥべえが言っていた言葉だって、わたしを契約させようとする誘い文句だって今は思うけど――

……でも、じゃあ、マミさんは？

マミさんは、魔法少女なんて憧れるものじゃないって言ってくれてました。

そのマミさんが、素質がある、なんて嘘でも言うのかな……？

そんなことを考えていたら、チャイムが鳴り響いて――

「じゃあ、今日はここまでにしましょう」

先生の声がして、日直の「起立（きりつ）」という声が響き、わたしは慌てて立ち上がっていました。

昼休みとなり、黙って教室を出て行こうとするさやかちゃんの背中を見て――

わたしは、急いで追いかけます。

「……さ、さやかちゃん！」

そう、その背中に声をかけていました。

足を止めたさやかちゃんは――

黙って、振り返ってくれます。

けど、いつだって明るい笑顔で「なに、まどか？」と答えてくれたさやかちゃんは――

虚ろな瞳で、わたしを見つめ返して言いました。

「……なに？」

その瞳は、どこまでも空っぽで――

暗くて、深い井戸のように底知れなくて――

そして、ほんのわずかな悲しい光だけがありました。

「わ、わたし――」

小学生の頃、初めてさやかちゃんと出逢った時から――わたしたちはたくさんケンカもしました。

それはとてもささいなことで、今思い返すと笑っちゃうようなことだったけど――数日、口をきかないことだってありました。けど、そんな時、必ず最初に謝ってくれるのはさやかちゃんの方で……だけど、それはそれだけさやかちゃんの方が勇気があるからで……だから、わたしも安心して「わたしの方こそごめんね」って言えたのであって――

今日は、わたしの方から勇気を出さなきゃいけない番でした。
「わたし……あの」
けど――
そこから先の言葉が、どうしても出てこないのでした。
わたしも魔法少女になる、と言えばいいの……？　それとも、今日からまたわたしも魔女退治について行く――そう言えばいいの？　それが友達ということなの？　それで、さやかちゃんが幸せになれるの？　ママは、誤解されるか、諦めるかって言ってたけど――今のさやかちゃんを幸せにするにはどうしてあげたらいいの？　わたしは、さやかちゃんを諦めたくない。ずっとずっとふたりがおばあちゃんになるまで、いつまでも友達でいたい。でも、友達ならどうしてあげるのが正しいのかわからなくって――
……こんなに。
……こんなに、さやかちゃんが大好きなのに。
なぜか、そういう思いだけが心いっぱいに広がって、だけどいまそんなことを言ってもどうしようもないことだけがわかって――結局、わたしの口からは何も言葉が出ることはなく、代わりに涙だけが溢れてしまいました。
その瞬間、さやかちゃんの口元が動きかけて――
そのからっぽな瞳の底に、いつものさやかちゃんが見せる明るい何かが浮かびかけて――

その光に後押しされるように、わたしは決意していました。
——ごめんね、さやかちゃん。
とにかく、そう言おう。
さやかちゃんから謝ってくれる前に。
今度こそ、わたしの方から「ごめんね」って言おう。
そう決心して、わたしが口を開きかけたその時——
さやかちゃんは、何かを呑み込むように口を閉ざし、わたしに背を向けて。
「……用が無いなら、行くね」
そのまま振り返ることもなく、去って行ってしまったのでした。
遠ざかるその背中を見つめながら——
追いかけることもできないわたしは、やっぱりどうしようもない弱虫でした。

○

次の日、さやかちゃんは学校に来ませんでした。
わたしは授業中ずっと、空っぽのさやかちゃんの席を見つめていて——
先生は病気だって言ってたけど、どうしてもわたしには嫌な予感がしてならなくて——

どれだけ明るいことを思い浮かべようとしても、心が暗く塗りつぶされていくような気持ちだけがありました。もう二度とさやかちゃんと会えないような——そんな不安だけがありました。

だから、学校が終わるなり——

わたしは、さやかちゃんの家へと駆け出します。

駆けて、駆けて、駆け続けて——

さやかちゃんのマンションにたどり着いて、エントランスにあるオートロックの受付口でさやかちゃんの家のチャイムを鳴らします。

「あの、鹿目まどかです。さやかちゃんの友達の、まどかです！」

わたしはそう叫んでいました。

「さやかちゃん、病気だって聞いて——あの、すこしでいいんです。顔だけ見れたらすぐ帰りますから——」

必死にそう伝えたわたしに、さやかちゃんのママが言ってくれた言葉。

——ごめんね、まどかちゃん。

——さやかは……昨日から、帰ってないの。

その暗い声色に、わたしの胸はどんどん張り裂けそうになっていって——

——今、警察の人たちに探してもらっていて……

最後に涙声になっていたさやかちゃんのママの声は、いつまでもわたしの耳に響いていて――

わたしはその言葉がすべて終わらないうちに、再び駆け出していました。

「さやかちゃん……探さなきゃ」

警察や、先生や、さやかちゃんのママたちに探し出せるとは思えませんでした。

この世に、魔女という存在がいて――その魔女と、誰にも知られぬ孤独な戦いを続ける魔法少女という存在がいて。それらを信じてくれない大人たちに、さやかちゃんの行方が探せるとは思えませんでした。

けど――

けど――わたしに探せるという保証もありません。わたしは、魔法少女となる契約すら決意できない、ただの弱虫なのでした。

(……キュゥべえ、キュゥべえ!)

そう心の中で叫びながら、夕暮れの町を走りました。

けれど、さっきまで教室にいたくせに、キュゥべえは現れてくれませんでした。

前にさやかちゃんと行った場所を訪れるごとに、さやかちゃんとの思い出がどんどん思い出されていきます。

小学生の頃、よく遊んだ大きなけやきのある公園。

嫌なことがあった時、ふたりで訪れた姫名川の河川敷。
そして、学校帰りにみんなで立ち寄る駅前のショッピングモール。
わたしたちは初めてここでキュゥべえと出逢い、魔女の存在を知り、ほむらちゃんと遭遇したのでした。あれから、まだひと月も経っていないのに――
わたしたちは、どうしてこんなに離れてしまったんだろう……？
そう考えると、後から、後から、涙がどうしようもなくこぼれ落ちます。
楽しげに買い物をするたくさんの人たちが、まるで別の世界の人たちのようで――
色鮮やかな商品の溢れるショッピングモールの何もかもが、ただ色あせて見えていました。

――そうだ、ほむらちゃん……ほむらちゃんなら……
そう思い返して、再び、学校に戻ろうとしたその時――
「待てよ、おまえ」
そう背後から声がして、振り向くと――
そこには、佐倉杏子ちゃんが立ちはだかっていました。
そして、その肩には――キュゥべえが長いしっぽをぱたつかせて座っています。
「だいたいのところは、コイツから聞いた」
そう自分の肩を顎で指すと、杏子ちゃんは言葉を継ぎます。

「美樹さやかの行方を探すんだろ？　協力してやる」
「……杏子ちゃん、どうして？」
そう尋ねると――
杏子ちゃんは、軽く舌打ちして言いました。
「アイツは、なんていうかさ……見てらんねーんだよ、あれじゃまるで――」
まるで……？
だけど、そこから先の言葉を続けることなく――
杏子ちゃんはいつもの睨みつけるような視線でわたしを見つめました。
「早くしろ。時間ねえんだろ？」
そんな杏子ちゃんの言葉は――
いつもの怖いとげとげしたものはまるで感じなくって、この時ばかりはとても心強く聞こえて、わたしの涙は、またぽろぽろとこぼれます。
「とりあえず、オマエはこいつと一緒にいろ」
杏子ちゃんがそう言うと同時に、キュゥべえはわたしの肩に飛び乗ってきました。
「そうすりゃ、先に見つけた方がテレパシーで伝えられる。手分けして行くぞ」
その言葉と同時に、杏子ちゃんはソウルジェムをかざし、ショッピングモールであることも気にせず目映い光に包まれました。そして、深紅の魔法少女の衣装へと変わった杏子

ちゃんは――
茜色に染まる空へと飛び去っていきました。

「さやかちゃん……どこ……？」
もう、どこも思いつかないほど見滝原の街の隅々まで歩いていました。辺りはすっかり夜の闇に変わっていて、足はきりきりと痛み、身体は鉄のように重くなっていました。
それでも、どこか探していない場所があるんじゃないか――
そういう思いに駆り立てられるように、わたしは足を動かし続けていました。
もう一度、学校に戻ってみようと住宅街の真ん中で方向を変えた、その時――
「キミも――僕のことを恨んでいるのかな」
肩のキュゥべえがとこかおずおずと問いかけてきます。
「あなたを恨んだら、さやかちゃんを元に戻してくれる？」
そう尋ね返すと、
「無理だね。それは僕の力の及ぶことじゃない」
あっさりとキュゥべえは答えます。
「美樹さやかのことは覚悟しておいた方がいい――彼女はすでに穢れを溜め込みすぎた」
わたしは――

さやかちゃんの笑顔が、大好きでした。
さやかちゃんの男勝りな口調が、大好きでした。
さやかちゃんがふとした時に見せる、女の子の素顔が大好きでした。
明るくて、気が強くて、おてんばで、気がめいってもすぐ立ち直る強さがあって、それでいて人の気持ちをちゃんと汲み取ることができて、本当はとっても優しいさやかちゃんが——大好きでした。
わたしには、本当にもったいないくらいの、大事な大事な、友達でした。
——どうして、わたしなんかと友達でいてくれるの？
そう、何度訊こうと思ったかわかりません。
——わたしは、さやかちゃんの友達でいられているの？
そう訊こうと思ったことも何度もありました。
けど、そんなことを訊いても、きっとさやかちゃんは、笑ってこう言ったと思います。
まどかはあたしの友達だし、それは、あたしがまどかのこと好きだからだよ。
それは、さやかちゃんが優しいからそう言ってくれるのだろうというわたしの想像だったけど——
今は、どうしてか確信をもってそう言ってくれる気がしていました。
なぜなら、わたしがさやかちゃんの友達でいたいのは、さやかちゃんが大好きだからで

す。

それ以外に、理由なんていらなかったのに――

わたしは、ずっとひとりで思い悩んでいたのでした。

いつかさやかちゃんにもわたしにも本当に好きな人ができて、結婚して、ばらばらになっちゃったとしても――それでも、友達だと思えます。どこか遠いところに住んでいても、たまに会えれば、会ってあの笑顔で話しかけてくれれば、わたしはそれだけでいいけど――

今もし、さやかちゃんがわたしの世界から消えてしまったら……

堪らなく怖くなって、わたしの足は止まりました。

息が吸い込めなくなって、膝が震え出します。

「大丈夫かい、まどか」

肩のキュゥべえの声に答えることもできず――

わたしは、呆然としていました。

まるで自分のことしか考えていないわたしがそこにいました。さやかちゃんがいなくなったら――さやかちゃんのいなくなった自分が可哀想で泣いているような気がして――そんな自分が、とても怖くなったのです。

結局、魔法少女になる決心がつかないのも、自分がかわいいからじゃないのかな……？

さやかちゃんがあんなに苦しい思いをしていても、友達であることを証明したいって思ってても、ただ寄り添うことしかできない自分は、それだけ自分が大事なんじゃないのかなって……

そのことに思い至って、涙がぽろぽろとこぼれ落ちます。

「……キュゥべえ、わたし、サイテーだよ……」

さやかちゃんが大好きで。

そのさやかちゃんにいつまでもわたしの横にいて欲しくて。

ただ、笑ってそばにいて欲しくって。さやかちゃんが泣くほど困っているのに、わたしはさやかちゃんがわたしの横で笑っていないことに困っていて。さやかちゃんが根本的に救われる方法なんて、キュゥべえがやマミさんがずっと教えてくれているのに、自分が大事で、心を決めることができなくって――

「ねえ、キュゥべえ」

そう掠れた声で問いかけていました。

「いつか言ってた、わたしが凄い魔法少女になれるって話。あれは……本当なの？」

住宅街の中の公園で、わたしは立ち止まり、そう尋ねていました。

するとキュゥべえは、ちょこちょことした足取りでわたしの肩から飛び降り――

そして、公園のベンチに飛び乗って、かわいらしくしっぽを一度振ります。

「凄い、なんていうのは控えめな表現だ。キミは途方もない魔法少女になるよ。おそらくこの世界で最強の存在だ」

その言葉に、体中の力が抜けていき――

わたしは、ふらふらとキュゥべえの隣に座り込みます。

「もし、わたしが引き受けてたら、さやかちゃんは魔法少女にならずに済んだのかな……」

「さやかは彼女の願いを遂げた。その点についてまどかは何の関係もない」

キュゥべえは慰めるようにそう言った後――でもね、と目を逸らしました。

「その後の頑張りについては……まどか一人でさやか十人ぶん以上の働きができただろうね」

「……」

ここまで選ぶことができた無数の選択肢。

わたしは、その度に立ち止まって、懸命に考えて――そして、どこかで決定的に間違えてしまったのかもしれません。その絶望感で、目の前が真っ暗になっていました。

「……どうして、わたしなんかが？」

やがてそう呟くと――

キュゥべえは心底困ったように、小さな肩をすくめました。

「僕にもわからないよ。はっきり言って、キミが秘めている潜在能力は、理論的には有り

得ない規模のものだ。誰かに説明して欲しいのは僕だって一緒さ」
「そうなの？」
「キミが力を解放すれば、奇跡を起こすどころか、宇宙の法則をねじ曲げることだって可能だろう。なぜキミ一人だけがそれほどの素質を備えているのか……理由は未だにわからない」
「わたしは……自分なんて、何の取り柄もない人間だと思ってた……」
何をやるのも遅くて、自分の考えていることも伝えられなくて。自分がどうしたいのかもふわふわとしてて、それをちゃんと言葉に変えて、行動に移すこともできなくって。
「ずっとこのまま、誰のためになることも、何の役に立つこともできずに、最後までただ何となく生きていくだけなのかなって……それは悔しいし、寂しいことだけど、でも仕方ないよねって、思ってたの」
「現実は随分と違ったね」
雲間から、月の蒼白い光が注ぐ中――
キュゥべえの言葉は、静かに響きました。
「まどか、キミは望むなら万能の神にだってなれるかもしれないよ」
その言葉に、すううっと体中の血が足下から抜けていくような心地がします。
まるで体重のすべてがなくなったような感覚の中で――

わたしは、ゆっくりとその覚悟を固めていきました。
「……わたしなら……キュゥべえにできないことでも、わたしならできるのかな」
「というと？」
「わたしがあなたと契約したら――さやかちゃんの身体を元に戻せる？」
その言葉を口にした瞬間、わたしの身体から、小さな震えが去っていき――
まっすぐとキュゥべえの赤い瞳を見つめて、その答えを待ちます。
すると、キュゥべえは、
「その程度、きっと造作もないだろうね」
力強く、断言しました。
「だけどその願いは――キミにとって、魂を差し出すに足るものかい？」
わたしの頭の中に一瞬だけ、パパやママやタツヤや――その他、大好きだったいろいろなものがよぎります。けどそれらはすべて、さやかちゃんの笑顔と――その後に訪れた、泣き顔と、あの空っぽになってしまった瞳へと変わっていきます。
「さやかちゃんのためなら……いいよ」
そして、頷いて改めてキュゥべえに告げました。
「わたし、魔法少女に――」
だけど――その瞬間でした。

風が吹いたかと思うと、キュゥべえの頭が欠けていました。
「……え」
頭だけではなくって、一瞬のうちに、身体が、足が――
そのすべてが吹き飛んで、白い、何かに成り果てて……
そして、その場に、ぼてんと倒れ込んでいました。
「――あなたは」
言葉を無くしていたわたしの背後から――その声は聞こえてきます。
「どうして、あなたは――」
振り向くと、それは――
白と黒とグレーの魔法少女の衣装に身を包んだ、暁美ほむらちゃんでした。
いつもの白い顔は、月明かりに照らされていよいよ白く――
そして、怒りに溢れた仕草で、持っていた黒い鉄砲を投げ捨てます。
カラカラと転がるその音とともに、ようやくキュゥべえを撃ち抜いたのがほむらちゃんだと気がつくわたしです。
「ひ、ひといよ……なにも殺さなくても……」
そう言いかけた時――
わたしに詰め寄りながら、ほむらちゃんは叫びました。

「どうして？　なんであなたは、いつだって、そうやって自分を犠牲にして……役に立たないとか、意味がないとか……勝手に自分を粗末にしないで！　あなたを大切に思う人のことも考えて！」

「……え……？」

「いい加減にしてよ！　あなたを失えば、それを悲しむ人がいるって、どうしてそれに気付かないの？　あなたを守ろうとしてた人はどうなるの!?」

「ほ……ほむらちゃん……」

その顔は――

その真剣な表情は――

いつか、どこかで、見たものでした。

そう、それは――

ほむらちゃんが、転校してきた日。

保健室に案内しようとふたりで渡り廊下を歩いていた時。

『今とは違う自分になろうだなんて絶対に思わないことね』

そうわたしに告げた時のような、真剣な眼差しで――

ううん、それよりももっと切実で、真剣で。

それは、あの朝、わたしが見た夢の中で叫んでいた、ほむらちゃんに似ていて。

あの時、あの夢の中で、ほむらちゃんはわたしに何を告げようとしていたのだろう……？
不意にそのことが気になって――
「……わたしたちは、どこかで……」
その言葉は、自然にわたしの口からこぼれました。
「どこかで、会ったこと――あるの？　わたしとほむらちゃんは……」
「それは……」
その瞬間、ほむらちゃんの瞳には、深い哀しみが広がります。
それを隠すように顔を背けると、ほむらちゃんはその場に崩れ落ちました。
やがて、小さく肩を震わせ始め……
あんなに、強くて、凛として、完璧であったほむらちゃんは――今、泣いていました。
それは、見たこともないほど弱々しくて、まるで別人のように儚くて――
世界中の苦しみをひとりで背負っているかのように、悲しげでした。
ただ、呆然とほむらちゃんの泣き咽ぶ有様を見つめていた、その時――
「――え？」
いま、何かが……
誰かの叫び声が聞こえたような――
「……駄目。聞いちゃ駄目よ、まどか」

ほむらちゃんは、泣き声でそう叫んだけど――
その絶叫は、頭の中に響き渡りました。

（――さやかぁあああああッ）

それは――
杏子ちゃんのものでした。
杏子ちゃんが、さやかちゃんの名前を呼んでいて……
そして、その異様な叫び声は、ただならない何かを感じさせて――
「ごめん、ほむらちゃん、わたし……行かなきゃ」
「……待って……美樹さやかは、もう……」
「ごめんね」
そう告げると、わたしは駆け出します。
「待ってッ、まどか！」
背中に、ほむらちゃんの叫び声を聞きながら――
焼かれるような思いで、駆け続けました。
どこにさやかちゃんが居て、どこで杏子ちゃんが叫んでいて、そして何が起きているの

か——そんなこともまるでわからないまま、ただとにかく見えない何かに駆り立てられるように、駆け続けました。

暗い道は、どこまでも続きます。街灯が照らすその先には、夜の闇よりももっと暗い何かが待っている気がします。それでも、わたしの足は止まることはありませんでした。

それは——

声が響くから。

頭の中に、さやかちゃんの声が響くから。

（……やっとわかった……あんたの言ってたこと）

（希望と絶望のバランスは差し引きゼロだって……）

途切れ途切れのその言葉は、間違いなくさやかちゃんで——

（しっかりしろよ、さやか！）

そんなさやかちゃんに、杏子ちゃんが叫び返していて——

（いつだったか、あんたが言ってたよね……今ならそれ、よくわかるよ……誰かの幸せを祈ったぶん、他の誰かを呪わずにはいられない……あたしたち魔法少女って、そういう仕組みだったんだね）

そしてそのさやかちゃんの声色は——何かに憑かれたような、空っぽのさやかちゃんじゃありませんでした。間違いなく、いつものさやかちゃんで、だけどその何かを取り戻したような小さな囁きは——わたしの中の嫌な予感をどんどん膨らませていって——

（確かにあたしは、何人か救いもしたけどさ——だけどそのぶん、心には恨みや妬みが溜まって、いちばん大切な友達さえ傷つけて……）

その言葉に、わたしの瞳から涙が溢れ出て——

「……さやかちゃん、さやかちゃあん……！」

（……あたしって……ほんとバカ）

そして——

その言葉が、聞こえてきました。

（——まどか、ごめんね）

それは。

それは、わたしの方から言うべき言葉で——

今度こそ、わたしの方から言うべき言葉で——

「いやだ、いやだよ、さやかちゃん！」

——ごめんね、まどか。

その声を最後に、とても大事なものが切れて——
わたしとさやかちゃんを繋ぐ、大切な何かがぷっつりと切れてしまって——
もう、声は聞こえなくなりました。
どれだけ頭を振っても、もうさやかちゃんの声はそこにはありませんでした。
ただ、夜の闇がどこまでも続いていて——
温かな家の灯りが立ち並んで、街灯だけが道を照らしていて——
わたしは泣きながら、転びながら、駆け続けていました。
さやかちゃん、さやかちゃん、と叫びながら——駆け続けていました。
やがて——
暗い線路の先に……ひとつの影が浮かびます。
どこか死神のようにも見えたその影は——長い髪を頭上で結った佐倉杏子ちゃんで。
そして、杏子ちゃんが暗い表情のまま抱きかかえているのは——
壊れた人形のような、美樹さやかちゃんでした。
「……さやか、ちゃん」

わたしのその声に気がついた杏子ちゃんは、はっと顔を上げます。
それから、ばつの悪そうな表情でわたしから顔を背けました。
一度、立ち止まっていたわたしは、またふらふらと歩き出します。
そして、杏子ちゃんに近づくと、その腕の中で横たわる美樹さやかちゃんに手を伸ばします。
さやかちゃんは――
顔のあちこちに小さな傷をこしらえたまま、眠るように目を閉じていました。
いつも健康そうなその頬は、白く、透き通っていて、唇は青みがかっていました。
夜風が吹き通り、さやかちゃんの前髪を揺らします。さらり、と動いた髪はさやかちゃんの睫毛に重なり、瞳を隠すように、覆いかぶさりました。
わたしの口からは、何も言葉が出ませんでした。
もう一度会えたら――もしまた会えたら、言おうと思っていたことが山ほどあったのに、そのどれもが口をつくことはありませんでした。
「彼女のソウルジェムは――」
わたしの後ろから、ほむらちゃんの声がします。
「グリーフシードに変化した後、魔女を生んで――消滅したわ」
「……嘘、だよね？」

わたしは振り返ることなく、そう呟きます。
「事実よ。それがソウルジェムの最後の秘密」
わたしの横まで歩み寄ったほむらちゃんは――
自分のソウルジェムを取り出して、かざしました。
「この宝石が濁りきって黒く染まるとき、私たちはグリーフシードになり、魔女として生まれ変わる……それが魔法少女になった者の逃れられない運命」
そこには、さっきまで泣いていたほむらちゃんの面影はなく……いつもの、冷静で完璧な魔法少女としてのほむらちゃんがいました。
「嘘よ……嘘よね？　ねぇ？」
わたしは、そんなほむらちゃんの言葉を信じることができず――
さやかちゃんを抱きかかえたまま、唇を噛み締めている杏子ちゃんに尋ねます。
けれど――杏子ちゃんは、何も言ってくれませんでした。
「そんな……どうして？　さやかちゃん、魔女から人を守りたいって、正義の味方になりたいって、そう思って魔法少女になったんだよ？　なのに……」
「その祈りに見合うだけの呪いを、背負い込んだまでのこと。あの子は誰かを救ったぶんだけ、これからは誰かを祟りながら生きていく」
「やめろ――」

突然、杏子ちゃんは――

わたしにさやかちゃんの身体を預けると、ほむらちゃんの襟首に手を伸ばして詰め寄りました。

「テメェは……何様のつもりだ？　事情通ですって自慢したいのか？　なんでそう得意げに喋ってられるんだ？　コイツは、さやかの……」

さやかの――

……さやかちゃんの――何だろう。

わたしは、さやかちゃんの身体を抱えたままその場に崩れるように座り込み――

心のどこかで、杏子ちゃんの言葉の続きを探していました。

わたしは、さやかちゃんの何だったんだろう……さやかちゃんがこんなに苦しんでいたのに、何をしてあげられたんだろう？　そして、ここからさやかちゃんに何を言ってあげられて――何をしてあげられるんだろう？

呆然と、そんなことを考えていたわたしに――

「今度こそ、理解できたわね」

ほむらちゃんは、冷たい口調で言いました。

「あなたが憧れていたものの正体が、どういうものか」

「テメェ、それでも人間か!?」

食って掛かる杏子ちゃんの手を軽く払い、
「もちろん違うわ——そして、あなたも、ね」
そう呟くと——
わたしと、杏子ちゃんと……もう動かなくなったさやかちゃんを残して——
ほむらちゃんは、そのまま夜の闇へと姿を消していったのでした。

第九章　友達なんて、いないんだから

（――入っていいかい？）

その夜、自分の部屋のベッドの上で膝を抱えていたわたしの頭に――

唐突に、その声が響きました。

それがキュッぺえの声であるとか、ほむらちゃんにばらばらにされたのにその声が響く不思議さとか、そんなことを考えられないほど、わたしの意識はぼんやりとしていました。

あの後、杏子ちゃんが、さやかちゃんの身体をどこかに持ち去ってくれて――

わたしは、夜空に飛び去る杏子ちゃんを追いかけることもできず――

いつしか、ふらふらと家に戻っていました。

心配して声をかけてくれたパパやママにも返事を返せずに――部屋でパジャマに着替えたところまでは覚えているんだけど、そこからどれだけ時間が経ったのかわからないままでした。

そんな風に、いつまでもぼうっとしていると――

やがて、窓際のカーテンがふわりと揺れて、そこから白い姿が現れます。

白い耳から生える、もうひとつの長く白い、耳。

金色のビアスのようなものを輝かせ、長いしっぽを振って、赤い瞳を輝かせるキュゥべえがそこにいました。

「……生きていたのね」

わたしがそう呟くと、キュゥべえは挨拶代わりに一度しっぽを左右に振ってみせます。

図々しくわたしのベッドの上に飛び乗ってきたキュゥべえに、わたしは尋ねました。

「ほむらちゃんが言ってたこと、本当なの？」

「訂正するほど、間違ってはいないね」

その呑気な声色で――

わたしは、気がつきました。

「あの時、わたしにさやかちゃんの声が聞こえたのも――キュゥべえのせい？」

「……」

黙りこくるキュゥべえの赤い瞳は、わたしの心の底の底まで見通すように輝いています。

そして、この時――

わたしは、心から悟っていました。

キュゥべえがすべての悪いことの原因なんだ、と。

ほむらちゃんが最初にキュゥべえを殺そうとしたのも、わたしたちがキュゥべえと関わらないように仕向けたのも、すべて――キュゥべえこそが、たくさんの悪いことを運んで

くる存在だからなんだ、と気がついたのでした。

「……どうしてなの？」

わたしは、心に吹き荒れる感情を抑えて訊きます。

「あなたはみんなを魔女にするために、魔法少女にしたの？」

「勘違いしないでほしいんだけど」

キュゥべえは、かわいらしくしっぽをくるりと反転させて言います。

「僕らはなにも人類に対して悪意を持っているわけじゃない。やむを得ない事情がこういう結果を招いてるんだ」

「……事情って、何？」

「まどか、君はエントロピーっていう言葉を知ってるかい？」

「エントロピー……？」

「簡単に喩えるとね、焚き火で得られる熱エネルギーは、木を育てる労力と釣り合わない、ってことさ。エネルギーは形を変換するごとにロスが生じる。宇宙全体のエネルギーは目減りしていく一方なんだ」

そのかわいらしい外見とは裏腹な、機械が喋るようなその言葉に——

わたしの目の前にいるこの存在が、わたしたちとはまるで立っている場所の違う生き物なんだ、と気がつきます。

「だから僕たちは、熱力学の法則に縛られないエネルギーを探し求めてきた。そうして見つけたのが、魔法少女の魔力だよ」

「あなたは、一体……」

「僕たちの文明は、知的生命体の感情をエネルギーに変換するテクノロジーを発明した。ところが生憎、当の僕らが感情というものを持ち合わせていなかった。そこでこの宇宙の様々な異種族を調査し、キミたち人類を見出したんだ」

その淡々とした言葉は、たしかに感情というものをまるで感じさせなくって――

今までのいろいろなことが、わたしの頭の中でパズルのように組み立てられていきます。

「人類の個体数と繁殖力を鑑みれば――一人の人間が生み出す感情エネルギーは、その個体が誕生し成長するまでに要したエネルギーを凌駕する。キミたちの魂は、エントロピーを覆すエネルギー源たり得るんだよ。とりわけ最も効率がいいのは、第二次成長期の少女の、希望と絶望の相転移だ。ソウルジェムになったキミたちの魂は、燃え尽きてグリーフシードへと変わるその瞬間に、膨大なエネルギーを発生させる。それを回収するのが……僕たち、インキュベーターの役割なんだ」

そこで、キュゥべえ――ううん、インキュベーターは。

まるで世紀の大発見をした科学者のように、誇らしげに言いました。

「つまり、すべては、この宇宙の寿命を延ばすためなんだ」

「……わたしたちは」
掠れた声が、唇からこぼれ――
「わたしたちは、消耗品なの？　あなたたちのために死ねっていうの？」
そう言い返すと、心外だと言わんばかりにキュゥべえは告げます。
「ねえ、まどか。この宇宙にどれだけの文明がひしめき合い、一瞬ごとにどれほどのエネルギーを消耗しているかわかるかい？　キミたち人類だって、いずれはこの星を離れて、僕たちの仲間入りをするだろう。そのときになって枯れ果てた宇宙を引き渡されても困るよね？　長い目で見れば、これはキミたちにとっても得になる取引のはずだよ」
「……馬鹿言わないで」
ふつふつと心の奥底に沸き立っていた思いが、ついにわたしの口から溢れました。
「そんなわけのわからない理由で、マミさんが死んで、さやかちゃんがあんな目に遭って……あんまりだよ。酷すぎるよ！」
「僕たちはあくまでキミたちの合意を前提に契約しているんだよ。それだけでも充分に良心的なはずなんだが……」
「みんな騙されてただけじゃない！」
思わず叫んでしまったわたしに、キュゥべえは肩をすくめるように答えます。
「騙す、という行為自体、僕たちには理解できない。認識の相違から生じた判断ミスを後

悔するとき、なぜか人間は他者を憎悪するんだよね」
「……あなたの言ってること、ついていけない。ぜんぜん納得できない」
「キミたち人類の価値基準こそ、僕らは理解に苦しむなぁ。今現在で69億人、しかも4秒に10人ずつ増え続けているキミたちが、どうして単一個体の生き死にでそこまで大騒ぎするんだい？」
「そんな風に思ってるなら、やっぱりあなた、わたしたちの敵なんだね」
溢れそうになる涙をこらえながらそう告げると、キュゥべえはしっぽをくるりと巻いて小さくなりました。
「これでも弁解に来たつもりだったんだよ。キミたちの犠牲が、どれだけ素晴らしいものをもたらすか、理解してもらいたかったんだが……どうやら無理みたいだね」
そう告げると——
来た時と同じように、窓に向かって歩き出しました。
もうその姿を見たくもなくって——わたしがじっと壁を睨んでいると、
「ねえ、まどか」
キュゥべえは窓際でわたしの名を呼びました。
「いつかキミは、最高の魔法少女になり、そして、最悪の魔女になるだろう」
その言葉は、まるで——占い師の予言のように、わたしの心に沈み込みます。

「そのとき僕らは、かつてないほど大量のエネルギーを手に入れるはずだ。この宇宙のために死んでくれる気になったら――いつでも声をかけて」
そして、キュゥべえは――
（――待ってるからね）
涙に暮れるわたしの頭の中にその言葉を残して、消え去っていったのでした。

○

「まどかさん、今朝は顔色が優れませんわ。大丈夫ですの？」
次の日の朝――
一睡もできず、重い足取りで学校に向かうわたしに、仁美ちゃんが声をかけてくれます。
「……うん、ちょっと……寝不足でね」
そう返すのが精一杯で、自分がうまく笑えたかもよくわかりません。
「寝不足はよくありませんわ」
そう返す仁美ちゃんは、とても嬉しそうでした。
いつも奇麗な仁美ちゃんだったけど、今日はお日様のように輝いていました。
「それにしても、今日もさやかさんはお休みかしら」

「……」

「後でお見舞いに行くべきでしょうか……でも私が行っていいのか……今ちょっと、さやかさんとはお話しづらいんですが……」

そう顔を曇らせる仁美ちゃんに、

「仁美ちゃん、あのね……」

さやかちゃんはしばらく学校に来れないと思う、と告げようとしたその時でした。

（昨日の今日で、呑気に学校なんて行ってる場合かよ？）

そんな聞き覚えのある声が頭の中に、響きました。

驚いて顔を上げると——すこし離れた雑居ビルの屋上で、佐倉杏子ちゃんが、何かを食べながらこちらを見つめていました。

「……まどかさん？」

そう話しかけてくる仁美ちゃんの言葉にかぶせるように、

（ちょっと話があるんだ。顔貸してくれる？）

杏子ちゃんは再び、話しかけてきます。

しばらく考えた後——

「仁美ちゃん、ごめん。今日はわたしも学校お休みするね」

そう告げると、わたしは駆け出します。

「……え？　そんな、まどかさん、ちょっと……！」
後ろでびっくりしたような声をあげる仁美ちゃんを置き去りに――
わたしは、杏子ちゃんのいるそのビルへと駆け続けました。
杏子ちゃんの言葉のどこかに――
小さな、ほんのわずかな希望を感じて……わたしの心は高鳴っていました。

○

「美樹さやかを、助けたいと思わない？」
そこは、雑居ビルの裏手の暗い路地でした。
息を切らしてそこに駆け込むと同時に、杏子ちゃんが屋上から舞い降りてきて――
そして、リングドーナツを頬張りながら、そう言うのでした。
「助けられるの……？」
そう訊き返すと、
「助けられないとしたら、放っとくか？」
杏子ちゃんは、いつものいじわるな顔つきで笑い――
「いや……妙な訊き方しちゃったね」

それからすぐ、顔の前で手を振ります。
「バカと思うかもしれないけど……アタシはね、本当に助けられないのかどうか、それを確かめるまで諦めたくない」
そう、どこか真剣な顔つきで話す杏子ちゃんは――
今までわたしたちの前に、立ちはだかってきた時の険しさはなくって。わたしと同じ年頃のひとりの女の子にしか見えなくって……わたしの息は止まり、どきどきと心臓が高鳴り始めます。
――さやかちゃんを、助けられる？
本当なの？　本当に、まだそんなことができるの……？
「アイツは――美樹さやかは魔女になっちまったけど……友達の声ぐらいは憶えてるかもしれない。呼びかけたら、人間だった頃の記憶を取り戻すかもしれない。それができるとしたら――多分、アンタだ」
そうまっすぐと見つめられて――
わたしは、胸の前で手をぎゅっと握りしめていました。
「上手く……いくかな？」
そう訊き返したわたしに、
「わかんねーよ、そんなの」

舌打ちまじりに、杏子ちゃんは即答します。
「けど、アイツは言ってた」
杏子ちゃんはどこかを睨みつけるように吐き捨てました。
「キュゥべえに昨日、問い質したんだ。本当に、さやかのソウルジェムを取り戻す方法はねえのかって」
「……それで？」
「『僕の知る限りではないね』ってあの野郎、いつもの調子で言いやがった。けどね、その後、こうも言ったんだ。『魔法少女は条理を覆す存在だ。キミたちがどれほどの不条理を成し遂げたとしても、驚くには値しない』って」
「それって……」
「そう、まだ勝負が完全についちまったわけじゃないってことさ」
ときどきと鼓動が激しくなると同時に——
頭の中に、さやかちゃんの笑顔が蘇ります。
明るくて、きらきらとしたあの微笑みが久しぶりに心一杯に広がっていきます。
「やる……。わたし、なんだってやるよ！」
そう告げると——杏子ちゃんは、にやりと笑います。
「もしかしてあの魔女を真っ二つにしてやったらさ、中からグリーフシードの代わりに、

さやかのソウルジェムがポロッと落ちてくるとかさ……そういうもんじゃん？　最後に愛と勇気が勝つストーリーってのは」

思わず、うん、とわたしも笑ってしまい――

すると杏子ちゃんは、どこか遠くを見つめて呟きます。

「アタシだって……考えてみたら、そういうのに憧れて魔法少女になったんだよね。すっかり忘れてたけど、さやかはそれを思い出させてくれた」

どこか気恥ずかしそうにそう言う杏子ちゃんに――

……どうして？」

わたしは、尋ねていました。

「どうしてここまでしてくれるの？　昨日の晩も一緒にさやかちゃんを探してくれたし、今だってさやかちゃんを救おうとこうしてわたしなんかに声を――」

けれど、杏子ちゃんはその質問に答えることなく、ドーナツをただ黙々と食べながらどこかに向かって歩き続けます。わたしは、その背中に着いていきました。

「アタシもさやかも、同じ間違いから始まったからね」

やがて、呟かれた杏子ちゃんのその言葉は――わたしの心に、深く突き刺さります。

「杏子ちゃんは……どうして、魔法少女になったの？」

そう訊くと、杏子ちゃんは立ち止まり、いつもの鋭い視線とともに振り向きました。

けど……その視線は、以前のような怖いものではなくって——
どこか、悲しげに揺らめいていました。
「アタシは——」
そう言うと、杏子ちゃんはまたわたしに背中を向けます。
そして再び歩き出すと同時に——
わたしの頭の中には。
杏子ちゃんが歩んできた、焼けた大地のような物語が流れ込んできました。

（——口で説明するより早いかと思ってね）
杏子ちゃんの声が響くそこは——
ステンドグラスから日の差し込む、教会の中でした。
すぐに蜘蛛の巣が張るような古い建物で、椅子も祭壇もすすけていたけど——そこでは温和な顔をした神父服の男の人と、優しそうな女の人、そして、ふたりの少女がいました。
少女たちは姉妹であるようで、ふたりは燭台の上の蠟燭に火を灯し、顔を合わせて微笑んでいます。そして姉らしき方の少女の笑顔には、見覚えがありました。
——昔の……杏子ちゃんだ。
そう、すぐにわかりました。

ここは——杏子ちゃんの思い出の中なのでした。

（アタシの家は——隣町の教会でさ。親父はそこの神父だった）

杏子ちゃんの言葉が響く中——

姉妹は、楽しげに笑いさざめきながらふたりで教会を掃いて回っています。お母さんらしき女の人は、そんなふたりを微笑みながら見つめ、お父さんである神父さんは、十字架に祈りを捧げていました。

それは、とても幸せな光景で——そして優しい記憶でした。

（そうさ……親父は正直すぎて、優しすぎる人だった。毎朝、新聞を読むたびに涙を浮かべて、どうして世の中がよくならないのか、真剣に悩んでるような人でさ。新しい時代を救うには、新しい信仰が必要だっていつも言ってた）

その言葉とともに——

懸命に、熱心に、信者さんたちに聖書の言葉を聞かせる男の人の姿が浮かび上がります。

（……だけどさ）

そんな杏子ちゃんの声が響くと同時に——ゆったりとしたお父さんの言葉は、やがて熱を帯びていって……気がつくと、信者さんは、ひとりまたひとりと数が少なくなっていくことに気がつきます。最後には誰もいなくなって——薄暗い教会で、ひとり悲しげに佇むお父さんだけがいました。

（そう——ある日、親父は教義にないことまで説教するようになったんだ。やがて、本部からも破門されて、もちろん信者の足はばったり途絶えたよ。当然だよね。はたから見れば胡散臭い新興宗教さ。どんなに正しいことを、当たり前のことを話そうとしても、世間じゃただの鼻つまみものさ）

空っぽになった教会——

そこで呆然とする杏子ちゃんのお父さん——

けれど、お父さんは諦めませんでした。お母さんひとりが働きに出る中——杏子ちゃんと妹を連れて、街に出ます。時には、駅の前で——またある時には、信者さんの家に直接足を運び、お父さんの教義を語ります。けれど、誰もその言葉に耳を傾けることはありませんでした。それどころか、邪険にされ、バカにされ、時には道ばたに突き飛ばされて、杏子ちゃんと妹が慌てて駆け寄っていました。

教会の片隅にある杏子ちゃんたちが暮らす部屋は、次第に暗くなっていました。

古い木の机の上には、水のようなスープだけがあって——それを四人で分け合うように口にしていました。すぐに無くなってしまうそのスープを、お父さんとお母さんは姉妹に与え、そのスープをまた杏子ちゃんは妹に多く与えるようにしていました。妹がそれを嬉しそうに口にする中——杏子ちゃんの唇は、悔しそうに引き結ばれています。どこかを睨むように、ぐっと拳を握りしめていました。

（アタシは――納得できなかったよ）

そんな光景に、杏子ちゃんの言葉が重なります。

（……親父は間違ったことなんて言ってなかった。ただ、人と違うことを話しただけだ。五分でいい、ちゃんと耳を傾けてくれれば、正しいことを言ってるって、誰にでもわかったはずなんだ……なのに、誰も相手をしてくれなかった。悔しかった。許せなかった。誰もあの人のことわかってくれないのが、アタシには我慢できなかった）

やがてお母さんは病に倒れ――それでも毎日のように説教に向かうお父さんと、その後についていく幼い姉妹の足取りは、見ていてわかるほど、ふらつくようになっていました。お父さんは、聖書だけを大事そうに小脇に抱え、汚れた神父服のまま、熱心に信者さんの家を訪ねて回り続けます。

『……ねーちゃ、おなか、すいたね』

杏子ちゃんの妹は、ついにそれしか言わなくなっていました。

ふっくらとしていた頬は見る影もなく痩せこけて、その唇はからからに乾いていました。

それに気がついた杏子ちゃんは、お父さんに何か叫びます。

けれど、お父さんは振り向くことなく――また、次の信者さんの家に歩き出します。

杏子ちゃんは、瞳に涙を溜めてその背中を睨むと、どこかに目をやりました。杏子ちゃんが見つめるそこには、果物屋さんがあって――色とりどりの果物が棚に並べられていて。

杏子ちゃんは、その中のひとつ、赤々と熟した林檎をただじっと見つめていました。やがて一度、妹の髪に優しく手を置くと——杏子ちゃんは、駆け出します。籠の中の林檎をひとつ手に取って、そのまま妹の元に駆け戻ろうとしたところで——

杏子ちゃんの前には、太った果物屋のおじさんが立ちはだかっていました。そして、有無を言わせず、その頬を殴り飛ばします。激しく転んだ杏子ちゃんの足下に林檎が転がって——杏子ちゃんは慌ててその林檎を拾い上げようとしました。林檎を取り返そうとさらに怒ったおじさんは、杏子ちゃんを引きずり起こし、また殴りつけます。なんとかその手の中の林檎を取り返そうとするけど、杏子ちゃんは必死にその林檎を抱きしめ、けして放すまいと歯を食いしばっていました。

ついにおじさんは杏子ちゃんの髪を掴み、何回もその頬を殴ります。杏子ちゃんの瞳からは涙が溢れ出していたけど、それでも林檎を放すことはありませんでした。

まるでその場に居合わせたように——震えながらその光景を見つめていたわたしには、杏子ちゃんの涙の意味が痛いほど伝わってきます。

杏子ちゃんは、殴られたのが痛いから泣いているんじゃなくって……

林檎ひとつ、妹に買ってあげられない自分が情けなくって泣いているのでした。

誰もがお父さんの言葉を聞いてくれないのが悲しくて、悔しくて、泣いているのでした。

いつしか野次馬のような人だかりができていたその中で——

頬を腫らし、涙を流しながらも、杏子ちゃんの心は叫んでいて。
誰一人味方のいないこの世界を憎むように――味方になってくれないすべての人を恨むように、どこかを睨み続けていました。
そして、その時――
杏子ちゃんの視線の先には、見慣れた長く白い尾が、ふわりと舞っていました。
『――佐倉杏子』
その聞き慣れたかわいらしい声は、杏子ちゃんの名を呼びます。
『僕と契約してくれたら、その願いは叶えられるよ』
それは、赤い瞳を輝かせるキュゥべえでした。
――ダメ……ダメだよ……
その光景が過去のものだとしても――わたしは、そう叫んでしまいます。
――キュゥべえの言うことを聞いちゃダメだよ、杏子ちゃん！
けれど、そんなわたしの言葉なんて届くはずもなく――
絶望の淵にいた杏子ちゃんは、迷うこと無く、手を伸ばして――
震える声で、その願いを口にしていました。
『みんなが……父さんの言うことを理解してくれますように――聞いてくれますように』
次の瞬間――

目映い光が辺りを満たし、世界は一変していました。

あの小さな教会は、外まで信者さんたちで溢れ——お父さんは真新しい神父服に身を包み、晴れやかな表情で、大勢の人たちを前に言葉を告げていました。お母さんも病気から回復し、清潔な服を着込んで微笑んでいます。妹も新品のスカートを嬉しそうに身につけて、笑顔で遊び回っていました。

信者さんの数は、日に日に増えていき、お父さんはテレビにも呼ばれるようになっていました。

今や、お父さんの言葉が世界の指針であるかのように、誰もがお父さんに教えを乞うようになっていて——教会は、信者さんたちの手によって目映く磨き上げられ、放っておいても集まり続けるお布施のおかげで、もうお金に困るようなこともなくなっていました。

そして——

月明かりの下、そんな家族の様子を眩しそうに見つめる少女が、教会の屋根にいました。深紅の衣装に身を包み、長い槍を手にした——杏子ちゃんでした。

『よかったね——父さん、母さん、モモ』

そう呟くと——

そのまま側に控えていたキュゥべえとともに、空に舞い上がります。

そして、夜の闇の中——

幾体もの魔女たちとの死闘が繰り広げられていました。
中には、まだ魔法少女の力をうまく使いこなしていない杏子ちゃんにとって、手に負えないほどの相手もいて、その度に杏子ちゃんは傷ついていったけど——それでも、杏子ちゃんの顔は明るく、力強さに満ちていました。
——父さんとふたりで、この世界をいい方向に持っていく。
——父さんは表から。アタシは裏から。ふたりで、この汚れた世界を変えていく。
そんな想いに瞳を輝かせ、杏子ちゃんは次々に魔女を倒していきます。
やがて、手に入れたグリーフシードで自らのソウルジェムを浄化することを覚え、その頃には、槍の使い方もすっかり上手になっていました。
けれど——
そんなある日のことでした。
魔女の結界を滅ぼし、杏子ちゃんがグリーフシードを手にしたところで——
『……杏子？』
その姿を見たお父さんに声をかけられていました。
『……おまえ、その格好は——』
『あ……ええと、これは』
言いよどむ杏子ちゃんに、お父さんは震えた声で言います。

『まさか、おまえは――魔女に魅入られたのか……？』

『……え？』

『まさか……だから、信者がこんなに……すべて、おまえのせいなのか……？』

『それは……違う！　父さんの教えは正しくて、だから……』

杏子ちゃんは慌ててそう叫んでたけど――

お父さんの瞳は、もう杏子ちゃんを見つめていませんでした。

いえ――杏子ちゃんを見るその眼差しは、すでに娘として見つめるものではなく……杏子ちゃんが命がけで戦ってきた――〝魔女〟として見つめていたのでした。

そして――杏子ちゃんの思い出の世界は、急速に暗くなっていきます。

お父さんは、教会を閉ざし、説教をすることもなくなっていました。

一日中暗い教会の中で、ただひとりお酒を飲み続け――何かをぶつぶつと呟くようになっていました。

『……はは……何が、神の言葉だ……私は……悪魔に、踊らされていただけだった……娘を魔女に変えてしまって……それで人々に何を語れと言うのか……』

杏子ちゃんたちが何をどれほど語りかけても、お父さんが言葉を返すことはなくなっていました。

やがて、お父さんは何も喋らなくなって――

その日がやってきます。
欠けた月が青白く街を照らす、ある夜のことでした。
いつもの魔女退治から帰ってきた杏子ちゃんが、教会の扉を開けると――
その光景は、杏子ちゃんの視界に入ってきました。
『と……父さん……？』
扉の向こうの暗い室内には――
革靴を履いたままの、男の人の足がぶら下がっていました。
『なんで……どうして……』
そして、そのぶら下がる足の下には――
『……も……モモ……!?　母さん!?』
血のこびりついた包丁と、女の人、そして小さな女の子が折り重なるように倒れていました。
ふたりの首もとは大きく裂けていて、杏子ちゃんの足下まで赤黒い液体が染みていました。
『……なんで……こんなはずじゃ……こんなことになるはずじゃ……』
杏子ちゃんの声は震え出し、そして真っ暗に染まっていく心とともに――
景色は、暗黒へと変わっていきます。

立っているところすらわからなくなる、一面の黒の世界は、杏子ちゃんの心そのものでした。

（――結局……アタシの祈りが、家族を壊しちまったんだ）

悲しく沈んだ声が静かに響いて――

辺りの景色が、夕暮れの見滝原であることに気がつくわたしでした。

見慣れた町並みを前にしても、わたしの胸はまだ締め付けられたままでした。

苦く、やりきれない思いがただ心を満たしていて――

そして、それは杏子ちゃんがずっと抱えてきたものであって――

「他人の都合を知りもせず、勝手な願い事をしたせいで、結局、誰もが不幸になった」

前を歩く杏子ちゃんの声は、溶けるようにオレンジ色の町並みに響きます。

「その時、心に誓ったんだよ。もう二度と、他人のために魔法を使ったりしない。この力は、すべて自分のためだけに使い切る、って」

――そんなの、間違ってるよ。

今の光景を見せられなかったら、きっとわたしはまた考え無しにそう言っていたような気がします。

けれど、きれいごとだけでこの世界ができているわけじゃなくって——その光景を今、目の当たりにしてしまったわたしには——もう、何を言うことも、考えることもできませんでした。

「奇跡ってのはタダじゃないんだ。希望を祈れば、それと同しぶんだけの絶望が撒き散らされる。そうやって差し引きをゼロにして、世の中のバランスは成り立ってるんだよ」

そして、杏子ちゃんのその言葉で——

わたしは、思い出します。

『……やっとわかった……あんたの言ってたこと』

『希望と絶望のバランスは差し引きゼロだって……』

それは、さやかちゃんが魔女へと変わる直前に呟いていた言葉で——

「……この話、さやかちゃんにも？」

わたしがそう尋ねると、杏子ちゃんは静かに頷きます。

「あくまでも人の為に戦うって言い張るアイツを……止めたくってさ。だから、魔法少女になっちまったからには、開き直って好き勝手にやれ、とアイツに言ってやった。自業自得の人生を自分の為に使えって」

初めて、わたしとさやかちゃんの前に杏子ちゃんが現れた時から――
杏子ちゃんが戦いを挑んできた、その理由。やたらいじわるに見えた理由。
それは、人の為に魔法少女になったさやかちゃんが、いつか人を恨むようになってしまうのを止める為で……まるで以前の自分を見ているようで辛かったからで……そのままだといつか破滅の日がやってくることを予感していたからで。わたしは、そんなことも知らず、どうして仲良くできないんだろうってずっと悩んで――時には、杏子ちゃんを恨めしく思っていたのでした。
「けど、さ」
杏子ちゃんは、どこか懐かしむような顔つきで続けます。
「そしたら、さやかは言ったんだ。自分のことだけ考えてるあんたが、どうしてあたしのことを心配するのって」
「……え？」
「あたしは人の為に祈ったことを後悔していないって。あたしはあたしのやり方で戦い続けるって。それがあんたの邪魔になるなら、前みたいに殺しにくればいい。あたしは負けないし、もう恨んだりもしないって――」
そのいかにもさやかちゃんが言いそうな言葉に――わたしの胸は詰まります。
「負けたって――思ったよ。こいつはアタシより数倍強えって。なれなかったアタシが、

なるべきだったアタシがここにいるって——だから、認めたんだ。だから、アイツには魔女なんかに負けてほしくないんだ。自分の中の穢れにも負けてほしくないんだ」

そう吐き捨てるように言う杏子ちゃんを見て——

わたしは、今初めて本当の佐倉杏子ちゃんに出逢ったんだ、と気がつきます。

自分の歩いてきた辛い道を歩ませないようにって……自分と同じ人間をもう作らないようにって、杏子ちゃんは杏子ちゃんなりの不器用なやり方で、行動してくれていたのでした。

ママが、いつかわたしに言ってくれた言葉——

『正しすぎるその子のぶんまで、誰かが間違えてあげればいい』

『その子のこと諦めるか、誤解されるかどっちがましだい？』

杏子ちゃんは、きっと——さやかちゃんの為に間違えてあげたのでした。

諦めたくないから——誤解されることも怖がらずに、行動してくれたのでした。

「ま……アタシがアイツを救おうとするのは、こんなてめぇ勝手な理由さ」

杏子ちゃんは話すだけ話すと、照れたように微笑みました。

「ただ自分に勝った人間に強くいてもらいたいだけ。だから——ここからやることは自分の為だ。アンタに無理強いはしないし、けっこう危ない橋を渡るわけだしね。アタシも絶対、何があっても守ってやるなんて約束できねえし。それでも……来るのか？」

そう訊き返してきた杏子ちゃんに――
「手伝う……ううん、手伝わせてほしい」
わたしは、即座に頷きます。
そして、手を差し出して言いました。
「わたし、鹿目まどか」
「へ？」
「自己紹介、ちゃんとしてなかったから」
すると、杏子ちゃんは髪をがりがりと掻き、呆れたようにわたしを見つめます。
「……ッたくもう、調子狂うよなぁ、ホント……」
そう言って、照れ隠しのように差し出されたのは――
お店であまり見たことのない、「うんまい棒コーンスープ味」でした。

今、久しぶりに――
本当に、久しぶりに、わたしの心に温かいものが溢れていました。
それは、さやかちゃんを救えるかもしれないっていう希望と――新しい友達、佐倉杏子ちゃんの存在でした。友達……わたしがずっと悩んでいた、その曖昧な存在。でも、今のわたしにはこう言えます。

わたしが大好きな人は――みんな友達なんだって。

一方的だろうと、なんだろうと、わたしは杏子ちゃんを大切に思う自分を感じていたし、杏子ちゃんの為に何かしてあげたいって思えました。そして、さやかちゃんを救える可能性が少しでもあるならば――友達であるさやかちゃんの為になんでもしたいと思っていました。

あれほど重かった足取りが、今はすごく軽く感じます。

それはもちろん、夕闇濃くなる町並みに不安にもなるけど――

これから、またさやかちゃんを救う為に魔女の結界に入る不安もあるけど――

それでも、ここ数日感じられなかった勇気が、わたしの中から溢れてくるのを感じます。

杏子ちゃんは、片手でソウルジェムを掲げてさやかちゃんの気配を追う一方、もう片手で途中で買った串団子を頬張っていました。

「これは勘弁してくれ」

ぼんやりと光るソウルジェムをあちこちに掲げながら、杏子ちゃんは言います。

「なんか食べてないと、不安になるんだ」

そうとしか杏子ちゃんは言わなかったけど――

それはきっと、杏子ちゃんをキュゥべえとの契約へと追い込んだ心の傷のせいだって、今のわたしにはわかります。

たから、わたしは話題をそらすように言いました。
「ほむらちゃんも手伝ってくれないかな……？」
すると、杏子ちゃんは即座に首を振って、
「アイツは、そういうタマじゃないよ」
そう一言で斬り捨てました。
「友達じゃないの？」
「違うね。アイツは――前に一度、さやかですら殺そうとした」
「……え？」
「まあ、さやかの魔女化が止められないってわかったからかもしんないけど。あの冷血さにはアタシはついてけないね」
――ほむらちゃんが……まさか。
けれど、そう思う一方で――ほむらちゃんのあの、目的の為にはすべてを犠牲にしかねない、冷たい瞳を思い出します。わたしが怖くて仕方なかった、あの冴え冴えとした瞳が思い出されます。
……でも、でも。
懸命にそんな冷たいほむらちゃんの瞳を追い払います。
わたしは、あの夜、公園で子供のように泣き崩れるほむらちゃんの姿を見てしまってい

て――『一人が救われただけでも――私は、嬉しい』と言ってくれた、あの時の優しさを知っていて。

どちらが本当のほむらちゃんかわからなくなったわたしは、思わず尋ねていました。

「杏子ちゃんは――前に、ほむらちゃんと一緒にいたことあるよね？　だから、もし知っているなら教えて。いったい、ほむらちゃんは……何を目指して戦っているの？」

すると――

杏子ちゃんは、月を睨むように黙り込みました。

しばらく欠けた月に問いかけるように口ごもっていた杏子ちゃんは――

やがて、躊躇いがちに教えてくれました。

「あと何日かしたら……この街に〝ワルプルギスの夜〟が来る」

「アタシら魔法少女にとっては最悪の強敵、超弩級の大物魔女だ。アタシもアイツも、たぶん一人じゃ倒せない」

――最悪の……強敵。

それって――あんなに強いほむらちゃんや杏子ちゃんがひとりじゃ倒せないって……

「だから共同戦線っていうか……まぁ要するに、そういう仲なのさ」

それだけ言い捨てると、また歩き出した杏子ちゃんの背中を見つめながら——
わたしは、そこに立ち尽くしていました。
それは、薄れかけていたいつかの光景が、突然わたしの中に蘇っていたからで……
——赤黒い空。
——瓦礫と化した街。
——そして、空に浮かぶ恐ろしく大きな怪物。
それは、ほむらちゃんが転校してきた日に見た、あの怖い夢でした。その怪物に、ほむらちゃんがたったひとりで戦いを挑み、そして一方的に打ちのめされていく夢でした。
杏子ちゃんの言う〝ワルプルギスの夜〟って、もしかして——

「ここだな」
その時——杏子ちゃんの声がしました。
そのどこか緊張した声色に、わたしも慌てて自分の考えを振り払い、駆け寄ります。
そこは、建設途中で放棄されたかのような工事現場でした。
人の姿はなく、そして朝が来ても人が集まる気配はなく——
どこまでも打ち捨てられたような気配だけが漂う、嫌な場所でした。
そして、その入り口で——杏子ちゃんの手の中のソウルジェムは、まるで泣き咽ぶよう

に、不吉に瞬いているのでした。
「ほ……本当に、さやかちゃんかな……？　他の魔女だったりしないかな？」
震え始める身体を抱きしめてそう尋ねると、
「魔力のパターンが、昨日と一緒だ。間違いなくアイツだよ」
杏子ちゃんは、二本目の串団子を頬張りながら、歩き出します。
わたしがついていくと、杏子ちゃんは工事現場の入り口の鎖を簡単に破って中に入っていきました。そして、とある一画――魔力も何もないわたしですら、嫌な感じのする足場の奥の壁に寄っていきます。
そこで杏子ちゃんは、ソウルジェムを抱え―目映い光に包まれ、深紅の魔法少女の衣装へと変身を遂げました。手の中の長い槍を一度、くるっと回転させて、にやりと笑います。
「さて、改めて訊くけど……本当に覚悟はいいんだね？」
「なんかもう、慣れっこだし」
そう、わたしは頷いて――それから、おずおずと言い足しました。
「わたし、いつも後ろからついてくばっかりで、役に立ったこと一度もないけど……でも、お願い。連れて行って」
すると、杏子ちゃんは、一度くすりと笑って――
「ほんと変なヤツだな。アンタ」

そう言うと、食べ終わったお団子の串を投げ飛ばし——
その場に、魔女の結界の入り口を暴き出すのでした。

○

そこは、一面の古びた煉瓦に覆われた世界でした。
その赤茶けた煉瓦の壁に、びっしりと同じポスターが貼られていて、そこに描かれているのが五線や指揮者や楽団員だと気がついた瞬間——
わたしの背筋に冷たいものが伝っていきます。
それらは、すべて——クラシックコンサートのポスターでした。
そして、そのポスターには、ステージの中央でスポットライトを浴びながら演奏するひとりのバイオリニストが描かれていて……改めて、ここがさやかちゃんの結界なんだって思います。さやかちゃんが呑み込まれた、絶望の深さを思い知るわたしでした。
「ねぇ、杏子ちゃん……」
「あん？」
「誰かにばっかり戦わせて、自分で何もしないわたしって……やっぱり、卑怯なのかな

「何でアンタが魔法少女になるわけさ？」
「何でって……」
口ごもってしまったわたしを――
杏子ちゃんは振り向くと同時に、ぎろりと睨みつけてきます。
「舐めんなよ。この仕事はね、誰にだって勤まるもんじゃない」
「でも……」
「毎日美味いモン喰って、幸せ家族に囲まれて、そんな何不自由ない暮らしをしてるヤツがさ、ただの気まぐれで魔法少女になろうとするんなら、そんなの、アタシが許さない。いの一番にぶっ潰してやるさ」
「……」
「いいか、まどか」
それから、杏子ちゃんは静かに、諭すように口調を変えます。
「命を危険に晒すってのはな、そうするしか他に仕方ないヤツだけがやることさ。そうじゃないヤツが首を突っ込むのは、ただのお遊びだ。おふざけだ」
「そうなのかな……」
「アンタだっていつかは、否が応でも命懸けで戦わなきゃならない時がくるかもしれない。そのときになって考えればいいんだよ」

その優しい言葉で――

最初のきつい言い方が、誤解されることを厭わない杏子ちゃんなりの言い方だと気がつきました。

「杏子ちゃんは、どうして――」

――そんなに、強いの？

そう尋ねようとした瞬間でした。

「――気づかれた」

どこか緊張を帯びた声で、杏子ちゃんはそう呟きます。

それは、煉瓦通路の行き止まりの、木製の扉から次の通路に入ったところで――

「来るぞ」

「……う、うん」

わたしが頷くと同時に、周りの景色がものすごいスピードで動きだし、その通路の先にある幾つもの扉がばたばたと開きながらこちらに向かってきます。

そして、最後の扉が開けたそこは――

天まで伸びる真っ赤な客席に囲われた世界でした。

わたしたちを囲うように包むその客席には誰も座ってなくて……ただ、目の前、中央の広い空間には色あせた楽団が佇んでいました。

ウッドベース、シンバル、バイオリン、ピアノ、ドラム――
けれど、それらが奏でる旋律は悲しげで、どこか歪んでいて――その音色に合わせて、ふわふわと漂う何かがけたけたと嗤います。
「アイツが、本体だ」
そう杏子ちゃんが指差すそこには――
楽団の中央で、片手に剣を掲げる甲冑の騎士がいて。
その下半身は、人魚のような魚の尾に変化していて。
まるでオーケストラの指揮をするように――揺らめきながら、剣を振りかざしています。
「さ……さやかちゃん、なの？」
人魚の魔女は、胸元にわたしたち見滝原中の制服のリボンをつけていました。
それ以外にさやかちゃんの面影なんかなかったけど――剣をまるで指揮者のタクトのように振りかざすその姿は、悲しくって、壊れていて……いつまでも、上条くんの弾くバイオリンを追い求めるさやかちゃんの心のような気がしてなりませんでした。
「いいな。打ち合わせ通りに」
杏子ちゃんが槍を構えると同時に発したその言葉で――わたしは我に返ります。
ひとつ頷くと、必死にさやかちゃんに語りかけ始めます。
「……さ、さやかちゃん、わたしだよ……まどかだよ！　ねぇ、聞こえる？　わたしの声

がわかる？」

けれど――

それでこちらに気がついた人魚の魔女は、無感情に剣を振り上げ、背後から大きな車輪を出してわたしたちに放ってきました。

「き……きゃあああッ」

「怯むな！」

その瞬間、庇うように前に出た杏子ちゃんは、両手を組んでわたしの前に魔法の壁のようなものを作り上げてくれました。

「呼び続けろ！」

その杏子ちゃんの声を勇気に変えて、わたしは再び語りかけます。

「……さやかちゃん、やめて……お願い、思い出して！」

もうわたしは、まともに目を開けることができませんでした。

ただわたしを守るように立ちはだかる杏子ちゃんの背中を信じて――そして、さやかちゃんの心がまだそこにあることを信じて――訴え続けました。

「こんなこと、さやかちゃんだって嫌だった筈だよ！」

頭上では、金属と金属が激しくぶつかり合うような音が響きます。

それは、さやかちゃんの操る巨大な車輪がわたしに向かい、それを杏子ちゃんが払って

くれている音でした。そして、その凄まじい音に負けないように――わたしは必死で、頭の中にさやかちゃんの笑顔を思い描きます。

「さやかちゃん、正義の味方になるんでしょ？　マミさんみたいになりたかったんでしょ!?　ねぇ、お願い……もとのさやかちゃんに戻って！　わたしの大好きなさやかちゃんに戻って！」

その瞬間――

不意に、音が止みました。

辺りに響いていた、悲しい音楽も消えていて――

顔を上げると……甲冑の上半身は、捻るように、奇妙な方向に腕を曲げていました。

それは苦しむようで、もがくようで――

「さ、さやか――聞こえたのか!?」

杏子ちゃんがそう叫んだ瞬間、わたしは言ってました。

「さやかちゃん、さやかちゃん、ごめんね。いつも先に謝らせてごめんね。わたし、友達なのに、情けない友達でごめんね。勇気のない、泣き虫でごめんね。でも、絶対、いつまでも友達だから……これまでもここからも、何がどうなったって、さやかちゃんをひとりにはしないから……だから、お願い、目を覚まして。元の明るいさやかちゃんに戻って！」

その時――

人魚の魔女と化したさやかちゃんが、どこか反応してくれたような気がして……
「さやかちゃん？」
わたしが、思わずそう叫び返した瞬間――
何かが、ぶうん、と風を切って。
わたしの髪を揺らして、通り過ぎて。
それが、人魚の魔女のぎりぎりまでねじ曲げた腕が伸びたもので――
怒りに満ちた剣が、わたしに振り下ろされたものであることに気がついて。
そしてそれをぎりぎりのところで、杏子ちゃんが槍で受け止めてくれたことを知りました。
「さ……さやか……ちゃん」
「聞き分けがねぇにも程があるぜ、さやか！」
杏子ちゃんはそう叫ぶと、渾身の力で、剣を押し返します。
その勢いで、人魚の魔女は向こう側に押されてよろめいたけど――
押し返したはずの杏子ちゃんの肩からは、赤い液体が滲んでいました。
その染みは見る見る深紅の衣装に黒く広がり、やがて、ぽたり、と足下に滴ります。
「き……杏子ちゃん……？」
杏子ちゃんに押された怒りからか……人魚の魔女は両腕を振り上げると、先ほどとは比

較にならないほどの車輪を出現させ、一斉にわたしたちに向かって撃ち放っていました。
わたしの足ががくがくと震え出すほど、凶暴な怒りを振りまき始めた甲冑の人魚には、もう、さやかちゃんの面影なんてなくって――
目に入るものすべてを消し去ろうとする、憎悪の塊と化していました。
そして、暴風のように次々に撃ち放たれる無数の車輪は、杏子ちゃんひとりじゃ受け止めきれなくなって――
「ぐっッ！」
ついに、杏子ちゃんに直撃します。
「杏子ちゃん!?」
「大丈夫……この程度、へでもねぇ……」
地の底から響くような声で、杏子ちゃんは囁きます。
「まとか……アンタは、呼びかけろ。呼び続けろ。さやかを……」
「やめてッ、もうやめて！　さやかちゃん、わたしたちに気付いて！」
けれど、さやかちゃんから放たれる車輪は、より激しく降り注ぎ――
杏子ちゃんの腕を、足を、打ちのめしていきます。
「あはは……いつぞやのお返しかい？」
そんな杏子ちゃんは、ぞっとするような笑みを浮かべました。

「そういえばアタシたち、最初は殺し合う仲だったっけねぇ……」
そこで、わたしは気がつきました。
杏子ちゃんが、わたしを後ろに背負っているから、動けないんだって——
避けることができなくって、その車輪を受け止めることしかできないのだって。
今、わたしの前の杏子ちゃんは、無数の傷とそこから流れ出る血で、いつかのさやかちゃんのように赤黒く染まっていました。
それでも、悲鳴ひとつあげることなく、自分から攻撃を仕掛けるでもなく——
「なあ、さやか」
ただ、すべての車輪をその槍と身で受けながら、優しくさやかちゃんに話しかけていました。
「オマエ……怒ってんだろ？　何もかも許せないんだろ？」
そう、一歩一歩、荒れ狂う甲冑の人魚に近づいていきます。
「わかるよ……だからさ、好きなだけ暴れなよ。付き合ってやるからさ……それで、気が済んだら、目ェ覚ましなよ……な？」
「や、やめて……」
思わず口をついたその言葉は——さやかちゃんに向けた言葉なのか、それとも、あれだけ傷ついてもなお諦めない杏子ちゃんに向けたものであるのか……わたしにもわかりませ

んでした。
そしてついに、終わりなく殺到する車輪が、わたしを守ってくれていた魔法の壁ごと——杏子ちゃんの身体を叩き飛ばしてしまいます。
「き……杏子ちゃあんッ！」
杏子ちゃんは、そのまま地面に叩きつけられ——わたしは急いで駆け寄ります。
「そんな……杏子ちゃん……さやかちゃん、お願い、もうやめて！」
けれど、人魚の魔女のその巨大な腕は——わたしが反応する間もなく、ぬっと伸びてきて。
「さや……か、ちゃん」
ぎりぎりと音を立て、わたしを摑みとっていました。
容赦のない力に息ができず——そしてわたしの中で、何かが軋む音が聞こえます。
「さやか……ちゃん、お願いだから……」
——元に、戻って。
だけど、その声はもう——わたしの喉から発せられることはありませんでした。
「……さやかァ!!」
その杏子ちゃんの叫びをどこかで聞き——
気がつけば、わたしは地に倒れ伏していました。

むせ返る息で必死に顔を上げると、甲冑の腕を斬り飛ばされたさやかちゃんがそこにいて——そして青い返り血を全身に浴びた杏子ちゃんが、叫んでいて。

「アンタ……信じてるって言ってたじゃないか！　この力で人を幸せにできるって！」

そして槍を構え、突撃した杏子ちゃんに——さやかちゃんの剣が伸びます。

杏子ちゃんの槍が甲冑の胸に突き刺さり——さやかちゃんの大きな剣が、杏子ちゃんのお腹を切り裂くのは同時でした。

鮮血が飛び散り——何かが、割れた音が聞こえました。

それは、取り返しのつかない何かが壊れた音で——

もう戻れない何かが始まっているんだって——白くもやがたちこめる音のない世界で、わたしは悟ります。

「……オマエは、アタシがなりたかったアタシなんだぞ——」

その痛いほどの静けさの中で——

「……アタシのしてきたことを、かっこよく否定してくれる存在だったんだぞ」

まるで泣いているような、その声が響いていました。

「——頼むよ、神様……こんな人生だったんだ……せめて一度ぐらい、幸せな夢を見させてよ……」

絶望の嘆きは、こだまし続け——どこかで鈍い音がします。

それはまるで、世界の底が外れたような轟きでした。
立っているところが不意に無くなり、底のない世界へと落ちていくのだ、と思いました。
深い泥の中に沈み込むような、ふわふわとした世界で——
このまま落ちるのもいいかな、とわたしは思っていました。
この闇の底にはきっと、さやかちゃんがいて——
そして、マミさんがいて。
その他、たくさんの魔女になってしまった、魔法少女たちがいて。
寂しくなんかないよ。
みんな、一緒だよ。あっちには、もう苦しみなんてないんだよ。
そう——優しく囁かれている気がしました。
わたし……最後まで……ホントに最後の最後まで役に立たなかったけど……

——ごめんね。

——ごめんね、さやかちゃん。杏子ちゃん……

けれど——

意識が途切れる、そのぎりぎりのところで。

「何があろうと、死なせないわ」
凛とした声がして——わたしは、誰かの柔らかな手で身体を包まれていました。懸命に目を開くと、そこには真剣な表情で覗き込む、白く整った顔立ちがあって——
「ほ……ほむら、ちゃん」
そう、声に出そうとしたんだけど——
もう、わたしの声は声にすらならなくって。
頭がずきずきとしていて、身体中に力が入らなくって。
細い糸でかろうじて繋がっている意識のどこかで、ほむらちゃんが叫んでいて。
「——杏子！」
「よお……」
それは、どこかから聞こえてくる——消え入りそうな杏子ちゃんの声でした。
「その子を、頼む……アタシのバカに、付き合わせちまった……」
「……あなた」
「やめとけ——アンタは、足手まといを連れたまま戦わない主義だろ？　いいんだよ。それが正解さ」
「……」
「ただひとつだけ守りたいモノを、最後まで守り通せばいい……ハハ、何だかなぁ。アタ

シだって、今までずっとそうしてきたはずだったのに……」
そんなふたりの会話は、まるで夢の中の言葉みたいに聞こえていて――
「……行きな。コイツは、アタシが引き受ける」
杏子ちゃんのその言葉を最後に――
わたしの意識は、唐突に白く染まっていきました。

だから……
ここからは、夢なのかもしれません。
長い、長い……夢だったのかもしれません。

夢の世界で、さやかちゃんを抱きしめる杏子ちゃんがいました。
さやかちゃんの身体からは絶え間なく黒い霧のようなものが放たれ続けていて――
杏子ちゃんの胸元のソウルジェムはそれに応じるように、深紅に輝いていました。
黒と赤は交わることなく、互いに弾き合い、それでいて寄り添い合っていました。
でも、杏子ちゃんのソウルジェムはいつもより遥かに光の量が多くて――
まるで破裂しそうなほど、光が溢れ出していて――
「心配すんなよ、さやか……アンタだけ置き去りにしやしないって……」

その光に照らされた杏子ちゃんは、まるで天使のように優しく微笑んでいました。
「独りぼっちは、寂しいもんな……いいよ。一緒にいてやるよ。さやか……」
その瞬間——
さやかちゃんも、どこか微笑んだ気がして——
見る間に、杏子ちゃんのソウルジェムから広がった光がすべてを包み込み……
わたしの意識ごと、すべての希望ごと——
辺りを、真っ白な世界へと染め上げていったのでした。

○

——ああ、わたし、死んしゃったんだ……
さやかちゃんを助けようと頑張ったけどダメで。
杏子ちゃんまで巻き込んじゃって。
結局、何もできず、誰の役にも立てなくて。
目の前で起きる悪夢のような出来事に、ただおろおろと泣き、狼狽えるだけで。
そんなの……すごく悲しいけど……でも……今度もし、生まれ変わったら——

もう少しちゃんとした……自分になれたらいいな……

そんなことを考えながら——

わたしは、どこかを漂っていました。

そこは、ミルクのような白い霧の立ちこめた世界で——けれど、不思議とすこしも怖くなくって。

ただ、パパやママやタツヤに、何のお別れもできずに死んでしまったことが申し訳なくって、それを思った瞬間、すこし悲しくなりました。そして悲しいという気持ちを思い出した、その時——

さやかちゃんと杏子ちゃんはどこだろう、と気がつきました。ふたりも死んでしまったことは、どうしてか理解できていて……それなのに、ここにはわたしひとりなのでした。

上も下も、地の先の先まで、真っ白で——

どこまでも広がる、その白い世界にひとりぼっちで——

そこに、その声が聞こえてきました。

(……佐倉杏子には、本当に美樹さやかを救える望みがあったの?)

その冷たく響く声色には、聞き覚えがあります。

(まさか。そんなの不可能に決まってるじゃないか)

その呑気でかわいらしくて、でもどこか不安になる声にも聞き覚えがありました。
（なら、どうしてあの子を止めなかったの？）
（もちろん無駄な犠牲だったら止めただろうさ。でも今回、彼女の脱落には大きな意味があったからね）
その声の連なりに、嫌なことを思い出しそうになります。
思い出しちゃいけない、と思いつつも、次々に見たくない光景が思い出されていきます。
首の無い、黄色い華やかな衣装の少女。
剣を持ち、赤黒く染まった、青い衣装の少女。
そして、折れた槍で身体を支える、赤い衣装の少女。
（この星では、成長途中の女性のことを少女って呼ぶんだろう？）
呑気な声は、のんびりと何事も無い口調で続けます。
（だったら、やがて魔女になるキミたちのことは——魔法少女と呼ぶべきだよね？）
マホウ……ショウジョ。
その言葉が、何を意味していて——
どれほどの、希望と、羨望と、絶望の折り重なった言葉か、わたしは知っていて。
（これでもう、『ワルプルギスの夜』に立ち向かえる魔法少女はキミだけしかいなくなった。もちろん一人では勝ち目なんてない。だから、この街を守るためには——）

「まどかが、魔法少女になるしかないわけだ」

その言葉で——

死にたい、と初めて思いました。

わたしのいる白い世界は、白なんかじゃなくって——

闇よりも濃い、底の見えない世界だと気がついていました。

真っ黒に塗り潰されていく意識の中で——今こそやっとわかりました。

生き返っても、いいことなんて何もない。

もうさやかちゃんも、マミさんも、杏子ちゃんもいない。

魔法少女にされるくらいなら——このまま、ずっと……

この白い世界から戻りたくない。

……うん、そうだよね。

このまま——消えちゃおうよ……わたしには、もう……

友達なんて……いないんだから。

第十章　もう誰にも頼らない

私には——友達が、いない。
いえ、私には友達という存在がよく理解できない。
クラスメイトと友達の境界がわからない。知り合いと友達の境界がわからない。そして、親友と友達の境界がわからない。だから、私は人との距離感にいつも迷う。
この人は友達なのか、友達ではないのか。
ただのクラスメイトなのか、それとも知り合いに過ぎないのか。
いつも、そんなことばかり考えてしまう。そう、物心ついた時からずっと——
ひとり、ぐるぐるとそんなことばかり考えている。
それは、あの日、あの教室で——
あの子と出逢う時まで、ずっと……

「はーい、それじゃ自己紹介いってみよー」
担任の……確か、早乙女和子先生が明るい声でそう私を押し出す。
途端に、教壇の上で——私は、狼狽える。胃がきりきりと痛み出す。いつまで経っても

人前で話すことに慣れないし、こうやって三十数名の人間の注目を集めておいて放置するっていったいどういう神経なんだろう、と不思議に思う。

思うけれど——仕方が無い。

それが、ある意味、転校生の宿命なのだから。

「あ……あの……」

けれど、私の口は、私の内面に反して饒舌ではない。

私の世間に向けられた外面は、とんでもなく臆病で、人見知りで——

「ああ暁美、ほ、ほむら、です。その……どうか、よよろしくお願いします」

そんな、無様でかっこわるい紹介を今回もしてしまった——反省。

「暁美さんは心臓の病気でずっと入院していたの。久しぶりの学校だから色々と戸惑うことも多いでしょう。みんな、助けてあげてね」

最初からそう言ってくれればいいのにって恨めしくなるほど明瞭な紹介をしてくれた早乙女先生は、私の名前——暁美ほむら、と黒板に書き綴って、クラスの生徒たちに笑顔を向ける。

ちなみに、私は私の名前が嫌いだった。

ほむら、なんて——どこの暴走族かと思う。

しかもひと世代以上古い、不良グループのようだと思う。

今時、三つ編み眼鏡の私にとって——嫌がらせとしか思えない名前だった。
それに、これ。
「ほむらって凄い名前だね！」
ホームルームが終わって、早速、隣の席の子が満面の笑顔で話しかけてきた。
それにつられるように、次々とクラスメイトたちに囲まれる。
「暁美さんって、前はどこの学校だったの？」
「前は部活とかやってた？　運動系？　文化系？」
「すごい長い髪だよね～。毎朝編むの、大変じゃない？」
その怒濤の質問攻撃に、やっぱり私は狼狽える。
「あの……わ、私、その……」
狼狽えまくって、やっぱり眼鏡を触ってしまう。
後で、指の跡を拭かないといけなくなるというのに。
けれど……そんな時だった。
「暁美さん、保健室行かなきゃいけないんでしょ？　場所、わかる？」
そう割って入ってきた少女がいた。
はっとするほど、心に染み入る笑顔を持つ少女だった。
それは、まるで——春の日だまりのような。

思わず、口をぽかんと開いて見とれてしまうかのような。
「え？　いいえ……」
何が何だかわからない私がそう答えると、
「じゃあ案内してあげる。わたし保健係なんだ。――みんな、ごめんね。暁美さんって休み時間には保健室でお薬飲まないといけないの」
少女はそう言うと、誰からも恨みを買うことなくその場を収めて――
私を教室から連れ出してくれていた。
前を進む少女の背中を見つめながら、おっかなびっくり廊下を進む私だったけど――
正直、有り難かった。
私は、とにかく人の中にいるのが苦手で――
その次に苦手なのが、質問攻めにあうことだった。
「ごめんね。みんな悪気はないんだけど……」
やがて、少女は振り向くと春風のような微笑みをみせてくれた。
「転校生なんて珍しいから、はしゃいじゃって」
「いえ、その……ありがとうございます」
私は、とりあえずそう言って頭を下げていた。
「そんな緊張しなくていいよ。クラスメイトなんだから」

少女はそう笑った後――

「わたし、鹿目まどか。まどかって呼んで」

そう自己紹介してくれた。

鹿目――まどか。

その名前は、どうしてか――深く、私の心に染み込んでいく。

けど――私は、人を名前で呼んだことなんてない。幼稚園から中学二年となった今まで一度もない。だから、初対面の人間をいきなり、まどか、なんて呼び捨てにすることなんてできない。

「だからわたしも、ほむらちゃんって呼んでいいかな？」

私の内面の動揺を吹き飛ばすような明るさで、少女――鹿目まどかはまた微笑んだ。

この微笑みは、反則だ。

なぜか……私の身体から、力が抜けていく。

がちがちに凝り固まった、心の防護壁ごと吹き飛ばしていく。

どうしてよいのかわからず、私は言った。

「……私、その、あんまり名前で呼ばれたことってなくて……すごく、変な名前だし」

「え～？　そんなことないよ。なんかさ、燃え上がれ～って感じで、かっこいいと思うな」

「……名前負け、してます」

とりあえずそう反論してみると、鹿目さんは、立ち止まってこちらを振り向きながら——また、明るく微笑んだ。

「そんなの勿体ないよぉ。せっかく素敵な名前なんだから、ほむらちゃんもカッコよくなっちゃえばいいんだよ」

それは——

びっくりする価値観だった。

少なくとも、私が十四年間生きてきた世界で、そんなことを言う人間はいなかった。

この名前は私に課せられた十字架なんかじゃなくって——踏み台にして成長してしまえばいいんだよ、と言われた気がしていた。

——けれど。

そんな新しい価値観を見せつけられたところで、すぐに私が変わるわけじゃない。

現実の私は、とにかく冴えなくて、何をしてもどんくさい人間だった。

例えば、数学の授業中。

黒板に書かれた問題を前に、私は冷や汗いっぱいだった。

目の前の数式がまるで魔法の呪文か何かのようにしか見えなかった。吐き気がこみ上げ、景色も白く霞み始める。まずい。貧血の症状が始まっている。

その顔色を心配してくれたのか、数学の教師は言う。
「あー、うん。君は休学してたんだっけな。友達からノートを借りておくように」
私は、ひとつ頭を下げると、逃げるように自分の席に戻った。
すぐにもその場から消えてしまいたかった。
体育の授業なんて、もっと悲惨だった。
肝心の走り幅跳びが始まるその前の準備体操の時点で――
わたしの低血圧は、さっそく私を苦しめていた。
「準備体操だけで貧血って、ヤバイよね～」
「半年もずっと寝てたんじゃ、仕方ないんじゃない？」
ひそひそひそひそ。
そんな声が、どこからともなく聞こえてくる。
ひとり、グラウンドの片隅に座り――私は、どうして私の身体はこんなに弱いんだろう、と必死に涙をこらえていた。

私の心臓は、生まれつきとても血管が細い。
だから、急激な運動をしたり、極度に緊張したりすると、胸がどうしようもなく苦しくなった。それはやがて――なんでもない時にも無意味なプレッシャーへと変わり、結果、

極度の人見知りとなった。いろいろな病院に入退院を繰り返し、その都度、学校も変わった。当然、友達もいなかった。

みんなが当たり前のことを当たり前のようにこなしていく中、私だけが取り残されていくような焦燥感、無能感――それだけが蓄積されていった。

――どうして、私だけこんな身体なんだろう？

考え出すと、涙が止めようも無くこぼれ落ちた。

――どうして、私だけこんなに苦しい人生なんだろう？

――いっそこんな身体なんて捨て去ってしまいたい。

学校からの帰り道――鉄橋の上で、そう思った私だった。

パパもママも懸命にお医者さんを探してくれるけど……その度に、引っ越しまでしてくれるけど――それが、次第に家族の重荷になっていることくらい私にだってわかっていた。私の為に、近所付き合いがリセットされ、家を探すことに労力がつぎ込まれ、そして今度こそは治るかもしれないという希望とともに、次の病院のある町へと引っ越す。けれど、そこでも病状に進展はなくって、また希望は失望へと変わっていく。やがて失望が絶望に変わるのは、時間の問題だった。

『――ほむらちゃんもカッコよくなっちゃえばいいんだよ――』

ふと、あの時の鹿目さんの言葉が耳奥に蘇る。

「かっこよくなんて……無理だよ……私、何にもできない……」
橋の下を流れる川を見つめながら、ついに涙が溢れ出した。
「人に迷惑ばっかりかけて、恥かいて……どうしてなの？　私、これからもずっとこのままなの？」
その疑問は、こぼれ落ちた涙とともに遥か下の水面に流されていく。
《だったらいっそ——死んだ方がいいよね》
その声を聞いたのは、その時だった。
初めは、私の心の声だと思った。私の弱い、いじけた内面の声だと。
だから、私はどこか投げやりに答える。
「死んだ方がいいかな……」
《そう、死んじゃえばいいんだよ》
声は、すぐさま答えてくれた。
それは、私の声じゃなかった。そうではなかったけれど、どこか甘く、安らかに、感じられた。
それがどこから聞こえて、誰の声なのかなんて、もうどうでもよかった。

死、というその先に広がる世界が、とてつもなく甘美なものに思えていた。

そして――

ふと辺りを見回すと、そこはもう鉄橋ではなくなっていた。

いつしか、私の足下は奇怪な人の形が描かれた石畳となっていて――空は赤く、雲はとぐろを巻いていた。そしてけたたましい嗤い声が周囲に響き始め……地鳴りとともに、地平に巨大な石造りの門が現れていた。

猛烈な地の振動でよろけた私は、めきめきと姿を変える世界に圧倒されていた。膝ががくがくと震え始め、立ち上がることもできなくなっていた。

《さあ、死のうよ》

また、声が聞こえた。

けど、その声にはさっきまでの甘さが消え失せていて――

ただ、不気味に私の身体を撫で回すようだった。

《こちら側に――おいでよ》

その場にへたり込んだまま動けなくなっていた私は、いつのまにか、落書きみたいな化物たちに囲まれていて――

「い……いやあああああっ」

そう叫んだ、瞬間――どこかから弾けるような光が、拡散して。

目映い光が、私を包んでいることに気がついた。
「――間一髪ってところね」
顔を上げた私の目の前には、黄色い艶やかな衣装を着た少女が立っていて――
「もう大丈夫だよ、ほむらちゃん」
もうひとり、ピンクのかわいらしい衣装に身を包んだ小柄な少女がこちらを見て微笑んでいて――
そして、その春の日だまりのような微笑みに、私は見覚えがあって――
「あ、あなたたちは……」
そう震え声で訊いた私に、
「彼女たちは、魔法少女」
背後から、かわいらしい声が聞こえてくる。
「魔女を狩る者たち、さ」
振り返ると、そこには見たことも無い奇妙な生き物が、ちょこんと座っていた。
全身が目映いほどの真っ白で――
耳の中から、また長い耳が生えていて――長いふわりとしたしっぽを揺らめかせていて。
――魔女？　狩る、者たち……？
「いきなり、秘密がばれちゃったね」

春色の笑顔を持つ、ピンク色の少女――鹿目まとかさんは、照れたように微笑んでいた。
「クラスのみんなには、内緒だよ？」
そう言うと同時に――
鹿目さんの腕が発光し、瞬時に大きな弓を構え……黄色の少女は、大きな銀色に輝く銃を構えていて――息の合ったタイミングで、ふたりして異形の者たちに撃ち放っていた。
耳をつんざくような、轟音とともに――
無数のピンクと黄色の光を撃ち込まれた、異形の者達は消え失せていった。
そそり立つ巨大な石の門はがらがらと崩れ、空は猛烈な渦を巻き――やがて、壊れた世界は砂のように拡散していく。
私は、ただ、ただ――
目の前で何が繰り広げられているのかわからなくて、呆然としていたのだった。

○

「鹿目さん……いつもあんなのと戦ってるんですか？」
私が、そう尋ねたそこは――
巴マミ、と名乗った黄色い衣装の少女が住む瀟洒なマンションの一室だった。

さっき見た怪物が、魔女と呼ばれる存在で。
巴マミと鹿目まどかが、魔女に対抗する魔法少女と呼ばれる存在で。
そしてさっき迷い込んだあの壊れた世界が、魔女の結界と呼ばれる場所で――
そんな説明をどれだけ受けても、いま目の前でシフォンケーキを頬張るふたりの女子中学生を前にすると、にわかには信じる気にはなれなかった。
信じることなんてできなかったけど――
恐る恐る横を見ると、あの白く長い耳を持つ、不思議な生き物がそこにいた。
くりくりとしたかわいらしい瞳を赤く輝かせ、私の顔を無邪気に覗き込んでくる。こんな生き物――見たことなんてない。
「んー、いつもって……そりゃマミさんはベテランだけど、わたしなんて先週キュゥべえと契約したばっかりだし」
照れたように笑いながら、鹿目さんは切り分けたケーキを美味しそうに口に運ぶ。
「でも今日の戦い方、以前よりずっと上手かったわよ。鹿目さん」
そう巴さんに褒められて、鹿目さんは、また照れたように微笑んでいた。
どうやら、巴マミというこのどこか大人びた奇麗な人は、私や鹿目さんより年上の中学三年生で――そして、魔法少女としても先輩らしかった。
「危ないところだったわ」

そう巴さんは私を見て、優しく微笑む。
「学校を出たところで気がついてよかった。あなたに魔女の口づけがあることに――」
そう言って、私の首筋を指差した。
魔女の口づけとは――
心の弱った人に魔女が取り憑いた時に浮かび上がる印だと聞いて……私は、無性に恥ずかしくなって俯いた。弱い私は……あの時、死の世界に憧れた。いっそこのまま鉄橋から飛び降りてしまえば、何もかもから解放されるって、そう思っていた。
「誰にでも、不安になる時はあるわ」
巴さんは、私の心を読むようにそう優しく呟いた。
「そんな心の隙につけ込むの――あいつらは」
誰にだってある――それはそうだろう。
けど、私の場合は。
不安な時がほとんどで……もし、本当に魔女という存在がこの世にいて――そして心の弱い人に取り憑くのだとしたら。これからもずっと弱い私は襲われ続けることになる……
どこまで自分は迷惑な存在なのか、と溢れかけた涙を懸命にこらえていると――
「大丈夫だよ、ほむらちゃん」
鹿目さんが、私の瞳の底を窺うように微笑んでいた。

「わたしがいるし、マミさんもいるよ。心なんてすこしずつ強くなっていくよ」
「でも――」
私は、こぼれる涙とともに尋ねていた。
「あなたは平気なんですか？　怖くないんですか？」
すると、鹿目さんはまた照れたように笑う。
「……なんて、えらそうなこと言ってるけど、わたしも恐がりだったんだよ。人よりずっと弱虫だったと思う。けれど、今は――魔女をやっつければそれだけ大勢の人を助けることができて――それが、怖さよりも嬉しいの。わたしなんかが人の役に立てていることが嬉しい」
そう、たどたどしい言葉で告げる鹿目さんを、巴さんは優しく見つめて言った。
「鹿目さんには、〝ワルプルギスの夜〟が来る前に頑張って一人前になっておいてもらわないとね」
その言葉に、瞳を輝かせ、はい、と頷く鹿目さんは――
弱虫で何もできない私にとって、とても眩しくて……
そして、私は――鹿目まどかという少女に憧れている自分に気がつき始めていた。

そこは、地獄のようだった。
空は赤黒く変色し、人々はとうに逃げ失せていた。
町は壊滅し、廃墟と化した建物を容赦なく紅蓮の炎が染め上げていた。
そして今、足の踏み場もない瓦礫の中には――
無惨に、見滝原中学校の制服が乱れ散っていた。
それは、巴マミの身体だった。
いや――巴マミだった者の身体だった。
〝ワルプルギスの夜〟。
最強にして最悪の、災厄。地獄の中の地獄。
現れただけで、人の力など塵芥のように吹き飛ばし、暴虐の限りを尽くす、最凶の魔女。
それが、ついにこの世界に現れていた。
数々の魔女に怯むことなく、いつも颯爽と、そして艶やかに討ち滅ぼしてきた巴マミの死を前に――私は、恐れおののいていた。この世に魔女という存在がいようと――それに対抗する魔法少女がいる限り大丈夫なのだ、という私の心の平穏は、今完膚なきまでに破

られていた。
「……じゃあ、行ってくるね」
凛と響く、その声に――
私は顔を上げる。
「そんな、巴さん、死んじゃったのに……」
「だからだよ。もう〝ワルプルギスの夜〟を止められるのは、わたしだけしかいないから」
鹿目さんは、どこか悲しげに――そして、透明な笑顔で微笑んでいた。
「無理よ！　一人だけであんなのに勝てっこない！　鹿目さんまで死んじゃうよ！」
私は、心からそう叫んでいた。
初めて、巴マミと鹿目まどかと出逢った時から、ふたりが数々の魔女を討ち滅ぼしてきたことは見てきたけど……あれは、格が違う。桁が違う。次元そのものが違っている気がする。何をどうしても勝てっこない――そんな、確信だけがあった。無謀だ、という思いだけがあった。
「それでも――」
鹿目さんは、宙に浮かぶ怪物を見つめながら言う。
「わたしは魔法少女だから。みんなのこと守らなきゃいけないから」
その優しい眼差しに、私の瞳から涙が溢れ出した。

「……ねぇ、逃げようよ……だって仕方ないよ。誰も鹿目さんを恨んだりしないよ……」

私は——

世界がどうなろうと、〝ワルプルギスの夜〟が何をしようと……

鹿目まどかに生きていてほしかった。彼女の微笑みは——言葉は、私を強くしてくれた。

私はまだもうすこし頑張れるかもしれない、と思わせてくれた。彼女がいなくなったら——

私はどうすればいい？　私は、どうやって生きていけばいい？　なんて言えば、思いとどまらせることができるの？　私は——

その時、私の心は突然、静止した。

私——自分のことしか考えていない。

私はいったい、鹿目さんの何なのだろう？

友達？　ううん、出逢ってから今まで、一方的に勇気を与えられて、守られてきただけの存在だ。私の方から、鹿目さんの役に立ったことなんてない。そんな対等でもない私は、鹿目さんの何なの？

いつも心をよぎるその不安が、こんな時に限って、突然胸いっぱいに広がって——

私の言葉は、途絶えてしまった。

「ほむらちゃん、わたしね」

そんな私に——鹿目まどかは、言う。

「あなたと友達になれて嬉しかった」
——私は。
「あなたが魔女に襲われたとき、間に合って……今でもそれが自慢なの。だから魔法少女になって本当に良かったって、そう思うんだ」
——でも、私は。
「さよなら、ほむらちゃん。元気でね」
鹿目まどかは——
その瞬間、胸元のソウルジェムを輝かせ——世界全体を包み込むように輝かせ、飛び立っていた。
地平で蠢く、とんでもなく巨大な魔女——〝ワルプルギスの夜〟目掛けて。
「……いや……」
私は、ただ、馬鹿みたいに。
馬鹿みたいに——空を切り裂き、光の矢と化して、巨大な魔女に突入していく少女を見送ることしかできなくって——
「……嫌ぁ！　行かないで！　鹿目さぁん!!」
子供のように、泣き叫んでいるだけだった。

雨が、降り続いていた。
私の涙は枯れ果てていたというのに——今度は、世界が泣いていた。
私のような役立たずではなく……まるで世界が、誰をも幸せにする笑顔を持つ少女を失ったことを悲しむようだった。
「……鹿目、さん」
私の足下には——黒ずみ、ぼろぼろになった小さな身体が転がっていた。
まだあどけなさの残る身体には、学校の制服が焼けこびりついていて……明るかった髪も焼けて変色していた。奇跡的に顔の周囲の損傷は少なくって——まるで眠るように目を閉じる鹿目まどかは……もう、二度と動くことはおろか、笑うこともない一個の肉塊と成り果てていた。
「どうして……」
雨で濡れた髪が、私の頬にこびりつく。
それは口にも入ってきたけど、私は構わず叫び続ける。
「どうして……死んじゃうってわかってたのに……私なんかを助けるよりも……あなたに生きててほしかったのに……！」
私の命なんかよりも、何倍も、何百倍も貴重だったその命。その微笑み。その温かさ。
私にはどうしても納得できなかった。そして、同時に、たまらなく自分の存在が許せな

くなった。あんな貴重な存在を失ってまで、この私が世界に残る意味がわからない。残された意味がわからない。

「その言葉は、本当かい？」

不意に聞こえたその声は――

あの、白い生き物のものだった。

たしか、キュゥべえと呼ばれていた、人語を操る不思議な存在。

顔を上げると、それが……長いしっぽを揺らめかせ、瓦礫の上に、ちょこんと座っていた。

「暁美ほむら――キミは、その祈りのために、魂を賭けられるかい？」

口調こそ、いつもの、のんびりとしたかわいらしい声だったけど――

その言葉には、どこか底冷えするような何かが感じられた。

「戦いのさだめを受け入れてまで、叶えたい望みがあるのなら――僕が力になってあげられるよ」

その言葉で、理解できた。

たしか、巴さんも、鹿目さんも――

たったひとつの願いを叶えるために、このキュゥべえと魔法少女となる契約をしたということだった。

「……あなたと契約すれば、どんな願いも叶えられるの？」
そう掠れた声で訊き返すと、
「もちろんさ。どうやら、キミにはその資格がありそうだしね。教えてごらん。キミはどんな祈りでソウルジェムを輝かせるんだい？」
「私は……」
ゆらりと立ち上がると――
私は、一度眼鏡を取り去り、涙を拭う。
そして、キュゥべえを睨みつけるように――迷うこと無く言っていた。
「鹿目さんとの出会いをやり直したい。彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守る私になりたい」
その瞬間――
痛みに似た衝撃が、私の中を貫く。
身体の隅々を駆け巡った何かが次第に大きくなり、涌き出る力となっていく。
やがて、私の胸元から光が溢れ出し、何かが浮かび上がる。
それは、紫色の宝石だった。
きらきらと瞬き、ゆらゆらと内部に炎を抱くように輝いていた。
「契約は成立だ。キミの祈りは、エントロピーを凌駕した」

溢れる光で、白く輝く世界の中――
キュゥべえの言葉は響く。
「さぁ、解き放ってごらん。その新しい力を」
宙に浮かぶ――私のソウルジェム。
その紫の光に震える手を伸ばし……私は――私を掴んだ。
その瞬間、どこかで歯車ががちゃり、と噛み合い――
円を描く、盾のようなものの中に、無数の歯車が殺到して――
私の意識は――弾け飛んでいった。

○

そこは、白い世界で――
でも、とても清潔で、人工的な白い世界で。
風に揺れるカーテンを認めた瞬間……そこがどこであるのか気がついた。
「ここは……病院……？」
ぼうっと周囲を見回すと、やっぱりそうだった。
見覚えのある花瓶、見覚えのあるサイドテーブル、そして――

壁にかかったカレンダーを見て、私は、はっとした。
「時間が……戻ってる……？」
サインペンで塗りつぶされ——そこに示される今日は、〝ワルプルギスの夜〟がやってくる数週間前の日付だった。
起き上がり、サイドテーブルに置いたままの冊子に、視線を向ける。
そこには——〝編転入生の方へ……市立見滝原中学校〟と書いてあった。
そして私は——自分が左手で何かを固く握りしめたままでいることに気がついた。
この感触には、覚えがある——
それが、何か。それが、どこであったか。
どくん、と高鳴り始める鼓動をなだめるように——私は、そっと左手を開いた。
そこには、紫色の宝石が輝いていた。
「……ソウル、ジェム」
固い石の中で、ゆらゆらと燃える何かは、すべて夢なんかじゃない、と明確に告げていて
そして、それは、私の中から不思議な力を呼び起こしていた。
怖いとか、不思議であるとかそんな感覚よりも——とにかく、嬉しかったのだと思う。
時間は、戻った。

キュゥべえは、約束を守ってくれた。
もう一度、やり直せる。あの悪夢のようなすべてを書き直すことができる——
そして、この世界では——
まだ、あの少女が、春色の微笑みを浮かべていることがとてつもなく嬉しかった。

○

「はーい、それじゃ自己紹介いってみよー」
市立見滝原中学校——転入初日。
私は、担任の早乙女和子先生の前振りもどかしく、逸るように喋っていた。
「暁美ほむらですっ！　よろしくお願いします！」
もうそこには、かつての私はいなかった。
弱虫で、人見知りで、引っ込み思案な暁美ほむらは、どこかに吹き飛んでいた。
「あ、暁美さんは心臓の病気でずっと……」
私の勢いに気圧されながら説明を続ける早乙女先生をよそに、私は歩き出す。
教室の後ろから二番目——
そこで、びっくりしたように大きな瞳を見開く、あどけない少女の元に。

涙が出そうになるほど懐かしい、春色の微笑みを持つ、私の友達の元に。

「鹿目さんっ！」

そう言うと同時に、きょとんと私を見つめる、鹿目まどかの手を取った。

「私も――私も、魔法少女になったんだよ！　これから一緒に頑張ろうね！」

教室中がざわめいていたけど――

肝心の鹿目さんは、困惑したように慌てていたけど――

私は、構わなかった。

とにかく、抱きしめたくて仕方がないくらい、もう一度出逢えたことに感謝していた。

彼女の柔らかい手が温かく、生きていることを感じさせてくれたことが嬉しくて泣きそうだった。

そして――それを守るために、私は何でもやろう、と決心していた。

私の命は、ただそれだけの為にあるのだから。

その日の放課後に、さっそく鹿目まどかと巴マミに事情を説明した私だったけど、ふたりはどうもよく理解できないようだった。

私が別の時間軸から来たということ。

もしくは、滅びの未来から遡ってきたのだということ。

どれだけ説明しても、曖昧な笑みを浮かべて顔を見合わせるだけだった。
まあ、いい。
そんなこと理解されなくても、どうでもいい。
大事なのは、あの未来をもう二度と繰り返さないということだった。
とにかく、これからあの〝ワルプルギスの夜〟がやってくる前に、私に何ができるのかふたりに知っておいてもらうことが大事なのだ。
というわけで、放課後、ふたりの手を引っ張るように連れてきた河川敷の工事現場で——
私は、周りに誰もいないことを見計らってソウルジェムをかざす。
途端に、紫の光は拡散し——私の身体を包む。光の奔流(ほんりゅう)は私の身体を伝い、私の衣装を白と黒とグレーから成る魔法少女のものへと変えていた。
「わあ、かわいい」
鹿目さんが無邪気に笑っていたけど、かわいいだけなんて意味がない。
私は、私の存在価値を証明しなくてはならない。
「それじゃ、いきます！」
用意しておいたゴルフクラブを手に、長く放置されていたであろうドラム缶を睨む。
ひとつ息を吸って——私は、左腕に取り付けられた時計型の小盾に手を触れた。
その瞬間、かちり、と何かが嵌(はま)る音がして……そして、鹿目さんも巴さんも動きを止めた。

私の魔法少女としての能力――それは、時間操作だった。小盾に触れると、盾の中の砂時計が傾き、現実の時間を止めてくれる。私だけを時間軸から外してくれる。

その間に――

私は、力一杯、ゴルフクラブをドラム缶に叩き付けた。その衝撃に両腕がじん、と痛んだけど、とにかくボコスカと殴り続けた。ドラム缶はすこしずつ凹んでいく。形を歪めていく。

やがて、腕の小盾の中で、かちり、と何かが動く音がして――

四方八方から殴られたドラム缶は、がらん、と倒れた。

同時に、鹿目さんと巴さんの、「え？」という声が響く。

「と……どうですか？」

はあはあ、と肩で息をしながらその場にへたり込みつつ、私は訊いた。

「……どう思う？　マミさん」

鹿目さんの困ったような声に、

「うーん」

呆れたような、当惑したような巴さんの言葉が続いた。

「時間停止ねぇ……凄い魔法ではあるんだけれど、応用の仕方が問題よね」

「は、はい……」

「まず、いくら一方的に殴れるとはいえ、一発ごとの効き目がないんじゃ意味ないわ。そんな棒きれより、もっと威力のある武器を用意しないと」

その言葉に——私は、ひん曲がったゴルフクラブを見下ろして肩を落とした。

「あと、誰も動けなかったはずなのに、ドラム缶の位置が変わってるのは、どうして？」

「それは……私が触れたものだけ静止が解除されるんで、殴った瞬間にはドラム缶も動いちゃうわけで……」

「それだと敵にカウンターの機会を与えてしまうわ。時間を止めている間に、相手に一切触れないでダメージを与える方法を考えるべきね」

そう微笑んでくれた巴さんだったけど——

とんくさい私でもわかる。

せっかく魔法少女になったのに……私の能力は、まるで役に立たない。

正直、ドラム缶よりも私が凹んでいた。

けれど、私はへこたれなかった。

魔法少女の力によるものか——私の心臓は強くなった気がしていた。

もう、不意に動悸が激しくなることもない。胸が痛みだすこともなくなっている。

身体の不安が取り除かれたせいか、それともやるべきことができた使命感のせいか——

私はすこしだけポジティブになっていた。

――何としても、鹿目さんを守る。

――鹿目さんと巴さんの役に立てる、自分になる。

ネットで見つけたサイトの情報を元に、ホームセンターや薬局を片っ端から回った。そしてその材料を部屋の机の上に並べ、連日、連夜、それを作ることに没頭した。

魔女と戦うには、もっと強い武器が必要なのだ。巴さんのマスケット銃や、鹿目さんの弓のような――何か、強烈な攻撃力が私には必要なのだ。時間を止められるだけで、特定の武器魔法を持たない私にとって、それを自作するのは、必要不可欠なことだった。

何回かの失敗を経て――ついに、私はそれを作り出した。

いわゆる、パイプ爆弾。

それが違法で、反社会的行為で、見つかれば逮捕されることくらい私にだってわかっている。

けど、魔女という存在を滅ぼさないかぎり、この世界はやがて滅ぶ運命にある。

そして、私の友達――鹿目まどかが無惨な死を遂げることとなる。

それだけは阻止しなくてはならない。

この爆弾は、そんな熱い想いの結晶だった。

そして――その想いは、報われることとなる。

次の魔女が現れたのは、その爆弾が完成したまさに翌日のことだった。
ほとんどぶっつけ本番だったけど、巴さんも鹿目さんもその作戦を許可してくれた。
詳細はこうだ――まず鹿目さんの弓攻撃で魔女の気を引く。その隙に、巴さんの緊縛魔法で魔女を拘束し、さらに魔女に近づくためのルートを確保。そこで私が時間を停止させて、魔女に爆弾を仕掛ける。
実際これをやった時は、私の心臓がまた痛み始めるんじゃないかってくらい、緊張したけど――それは成功した。これまでの経験からわかったのだけど――私の時間操作魔法は、思っていた以上に長く時間を止められる。落ち着いて爆弾を仕掛けて逃げるくらいの余裕はある。その間に、作った爆弾のすべてを仕掛ける。起爆のタイミングと時間を再び動かすタイミングにこつがいるだけだった。
頭の中で何度もやったシミュレーション通り――私は、口の中で数字をカウントして、時間停止を解除。魔女が再び動き出そうとしたその瞬間、辺りに轟音が響いた。
火薬の量が多すぎたのか、爆弾を仕掛けすぎたのか……猛烈な爆風と白煙に呑まれた私は、頭からつま先まで真っ白になっていた。
「凄いよ、ほむらちゃん！」
鹿目さんが、勢い良く抱きついてきて――
「お見事ね」

巴さんが、魔女の消えた場所からグリーフシードを拾い上げて微笑んでいるのを見て……

私は自分が、初めて役に立ったことを知った。

じんわりと熱いものが瞳の奥から溢れてきて、その時になって改めて、魔女と対峙した怖さがやってくる。膝が震え始めると同時に、それでも、お腹の底から沸き上がる嬉しさにうち震えた。

これで。

これで、〝ワルプルギスの夜〟も倒せる。

鹿目まどかを——世界を、救うことができる。

私——魔法少女になってよかった。

崩れ去る魔女の結界の中で……

いつしか私たちの背後にちょこんと座っていたキュゥべえに、そう笑いかけていた。

○

今度も、地獄のようだった。

やっぱり空は赤黒く変色して、町は壊滅していた。

暴風が吹き荒れ、廃墟と化した建物を炎が染め上げている。

そして――

そこには、やっぱり巴マミの制服が乱れ散っていた。

何が間違ったのか、前と同じように巴さんを救うことができなかった。

時間停止の補助として、巴さんが緊縛魔法をかけようとしてくれて……それは〝ワルプルギスの夜〟にはまるで通用しなかったのだった。いつもの作戦が序盤で崩れさり、私たちは狼狽えた。三人の連携に乱れが生じていた。巴さんが〝ワルプルギスの夜〟の攻撃に呑まれ、鹿目さんが私を庇い、空に飛び退り、そこから立て直す。時間停止による、これでもかっていうほど大量のパイプ爆弾攻撃と、鹿目さんの最大出力の魔法の矢。魔力を極限まで振り絞ったそれぞれの一撃によって、〝ワルプルギスの夜〟を倒すことはできた。

確かに、巴さんは救えなかったけど――

けれど、鹿目さんだけは……救うことができた。

「……すごく、疲れた……ね」

もう涙も出ない瞳で、傷だらけの巴さんの身体を見つめた後――

私は、横で、仰向けになって手足を投げ出す鹿目さんの方を見た。

「……」

鹿目さんは、私の方を見なかった。

災厄が過ぎ去った空を見つめたまま、その華奢な肩を小刻みに震わせていた。

「……鹿目、さん？」
「うぅぅ……あぐぅぅぅッ！」
途端に、鹿目さんは苦しげな悲鳴をあげた。
そのまま、苦痛に身をよじり、胸を押さえてのたうちまわっていた。
「か、鹿目さんッ！　どうしたの？　しっかりして！」
私が助け起こすと――
そこには、暗黒が広がっていた。
鹿目さんの手のひらのソウルジェムが――
まるで、とてつもない力を持った魔女のグリーフシードのように、黒く輝いていて――
「どういうことなの？　なんで、鹿目さんが――？」
私が狼狽えるその間にも、鹿目さんのソウルジェムから溢れる瘴気は増していく。
黒い、糸を引くような光が、周囲に拡散していく。
「あ……あああああッ……」
どこかで何かが割れる音が響いて――
それは、世界のどこかにヒビが入ったかのような、鋭い音で――
気がつけば、鹿目さんの瞳は白くなっていた。そして、そのソウルジェムに入ったヒビからは、黒い瘴気が溢れ出していて――すでに巨大な影となり、禍々しい形へと変化しつ

つあった。
もう声も出ない私は、夢中で左腕の小盾に手を触れていた。
――間違えた。何かを、間違えたんだ。
私は、震える手で小盾を必死に操作していた。
もう一度、やり直せば――真剣に考えて、やり直せば……
かちり、と時間の歯車が嵌り、急速に逆回転を始めかける滅びゆく世界の中で――
私は、見た。
そこに、白い魔物が座っていることを。
キュゥべえの瞳が、まるであざ嗤うかのように赤く輝いていることを。
「……まさか」
だけど、その瞬間――
私の意識は……弾け飛んでいた。

○

白い世界に戻る――
とても清潔で、人工的な白い世界。

そして、風に揺れるカーテンを認めた瞬間——今度は、すぐにここが病院であることに気がつく。

見覚えのある花瓶、見覚えのあるサイドテーブル、そして、サインペンで退院予定日に赤丸のつけられたカレンダー。

私は、数週間前の世界へと戻っていた。

恐る恐る開いた手の中には、やっぱり紫のソウルジェムが輝いていた。

けれど、私の中には前ここに戻った時の高揚感はなかった。

鉄を舐めたような、苦い思いだけがあった。

前の世界が消える時に見た、キュゥべえの嗤うような赤い瞳を思い出し——

「私たち……騙されている……」

そう震える思いで、呟いていた。

それから、窓の外の平和な世界を見つめる。

風がカーテンを揺らし、春の日差しが暖かく降り注いでいた。

ここは、見滝原——そして、ここにはまだ何も知らない鹿目さんがいて——巴さんがいて。

「伝えなきゃ……」

私は、冷たい決意とともに、ベッドから床に降りてソウルジェムを握りしめた。

「みんな、キュゥべえに騙されてる……！」

けれど――

私がどれだけ説明しても、どれだけ言って聞かせても、誰も信じてくれなかった。

何がどうずれたのか――今度の世界では、鹿目さんと巴マミさんの他に、クラスメイトの美樹さやかも――すでに、キュゥべえと契約した魔法少女となっていた。

「――あのさぁ」

がりがりとショートカットの髪を掻きながら、美樹さんは言う。

そこは、魔女退治前の作戦を決めていた廃墟ビルの一室だった。

暗く、ひんやりとしたコンクリート作りの室内に、ぎすぎすとした空気が漂い始めていた。

「キュゥべえがそんな嘘ついて、いったい何の得があるわけ？」

「そ、それは……」

私にだって、わからない。

明確に、何がどうなって、破滅に向かうのか、説明はできない。

けれど、私には確信があった。

あの滅びの瞬間――キュゥべえは、間違いなく嬉しげに嗤っていた。

何かを知っていて……いえ、知っていたというよりも、すべてがキュゥべえの思惑通りなのだと思った。私たちだけが、何か重要なことを知らされないまま、魔女との命のやり取りに放り込まれている——そんな薄気味悪さだけがあった。

「あたしたちに妙なこと吹き込んで、仲間割れでもさせたいの？　まさかあんた、本当はあの杏子とかいうヤツとグルなんじゃないでしょうね？」

「ち、違うわ！」

私は、慌てて否定する。

この世界では、美樹さんは鹿目さんの幼なじみでもあり、クラスメイトということもあって、割と連携がとれていたけど——隣町の魔法少女、佐倉杏子だけは、異質だった。私たちと行動を共にすることなく、ことごとくスタンドプレーを好む魔法少女で、よく勝ち気な美樹さんと対立していたのだ。

「さやかちゃん……それこそ仲間割れだよ」

悲しげに美樹さんを窘める鹿目さんの仲裁でなんとか収まったけど——その場には、いつまでも居心地の悪い空気だけが残った。

「どっちにしろ、あたし、この子とチーム組むのは反対だわ」

やがて私から目をそらすように、美樹さんは言った。

「まどかやマミさんは飛び道具だから平気だろうけど——いきなり目の前で爆発とか、ち

ょっと勘弁してほしいんだよね。何度巻き込まれそうになったことか」

その言葉に、しゅんとなる私だった。

前回の経験から、多少時間操作による爆弾攻撃の精度は増していたけど、今度の世界には美樹さんがいる。長剣を操り、近接戦闘系の魔法を使う美樹さんにとっては、私は足手まといでしかないのだった。

「暁美さんには、爆弾以外の武器ってないのかしら？」

巴さんが困ったように尋ねてきて、

「……ちょっと考えてみます」

私はそう答えるしかなくなった。

――諦めるわけには、いかない。

今度の世界に、私のことを信用しない美樹さんがいようと。そして身勝手に動き、美樹さん同様、近接攻撃魔法の使い手である佐倉杏子がいようと。〝ワルプルギスの夜〟は、また確実にやってくる。その時までになんとか鹿目さんを、世界を救う手だてを見つけなくてはならない。

――とにかく、武器を。

私は、巴さんの銃や、鹿目さんの弓のような、遠隔攻撃手段を持つ必要に迫られていた。

それは、前回の反省からだった。

『ワルプルギスの夜』と称される超弩級の魔女には、未熟な連携ではとうてい勝つことはできない。この世界に美樹さんや、佐倉杏子という剣や槍を使用する魔法少女がいることはもう変えようのない事実なのだ。ならば、私は私の攻撃方法を変えて、より全員と連携のとれる手段を確立するべきだった。

考えたあげく、私は、足やネットを駆使して関東周辺の広域暴力団事務所を片っ端から調べ上げた。

警察に行けば単純に銃器があることは知っていたけど、治安維持の武器を奪うのは気が引ける。盗むならば、非合法的組織からが一番いい。

私は、時間を停止させて——堂々と、正面からとある暴力団事務所に入っていった。

映画で見るよりも、ずっと普通な人たちが中にいて——それでも私の足は震えた。何かの間違いで時間が勝手に動き出したら、私はどうなるのだろう、と不安になった。

それでも歯を食いしばり、事務所のあちらこちらを調べ漁る。拳銃を。何か、殺傷能力の高い武器を。鍵のかかった金庫にでも入っていたら出直そう。そう思っていたけど、あっさりと奥の部屋の棚に大量の日本刀やらと一緒に黒い銃器を見つける。いろいろな形のいろいろな銃があった。それが強力なのかさっぱりわからなかったので、すべて貰うことにした。以前、私の盾には、時間操作の他に、物を自由に出し入れできる能力があること

を見つけていたので、そこに片っ端から仕舞う。

——これで、倒す。

——今度こそ、『ワルプルギスの夜』を止める。

そのまま、無数の銃器を拝借した私は、人のいない山奥まで電車で向かって、銃器を扱う練習をした。どの弾がどの銃のものかなかなかわからなくって、安全装置を外さないと撃てないことすら、最初はわからなかった。魔法少女となっても、私の筋力はそれほど大幅には増加していない。だから、ワンカートリッジ撃ち尽くす頃には、握力が無くなるほど腕がしびれていた。大きな威力を持つ銃ほど、腕に跳ね返るダメージが大きい。

ネットでちゃんとしたグリップの仕方、構え方などを学びつつ——私は、なんとか銃に習熟していく。

だけど、それは——少し、遅かった。

私が、時間停止魔法を利用した銃器の一斉発射という攻撃方法を編み出したのは……美樹さんのソウルジェムが限界を迎える前日のことだった。

「……さ、さやかちゃん！　しっかりして！」

鹿目さんが、叫んでいた。

「テメェいったい何なんだ!?　さやかに何をしやがったッ!?」

佐倉杏子が、らしくない叫び声を上げていた。
巴さんは、ただ呆然としていて――
いつものように、みんなに指示を下すこともできなくなっていた。
美樹さんは、心に溜め込んだ穢れのすべてを――そのソウルジェムから吐き出していた。
「……さやかちゃん、やめて……お願い、思い出して！　こんなこと、さやかちゃんだって嫌だった筈だよ！」
その鹿目さんの叫びは――すでに魔女と化した美樹さんに届くことはなかった。
黒い霧に包み込まれた美樹さんは――いや、美樹さんだったモノは。
万華鏡のように光り輝くステージに君臨する、上半身が甲冑、下半身が人魚の魔女へと変わり果てていた。
「……くノ」
私は、咄嗟に心を決める。美樹さ――いえ、人魚の魔女は、すでに鹿目さんに向かってその殺意の束を振り下ろしていた。
左腕の小盾を操作――時間、停止。
人魚の魔女から繰り出され、鹿目さんに殺到する、数えきれないほどの車輪。
それに向けて、小盾の中から取り出したハンドガンを撃ち放つ。車輪の軌道をすべてずらして鹿目さんの安全を確保する。そのまま、人魚の魔女の身体に、パイプ爆弾を仕掛け

られるだけ仕掛けて、身を伏せた。
「……ごめん、美樹さん」
そんな張り裂けるような想いとともに――
私は、時間停止を解除させた。

美樹さやかは、吹き飛んだ。
人魚の魔女の結界は消え去ったけど――
駅構内では、誰もが放心していた。
「……さやか……畜生……こんなことって」
佐倉杏子は、壁を殴り――
「酷いよ……こんなの、あんまりだよ……」
鹿目さんは、泣き崩れていた。
私はただ――皆から少し離れた場所で、私たちを魔法少女へと誘ったキュゥべえのことを考えていた。
あいつは、何か知っている。
こうなることもすべて知っていて、私たちを契約させたに違いなかった。

あいつさえ――キュゥべえさえ殺せば。
少なくとも、ここから鹿目さんだけは救えるのではないか。
ひょっとすると、〝ワルプルギスの夜〟さえも出現しないんじゃないか。
冷たい決意とともに――私が、キュゥべえの元に向かおうとした時だった。
突然、身体が何かに搦めとられるように動かなくなった。
「……え!?」
――動かない。僅かにも。なぜ!?
懸命に視線を足下に向けると――私の身体には、いつしか無数のリボンが絡みついていた。
そして、そのリボンは見覚えのある黄色のリボンで……
次の瞬間、構内に銃声が響いていた。
と、同時に、ソウルジェムを撃ち砕かれた佐倉杏子の身体が、ゆっくりと崩れ落ちていた。
「あは……ははは……」
何が起きたのかわからず、呆然とする中――
暗い構内に、巴マミの掠れた笑い声だけが響いていた。
「そういうことなの……魔女……魔法少女……あはは」

「巴さん――」
「……ソウルジェムが魔女を産むなら……」
「巴さん、しっかりしてください！」
そう叫んだつもりだったけど――
私の身体は、全開で放出された巴マミの黄色いリボンにがんじがらめにされ、声すら立てられなかった。懸命に、左腕の小盾に触れようと思うけど――それもままならない。
「だったら――みんな死ぬしかないじゃない！　あなたも、私もッ」
「や……やめて……巴……さん」
そう必死に訴えたけど、巴マミの瞳はすでに虚ろに成り果てていた。
何かをぶつぶつと呟きながら、銀の銃口を私に向けてくる。
「死にましょう、暁美さん。みんなで」
そう巴さんが微笑んだ、瞬間――
その空虚な微笑みは、突如、静止した。
やがて、巴マミの身体は、ゆっくりと倒れていく。
「と、巴さん！」
いつしか、巴マミのソウルジェムを一本の矢が貫いていた。
そして、緊縛から解かれた私の前には――泣きながら魔弓を下ろす鹿目さんがいた。

「……嫌だ……もう、嫌だよ、こんなの……」
そう顔をくしゃくしゃにして泣き咽ぶ鹿目さんに駆け寄り――私は精一杯語りかけた。
「大丈夫――大丈夫だよ、鹿目さん」
「大丈夫じゃ……ないよ……もう……無理だよ……わたしたち、どうなっちゃうの……？　どうして、こんなことになったの……」
その細い肩を、柔らかな身体を――力いっぱい抱きしめて、私は言った。
「――キュゥべえ」
「……え？」
呆然とする鹿目さんの視線に自分の瞳を合わせるように、私は頷いた。
「言ったでしょ？　私たち、みんな騙されてるって」
「本当に、キュゥべえに……騙されてたの？」
「でも……でも、まだ大丈夫。きっと大丈夫よ。私と――鹿目さんがいれば、まだこの世界は救える。だから、しっかりして鹿目さん。ふたりで――〝ワルプルギスの夜〟を倒そう」
ふたりなら――
ふたりなら、きっと倒せる。
〝ワルプルギスの夜〟を乗り越えることができる。

そう――思っていた。
そう、私は――信じようとしていた。

○

瓦礫と化した町には、雨が降り注いでいた。
辺りは静まり返り、〝ワルプルギスの夜〟という超絶的な存在が消え去った後の、尋常ならざる物理的空白に大量の空気が注ぎ込まれる。それが雲を呼び、街を癒すかのような優しい雨を降らせていた。
その雨の中で――
私と鹿目さんは、倒れ伏していた。
ふたりとも傷のない箇所なんてなく、髪は焦げ、学校の制服はぼろぼろに成り果てていた。
それよりも深刻なのは、互いに魔法を使いすぎたせいで、ソウルジェムがもう真っ黒に染まっていることだったけど――私は、なぜかもう何もかもがどうでもよくなっていた。
力を使い尽くして、なんとか〝ワルプルギスの夜〟は撃退した。
けど、もうすぐ私たちのソウルジェムは限界を迎える。そして、私たちが次の魔女へと

成り代わる。では何の為に、私たちは死力を使い果たしたというのだろう。私は、何の為に時間を巻き戻して苦労を重ねてきたというのだろう。

「わたしたちも……もう、おしまいだね……」

か細い声でそう呟く鹿目さんに、私は訊く。

「……グリーフシードは？」

鹿目さんは、静かにかぶりを振った。

「……そっか」

そう口にしたことで、力が抜けていった。

急速に動いていく雲の彼方には、青空が覗けていた。

透き通るように深い、青。

何も思い悩むことのない、世界。

その遥か遠くにある気持ちのよい世界を見つめながら――

「……ねえ、鹿目さん」

私は、囁くように言った。

「私たち、このまま二人で怪物になって……こんな世界、何もかも滅茶苦茶にしちゃおうか……」

鹿目さんの顔がすこしだけ、私の方に向くのを感じていた。

その視線だけでも嬉しくて、私は言葉を続けた。

「嫌なことも、悲しいことも、ぜんぶなかったことにしちゃえるぐらい、壊して、壊して、壊しまくってさ……それはそれで、いいと思わない？」

辛いことの多い、人生だった。

心臓が弱かったせいで、学校にいるより、家族と過ごすより、病院にいることの方が多かった。

両親にたくさんお金を遣わせてしまった。クラスメイトたちとは打ち解けることができなかった。授業にもついていけなかったし、まともにスポーツの楽しさを味わうこともなかった。胸の痛みを恐れていたくせに、いっそ心臓なんて早く止まってしまえと願う毎日だった。普通に暮らせる人たちの心ない言葉や仕草に傷つき、それでいて周囲を呪う自分が嫌になる毎日だった。どうして自分だけが、といういじけた自分を嫌いになる毎日だった。

けど——

そんな極寒の世界に生きる私に、あなたは春の日だまりを注いでくれた。

それだけでも、私の人生は生きる価値があったと思う。

鹿目、まどか。

あなたがいたから、私はここまで生きてこれたのだ。

あなたは多分、どれだけ私が嬉しかったか理解できないだろう。どれだけあなたの笑顔に救われたかわからないだろう。けど、それは——あなたには悪いけど、ここであなたとふたりで死ねることをどこか嬉しく思ってしまう私が証明している。

あなたとともに、魔女になれるなら。

あの切り取られたような青空を見上げ——それも悪くないって思ってしまう、私を。

もう、私は否定できないから——

……と。

その時だった。

こつん、と乾いた音がして——次の瞬間、私の手のひらから光が溢れ出していた。

「——え？」

「さっきのは、嘘」

見ると、私の横で鹿目さんはあの春色の微笑みを浮かべていた。

その手にはいつしかグリーフシードがあり、私のソウルジェムに重ねられていた。

「……か、鹿目さん」

「一個だけとっておいたんだ」

私のソウルジェムは——真っ黒に染まっていたはずのソウルジェムは。

見る見るグリーフシードに濁りを吸い取られ、今、輝きを取り戻していた。

「そんな……なんで、私に……」
そう掠れた声で呟くのが精一杯だった。
「わたしにはできなくて、ほむらちゃんにできること、お願いしたいから……」
鹿目さんは、透明な笑顔でそう言った。
「ほむらちゃん、過去に戻れるんだよね？　こんな終わり方にならないように、歴史を変えられるって、言ってたよね……」
「……うん」
「だとしたら――お願いがあるの」
鹿目さんの瞳から、透明な雫がつたうと同時に――
鹿目さんのソウルジェムから、黒い瘴気が溢れ出していた。
「キュゥべえに騙される前の、バカなわたしを……助けてあげて――くれないかな」
その言葉が心深くに突き刺さり――涙が溢れた。
私は、声にならない声で、承知していた。
繰り返し、頭を頷かせていた。
鹿目さんの小さな手を握りしめ――
そして、瞳を閉じかける鹿目さんに呼びかけるように叫んでいた。
「約束するわ。絶対にあなたを救ってみせる。何度繰り返すことになっても、必ずあなた

を守ってみせる」
「……良かった」
そう微笑んだ鹿目さんは――
次の瞬間、苦悶の表情で顔を歪ませる。
手のひらのソウルジェムは、いよいよ黒い霧を辺りに放ち始める。
「……もうひとつ、頼んでいい？」
鹿目さんのその願いを――最後まで聞くことなく、私は悟っていた。
その想いに、とめどなく涙が溢れ出す。
「わたし、魔女にはなりたくない……」
震える手で鹿目さんは、黒く輝くソウルジェムを差し出した。
それはすでにひび割れ、今にも魔女が孵化しそうだった。
「嫌なことも、悲しいこともあったけど、守りたいものだって沢山、この世界にはあったから……」
「……まどか……ッ」
思わずそう叫んだ私に――
鹿目さんは、けぶるような微笑みを見せて、言った。
「ほむらちゃん……やっと、名前で呼んでくれたね……」

その鹿目まどかの最期の笑顔は——私には、もう滲んで見えなかった。
「嬉しい、な……」
その声が途絶えると、同時に——
私は、立ち上がった。
魔法少女の衣装へと姿を変え、小盾から銃を取り出す。
何度も涙を拭い、懸命に手の中の拳銃の照準を鹿目まどかのソウルジェムに向ける。
手が震えて、視界が滲んで、それは霞む。
けど、私の魂のすべてを賭けて気持ちを奮い立たせる。
溢れ出す、黒い瘴気の中心へとすべての怒りを向ける。
「必ず——あなたを、助け出す」
絞り出すように囁き、そして、声にならない叫びとともに——
私は、引き金を引いた。

○

目を覚ますと、そこは白い壁に覆われた病院だった。
飛び跳ねるように起き上がった私は、すぐさま病室の姿見に向かう。

そして、鏡に映る——冴えない、三つ編み眼鏡の少女を睨みつけた。
「誰も……未来を信じない……」
眼鏡を外し、手の中のソウルジェムを握りしめる。
身体の中から立ち上る力を、瞳に向け——視力を矯正させた。
それから、三つ編みを解き、長い髪を肩に、胸に、下ろす。
鏡の向こうで、私を睨む黒髪の少女に告げるように、言った。
「誰も、未来を受け止められない。だったら、私は——」

病院を抜け出した私は、すぐさま時間を停止させて、勝手知ったる暴力団事務所へ乗り込んだ。
前回の経験で、使い勝手の良いものを手際良く選び取り、そのまま薄暗くなる街を駆けた。
意識を総動員して、キュゥべえの行方を探し出す。
夜空を駆け巡り、あの白い魔物を探す。
そして——
あろうことか、鹿目まどかの家の外で、ちょこちょこと歩くキュゥべえを発見した。
そのかわいらしい容貌は、一瞬で私の頭に血を上らせ——

即座に、撃ち殺した。
持っている限りの弾薬を使い果たして、キュゥべえの死骸すら残さぬよう撃ち滅ぼした。
肩で息をしながら――
そのまま、二階のまどかの部屋の前に立つ。
カーテンの隙間からは、まどかが机に向かって、眉を寄せて宿題に頭を悩ませているのが見えた。
いつもの明るい髪、あどけない頬、人を疑うことのない澄んだ瞳――
その懐かしく、愛おしい姿に涙がこぼれる。
けど――泣いている暇はない。
すぐさま涙を手で拭うと、窓を開けた。
不意に吹き込んだ夜風に、まどかは驚いた表情で私を見た。
「……だ、誰？」
その耳奥を転がすような優しい声は、私の心を震わせる。
けど、なんとか心を整え――私は、告げた。
「まどか……よく聞いて。あなたに奇跡を約束して取り入ろうとする者が現れても、決して言いなりになっては駄目」
「……え？　あの……」

呆然とするまどかをよそに――
私は、去った。
あれ以上、話すのは無理だった。
あれ以上、あそこにいるのは不可能だった。
あと少しでも、まどかの声を聞いていたら――その体温を近くで感じていたら。
私の決心は、粉々に砕け散っていただろう。
まどかとともに行動したい、と思う自分を生み出していただろう。
だけど、それでは――また滅びがやってくるのだ。
避けようの無い、絶望の結末へとたどり着いてしまうのだ。
「――もう誰にも頼らない。誰にわかってもらう必要もない」
その日から、私は、魔女という魔女をひとりで討ち滅ぼした。
――もう手段を選んでいる場合じゃない。
――合法非合法なんて、知ったことじゃない。
私は、より強力な兵器を求め、在日米軍基地から、持つのもぐらつくような大きな武器を調達する。
それらを懸命に使いこなし、発見する端から、魔女に撃ち注いだ。
両手で同時に拳銃を使いこなせるようになっていた。

魔女の攻撃が自分に届くぎりぎりのところで見切る術を身につけていた。
時間停止を、より効率的に、より効果的に扱う技術に習熟していった。
爆薬の種類、銃器の特性、魔女の弱点を見抜く冷静な判断力に磨きをかけていった。
それは、無償というわけにはいかなくて、私の身体を容赦なく傷つけていったけど——
そんなもの、なんでもなかった。
「もうまどかには戦わせない。すべての魔女は、私一人で片付ける」
その想いだけが、あった。
まどかをもう二度とこちらの世界に関わらせない——その覚悟だけで、私は戦い続けた。
「そして今度こそ、〝ワルプルギスの夜〟を、この手で——」
あの、最強にして、最悪の、災厄。
その姿を思い浮かべるだけで、足の震える思いに襲われる最凶の魔女。
あれを——私ひとりで、倒す。

けれど——

〝ワルプルギスの夜〟の強さは、私の想像を絶していた。
吹き荒れる熱風は、街を焼き、人々を焼き、地表を崩壊させていた。
崩れ、傾いたビルに私は打ちつけられ——体中の骨が砕けていた。

――強い……強すぎる……

絶望しかける心を、必死に奮い立たせたその時――

それを、見た。

「なんで……どうして、なの……？」

遥か先の、崩れたビルの上。

そこには、鹿目まどかがいた。

胸の上で手をぎゅっと握りしめ、泣きそうな顔でどこかを見つめていた。

いや――まどかが見つめているのは、この私で――

そして、まどかの背後に白く小さなあいつの姿を認めた瞬間、私の心が絶望に呑み込まれた。

「だ……駄目ッ……まどか……！」

（仕方ないよ。彼女一人では荷が重すぎた）

その声に振り向いたまどかは――

自分の背後に異形の存在がいることに気がつく。

（そんな……あんまりだよ！　こんなのってないよ！）

まどかが私を見て、涙を浮かべてそう叫び――

キュゥべえは赤い瞳を輝かせて……囁くように言う。

（諦めたら、それまでだ。でも、君なら運命を変えられる）

ふたりの会話が、私の頭に響き渡る。

そこで、キュゥべえがわざと私に聞かせていることに気がつき――

私は、血が迸るほど唇を噛んだ。

あいつは――私を絶望させようとしている。私を絶望させて、魔女へと変えようとしている。

あげく、まどかを魔法少女へと導き、滅びの結末へとすべてを変えようとしている――

そのことに気がついて、体中から力を振り絞って叫んだ。

「……まどか！　そいつの言葉に、耳を貸しちゃ駄目！」

けれど――

それは吹き荒れる暴風と、〝ワルプルギスの夜〟の哄笑にかき消されて、まどかの元までは届かない。

（……本当なの？）

やがて、まどかは震える声でそうキュゥべえに尋ねていた。

（本当に、わたしにそんなことができるの……？）

（避けようのない滅びも、嘆きも、すべて君が覆せばいい。そのための力が、君には備わってるんだから）

——動かない。
私はすでに限界を超える血を流し、限界を超える魔法を使い果たしてしまっていた。
これまでのすべてを無にする悪魔の囁きを前に、私は何もできなかった。何もできない自分が悔しくて、涙が溢れ出した。
そんな私に——〝ワルプルギスの夜〟の重い一撃がさらに撃ち込まれる。
身体がばらばらになるほどの衝撃とともに——
私の意識は消えかけていた。
けれど——
瓦礫の下で、私は叫んでいた。
「騙されないで！　そいつの思う壺よ！」
しかし、それはもう、声になっていなかった。
私は、もう自分が生きているのかすら定かでなくなっていた。
（わたしなんかでも、本当に何かできるの？　こんな結末を変えられるの？）
頭の中に響くまどかの声に——悪魔が囁く。
（もちろんさ。だから——）
——駄目。
（だから……僕と契約して、魔法少女になってよ）

「――駄目ええええええええッ！」

泣き叫んだ私の声もむなしく――

目映い光が、世界を制圧していた。

温かで、安らかで、果てしなく強い、光。

それがまどかの立っていた場所から迸り、空を貫くように立ち上がっていた。

見ているだけで――感じるだけで、すべての生きとし生けるものを勇気づける、無限の光。

まるで、女神のような神々しさで立つ、魔法少女がそこにいた。

一度、凛々しく〝ワルプルギスの夜〟を睨みつけたまどかは――

手の中で輝く、大きな魔弓を構える。

そのまま、限界まで引き絞り――そして、放った。

それは、一撃で――

〝ワルプルギスの夜〟を粉々にし、辺りを吹き荒れていた熱風を根こそぎ消し去っていた。

「――本当に物凄かったね。変身したまどかは」

その呑気な声に――

もう睨みつける力もなく、私はその場に膝をついていた。
「彼女なら最強の魔法少女になるだろうと予測していたけれど――まさか、あの〝ワルプルギスの夜〟を一撃で倒すとはね」
キュゥべえ――いいえ、この世界のどこかからやってきた、白い悪魔。
「……その結果どうなるのかも……見越した上だったの？」
怒りを押し殺した私の声に、キュゥべえは軽く肩をすくめてみせた。
それから、〝ワルプルギスの夜〟が消し飛んだはずの場所を見る。
今、そこには――
〝ワルプルギスの夜〟をさらに超える――この惑星を飲み干そうかというほど巨大な魔女が出現していた。
「遅かれ早かれ、結末は一緒だよ」
呑気で、まるで邪気を感じさせぬかわいらしい声で、キュゥべえは言う。
「彼女は最強の魔法少女として、最大の敵を倒してしまったんだ。もちろん後は最悪の魔女になるしかない。今のまどかなら、おそらく10日かそこいらでこの星を壊滅させてしまうんじゃないかな」
鹿目まどか。
私の、友達。そして、最強の魔法少女にして――最悪の魔女。

――まぁ、あとは君たち人類の問題だ。僕らのエネルギー回収ノルマは概ね達成できたしね」

その言葉で――

私は、目の前で長い尾を振る白い魔物の正体をはっきりと悟っていた。

「――孵卵器（インキュベーター）」

私のその言葉に――キュゥべえは、目を細める。

「あんたたちは、間違いなく人類の敵よ」

「キミたちはいつもそんなことを言うけど――僕たちが永らく干渉してきたからこそ、この星の文明はここまで繁栄できたんだよ？」

無邪気と言ってもいいくらい、きらきらと輝くその赤い瞳を前に――

今、私は、絶対的な無力感を感じていた。

そんな私の表情を見て――キュゥべえは言った。

「……ああ、こういう言い方はなおさら感情に障るんだったっけね。まったく、人類とのコミュニケーションは本当に難しいなぁ」

その言葉を無視して――

私は、痛む身体を、無理矢理立ち上がらせる。

魔女と化した巨大な影を、一度、振り返り……そのまま歩き出した。

「戦わないのかい？」
そう背中にかかるキュゥべえの声に――
「いいえ」
私は、左腕の小盾を操作して――答えた。
「私の戦場は、ここじゃない」

○

――繰り返す。
――私は、何度でも繰り返す。

巻き戻したその時間軸上で――私は、逃げるキュゥべえを追いつめていた。
それは、見滝原のショッピングモールで。
まだ、改装途中の工事現場で。
時間停止を小刻みに繰り返し、ついにキュゥべえの先に回った私は――
取り出したベレッタM92Fを撃ち放つ。
複列弾倉に納められた十五発の9㎜パラベラム弾を撃ち尽くし、またたく間に白い身体

を散り散りに消し去った。キュゥべえは、悲鳴すらあげる暇はなかった。
その場に弾倉を捨て——私が歩き去ろうとした、その時。
私の背後を何かが駆けて行く気配を感じた。
それは、白く尾をひき、大きな耳に金色のピアスをつけていた。
「……ちっ」
私は、瞬間的に時間を停止させ——
その行き先に廻り込もうとしたけど、今度のキュゥべえは速かった。
私がベレッタを撃ち放つのと同時に、すぐさま壁をすり抜けて、その先の空間へと移動していた。
見れば、床とキュゥべえがすり抜けた壁には結構な量の血があった。
「——逃がさない」
今度こそ、仕留める。
今度こそ、この迷宮の出口を見つける為に。
——同じ時間を何度も巡り、たったひとつの出口を探る。
——あなたを、まどかを、絶望の運命から救い出す道を……

時間停止を繰り返し、キュゥべえの気配を追う。
そして、この時私は、意識のすべてをあの白い魔物に集中させ過ぎていて。
懐かしい、あの気配がすぐ近くにあることに、気がつくのが遅れてしまった。
「……あなた、なの？　わたしを呼んでいたのは？」
キュゥべえの逃げ込んだ、そのがらんとした部屋で――
私の耳に届いたその声は。
かつん、と響いた私の靴音に――声の主は、びくっとしてこちらを見た。
「……ほ、ほむらちゃん？」
胸に血まみれのキュゥべえを抱え、そう怯えた声を出すのは――この世界で今朝知り合ったばかりの、鹿目まどかだった。
「そいつから離れて」
私が、努めて感情を込めないようにそう返すと、
「だ、だって、この子、怪我してる……」
まどかは泣きそうな顔で、そう訴えてきた。
夢に見るほど焦がれたその愛おしい姿は、変わらない。
無邪気で、清らかで、嘘をつかず、他者に限りなく優しい。
たった一人の、私の友達がそこにいた。

「だ、駄目だよ！　酷いことしないで！」

まどかは、そう叫んだ。

敵意と呼ぶにはあまりにもかわいらしい、その感情に――私の心はくすぐられた。

このまま抱きしめてしまえたら、どんなに幸せだろう。

すべてを話せたら、どんなに楽だろう。

けれど、それはできない。

それは、絶望へと繋がる道だから。

あなたを、破滅へと導いてしまう道だから。

だから――

たとえ誤解されても、奇麗じゃない方法でも、私は行動する。

あなたの為に、行動する。

あなたのためなら、私は永遠の迷路に閉じ込められても構わない。

それが正しいことなのか、わからない。

けれど、私は――あなたを救うことを諦められないから。

あなたは――私のたったひとりの友達だから。

無数の感情が私の心に吹き荒れ――去った後。

私は、言った。

「あなたには関係ない」

第十一章　あなたも、わたし

長い、長い——夢を見ていた、ような。
それは、今のわたしとまるで関係のない世界の、誰かの夢を見ていたような心地で——
わたしは、まだ白い世界をふわふわと漂っているのでした。
(——時間遡行者、暁美ほむら)
ふと、どこかで聞き覚えのある声が響きます。
(つまり、キミは——過去の可能性を切り替えることで数多の平行世界を横断し、望む結末を求めてこの一ヶ月間を繰り返してきたんだね)
ぼんやりと回るその白い世界で——
誰かと誰かが、話していました。
(キミの存在が、ひとつの疑問に答えを出してくれた。何故、鹿目まどかが魔法少女としてあれほど破格の素質を備えていたのか……今なら納得いく仮説が立てられる)
——鹿目、まどか。
それが、わたしの名前だということはわかります。
けど、今のわたしには……その他のことがよく頭に入ってこなくって——

でも、すごく大事な、とにかく大切なことを話していることだけがわかりました。
（魔法少女としての潜在力はね、背負い込んだ因果の量で決まってくる。一国の女王や救世主ならともかく、ごく平凡な人生だけを与えられてきたまどかに、どうしてあれほど莫大な因果の糸が集中してしまったのか不可解だった。だが……ねぇほむら、ひょっとしてまどかは、キミが同じ時間を繰り返すごとに、強力な魔法少女になっていったんじゃないのかい？）
（……）
……やっぱりね。原因はキミにあったんだ。正しくはキミの魔法の副作用、というべきかな）
（――どういうことよ？）
（キミが時間を巻き戻してきた理由はただひとつ、鹿目まどかの安否だ。同じ理由と目的で何度も時間を遡るうちに、キミは幾つもの平行世界を螺旋状に束ねてしまったんだろう。鹿目まどかの存在を中心軸にして、ね）
――わたしを中心に、何かが起きて。
――誰が、何を、束ねたの……？
（その結果、決して絡まるはずのなかった平行世界の因果線が、すべて今の時間軸のまどかに連結されてしまったとしたら……彼女の、あの途方もない魔力係数にも納得がいく。キミが繰り返してきた時間、その中で循環した因果のすべてが、巡り巡って鹿目まどかに

繋がっていしまったんだ。あらゆる出来事の元凶として、ね）

その言葉で――

誰かが言葉を失い、泣いているように思えました。

その子の哀しみの大きさだけが、わたしの心になだれ込んできて――

わたしの心も、哀しみでいっぱいになっていきます。

（お手柄だよ、ほむら）

そして――

呑気な声は、残酷にとどめを刺します。

「キミが、まどかを最強の魔女に育ててくれたんだ」

――魔女。

その不吉な言葉で――

ふわふわと漂っていたわたしの意識は、鎖で縛られるように世界に繋ぎ止められ――

わたしは……死ぬことができなかったんだ、と悲しくなりました。

意識を失っていた間――すごく、怖い夢を見ていたような気がします。
夢と現実がぐちゃぐちゃになった、長い長い迷路を彷徨って、迷い続けて――
ようやく見つけた出口をくぐり抜けた先もまた真っ暗で。
そんなことを、ずっとずっと――もう気が遠くなるほど繰り返して。
このままでは、心が壊れてしまうんじゃないかって……そこで気がつきました。
わたしは、もうとうに覚めていたのです。
わたしはただ――そこがまだ悪い夢の中だって、そう思っていたいだけなのでした。

○

《……12日より行方がわからなくなっていた市立見滝原中学校二年生の美樹さやかさんが、本日未明、市内のホテルで遺体となって発見されました。遺体に目立った外傷はなく、発見現場にも争った痕跡がないことから、警察では事件と事故の両面で捜査を進めています。
――続いて、天気予報です。今夜は北西の風がやや強く、雨、所により雷雨を伴う場所が――》

テレビの中で、さやかちゃんの名前が告げられたことが、とても不思議でした。
まるで、どこか遠い国の同姓同名の人のように感じていました。

だけど、もう――

この世界に、美樹さやかちゃんはいなくなっていました。

さやかちゃんのお葬式は、さやかちゃんの住むマンションで行われました。

わたしも、和子先生も、クラスのみんなも出席したんだけど――

わたしには、そこまでどうやって行って、そこで何をしたのかも記憶がありません。

ただ、位牌の横の写真の中で、さやかちゃんが笑っているのが不思議で、理解できなくって――

あんなに泣き虫だったわたしの瞳からは、ひと雫も涙がこぼれることはありませんでした。

「――お帰り」

玄関に入ると、ママがそう声をかけてくれました。

「……ただいま」

そう反射的に返したわたしに、ママは無言で、塩をひとつまみかけてくれます。

それで、お葬式から帰ってきたんだ、とわたしは今更ながら理解しました。

ぼうっと靴を脱いでいると、

「なあ、まどか」

ママが、どこか訊きづらそうに声をかけてきます。
「……さやかちゃんの件、本当に何も知らないんだな？」
「――うん」
嘘をついているという意識すら、わたしの中にはありませんでした。
ただ、ぼうっとしていて――ここがまだ現実であるのかわからなくって。
わたしは、そう小さく頷いていました。
部屋に戻ってからも、制服から着替えるでもなく、ずっとベッドに横になっていました。
泥に沈み込んでいくようなその感触が、力の入らない身体に心地よく――いつまでもそうしていたい、と思っていました。
さやかちゃんが死んだこと。
魔女になってしまったということ。
そして、そのさやかちゃんとともに、杏子ちゃんまで死んでしまったこと。
さやかちゃんはこうしてお葬式をあげてもらったけど……杏子ちゃんはどうなるのかな……
身寄りがないって言ってたから――わたしがしてあげないといけないな……
そんなことを考えていたら、ようやく涙が滲んできました。
あれは、夢だったのか――

あの白い世界で……杏子ちゃんはとても優しい顔をしていて。
『さやか……あんただけ置き去りにしやしないって……』
そう言っていたような気がします。
『独りぼっちは、寂しいもんな……いいよ。一緒にいてやるよ』
もし、この言葉が現実だとしたら——
杏子ちゃんはさやかちゃんに寄り添ってくれたということで。
逃げることだってできたのかもしれないのに、あそこに留まってくれたということで。
小学生の頃から友達だったわたしが気を失って、ここにこうしているというのに……
あんなにケンカばかりしていた杏子ちゃんが、最期までさやかちゃんのそばにいて。
そして……ふたりはもう二度と戻ってくることはないのでした。
「さやかちゃんも、杏子ちゃんも……死んじゃった……」
そう口に出した瞬間——
激しい感情が押し寄せてきて、涙が溢れ出してきました。
「——まあ、意外な展開ではないよ」
その声で——わたしは、ゆっくりと顔を上げます。
「予兆は、ずいぶん前からあった」
いつの間にか、部屋のぬいぐるみの棚には、キュゥべえがちょこんと座っていました。

いつものように、長くふわりとしたしっぽを揺らしてこちらを見つめていました。
「どうでもいいっていうの？　みんな、あなたのせいで死んだようなものなのに」
睨むようにそう言うと――
キュゥべえは大袈裟な仕草で、溜息をついて言いました。
「たとえばキミは、家畜に対して引け目を感じたりするのかい？」
「……え？」
「彼らが、どういうプロセスでキミたちの食卓に並ぶのか――」
その言葉とともに、わたしの頭の中に、何かのイメージがなだれ込んできます。
それは――古い、大きなプレハブ工場の中でした。
風通しが悪く、激しくむせ返るような匂いとともに、無数の牛や、豚や、鶏たちが狭いケージに押し込まれていました。そのどれもが、自分の運命を悟りきったような空っぽの瞳をこちらに向けていて――ただ、機械で、流れ運ばれてくるエサだけを食べていました。
「や……やめてよ！」
わたしが思わず叫ぶと、キュゥべえは、静かに言葉を続けます。
「その反応は理不尽だ。この光景を残酷と思うなら、キミには本質がまったく見えていない。彼らは人間の糧になることを前提に、生存競争から保護され、淘汰されることなく繁殖している。牛も豚も鶏も、他の野生動物と比べれば、種としての繁殖ぶりは圧倒的だ。

キミたちはみな理想的な共栄関係にあるじゃあないか」
「……同じだって言いたいの？」
「むしろ僕らは、人類が家畜を扱うよりも、ずっとキミたちに対して譲歩しているよ。まがりなりにも知的生命体と認めた上で交渉しているんだしね」
「……」
「信じられないのかい？　それなら見せてあげようか。僕ら、インキュベーターと人類が――共に歩んできた歴史を」
キュゥべえがそう言った瞬間――
頭の中に宇宙が広がるような、たくさんのイメージがなだれ込んできました。
それは――
石器時代から、古代、中世のたくさんの人の営み。そして、そこで繰り広げられるたくさんの哀しみの間で戦う、魔法少女たちの歴史でした。
《僕たちはね、有史以前からキミたちの文明に干渉してきた》
その、時空を突き抜けるような世界には――キュゥべえの声だけが響いていました。
《数え切れないほど大勢の少女がインキュベーターと契約し、希望を叶え、そして絶望に身を委ねていった》
文字もなく、ようやく火を扱うようになった時代……文字を編み出し、身分が分かれて

いった時代。そして、土地を巡ってたくさんの民族の間で戦いが始まっていった時代——そのどこにも、魔法少女として契約した少女たちがいました。それは映画やテレビで見たような光景で……太陽に仕える巫女姿の少女がいました。金の王冠をかぶる、身分の高そうな異国の少女がいました。甲冑に身を包み、旗を掲げ、剣を振り、敵陣に突入していく少女がいました。その誰もが、肩にキュゥべえを乗せていて——手にはソウルジェムが光り輝いていました。

《祈りから始まり、呪いで終わる——これまで数多の魔法少女たちが繰り返してきたサイクルだ。中には歴史に転機をもたらし、社会を新しいステージへと導いた子もいた》

切ない願いを胸に宿し——契約した少女たちは、人々に苦しみをもたらす何かと懸命に戦い始めます。苦労の果ての勝利。喝采。人々の笑顔。けれど、いつもそれはつかの間の光景で——その後には、少女たちは魔女として恐れられ始めていました。人の力を超えるものとして——殺されていきました。火あぶりになり、首を落とされ、生きたまま皮を剝がれている少女もいました。

とても見ていられなくって——わたしは、どこかにいるキュゥべえに尋ねます。

「みんな……みんなあなたたちを信じてたの？　信じてたのに裏切られたの？」

《彼女たちを裏切ったのは、僕たちではなく——むしろ、自分自身の祈りだよ》

その言葉で——

たくさんの魔法少女たちの手のひらで輝く、黒い光に気がつきます。
苦しげな表情とともに、彼女たちのソウルジェムは真っ黒に澱んでいました。
溢れる黒い霧に覆われて……希望の象徴であった彼女たち自身が、魔女となっていました。
《どんな希望も、それが条理にそぐわないものである限り、必ず何らかの歪みを生み出すことになる。やがてそこから災厄が生じるのは当然の摂理だ。そんな当たり前の結末を裏切りだというなら、そもそも願い事なんてすること自体が間違いなのさ》
「……そんな、ひどいよ……」
《まあ——愚かとは言わないよ》
その言葉とともに——
世界は闇に覆われ、すべての景色は消え失せていきます。
「彼女たちの犠牲によって、人の歴史が紡がれてきたこともまた事実だしね」
間近で聞こえたその声で——わたしは、自分が部屋の中にいるままだということに気がつきました。
それでも、今すぐそこでたくさんの魔法少女の苦悩を見せつけられたわたしの息は上がっていました。
「そうやって過去に流されたすべての涙を礎にして、今のキミたちの暮らしは成り立って

いるんだよ？　それを正しく認識するなら、どうして今さら、たかだか数人の運命だけを特別視できるんだい？」

肩を上下させ、懸命に息を整えながら、わたしはキュゥべえを見つめます。

「あなたは、最初から――」

今、ここでようやく、わたしはすべてに気がついたのでした。

「最初から、魔女になったすべての子たちを知っていたんだね」

マミさんに倒された――〝薔薇園〟の魔女。

そしてそのマミさんを食べてしまった――〝お菓子〟の魔女。

さやかちゃんが倒した――〝ハコ〟の魔女。

その他、無数の魔法少女たちに倒されてきた、無数の魔女たち。

その魔女たちのことをキュゥべえが詳しく説明できたのは――すべて、その魔女の元になった魔法少女たちのことを知っていたからで……恐ろしい魔女も、最初は大切な祈りを掲げて契約した魔法少女だって知っていたからで――

それに気がついた瞬間、わたしは泣き叫んでいました。

「ずっと……あの子たちを見守りながら、あなたは何も感じなかったの？　みんながどんなに辛かったか、わかってあげようとしなかったの？」

「それが僕たちに理解できたなら――」

キュゥべえは、どこか困ったように肩をすくめてみせます。
「わざわざこんな星にまで来なくても済んだんだけどね」
それから、どこか遠い場所を見つめるように――そして独り言のように、言い足しました。
「僕たちの文明では、感情という現象は極めて希な精神疾患でしかなかった。だからキミたち人類を発見したときは驚いたよ。すべての個体が別個に感情を持ちながら共存している世界なんて、想像だにしなかったからね」
その言葉で――
やっと、心から理解できました。
キュゥべえには――ううん、このどこか他の星からやってきた、インキュベーターという生物には――本当に、嬉しいとか、悲しいとか、愛おしいっていうわたしたちが当たり前に持っている、心がないのです。
その事実に、ぼうっとしながら――それでも、わたしは止まりませんでした。
「もしも……あなたたちが」
それは、愚かな「もしも」でした。
ホントにバカで、愚かで、訊くまでもないことだって自分でもわかっていました。
それでも、マミさんや、さやかちゃんや、杏子ちゃんたちが浮かばれなくって――たく

さんの、絶望に呑まれていった魔法少女たちが可哀想で、訊いてしまいました。
「あなたたちが、もしもこの星に来てなかったら……？」
「それは、決まってるさ」
キュゥべえは、やっぱりなんでもないように答えます。
「キミたちは今でも——裸で洞穴に住んでたんじゃないかな」

○

歴史の時間に、歴史の教科書で習った——この星の歴史。人類の、歴史。
たくさんの間違いと、間違いと、間違いの果てに、すこしずつすこしずつ、住みやすい世界に変えてきた、わたしたちの歴史。たくさんの残酷なことがあって、その哀しみを次の世代に味わわせないように、すこしでもみんなが暮らしやすい世の中になるように、積み重ねてきた歴史。
その大本に、インキュベーターという存在があったなんて知らされても——わたしには、すぐに呑み込むことはできませんでした。頭で理解することができても、心が受け付けようとはしませんでした。
そうであるのに——

家の前の坂から見下ろす見滝原の景色は、まるで色を無くしているような気がしました。
あんなに大好きだった町並みが、今では作り物のように見えるのが、悲しくて――
わたしは、ひとり歩き出していました。
夜の街で――わたしは途方も無く、ひとりでした。
キュゥべえに教えられた真実は、ひとり自分の胸にしまっておくには大きすぎて、心の中で嵐が吹き荒れます。ほんの数週間前――友達ってなんだろう、と悩んでいた自分が、すごく懐かしく、そしてバカみたいだなって感じます。そんなふわふわとしたことで悩んでいた自分が、とても遠いところに行ってしまったような気がしていました。
いつしか、マミさんに憧れて、自分だけの魔法少女のイラストを描いていた頃を思い出します。マミさんはいつだって、優しくて、かっこ良くて、颯爽としていて。わたしの成りたいわたしが、そこに現れたような心地がしていました。それでも、マミさんもひとりでずっと魔法少女の運命に苦しんで、搦めとられていて――わたしが一緒に魔法少女になるって言った時、とても嬉しそうに笑ったのを思い出します。
また涙が出そうになって――わたしは足早にそこから遠ざかります。
さやかちゃんのマンションの前を通りかかった時も、胸が締め付けられるように痛みました。

そこは、小学生の頃、毎日のように遊びにいった家で——目を瞑っても、どこに何があって、どういう匂いがするのか思い出せます。さやかちゃんの部屋のベッドにふたりして寝たことや、明け方まで飽きることなくおしゃべりしたこと。わたしがなかなか言いたいことを言えずにいるのを、いつもさやかちゃんは黙って聞いてくれて……それはきっと苛々することもあっただろうに、にこにこと聞いてくれて——そのことを思い出したら、また涙が溢れ出てきました。今度は、我慢することができずに、わたしは涙を流しながら、ゆっくりとさやかちゃんの家から遠ざかります。

上条くんの病院の近くを通りかかり——そこでは、杏子ちゃんと初めて出逢った時のことを思い出しました。

あの時は、とてもいじわるな子だと思って怖かったけど……本当の杏子ちゃんはとても優しくて、強い子でした。自分の歩んできた道をさやかちゃんに歩んで欲しくなくて、不器用な言葉と行動で誤解ばかりされるような子でした。そんな杏子ちゃんは——さやかちゃんの強さに憧れて、希望を感じて。

さやかちゃんを抱きしめて、消えてしまいました。

見慣れた、夜の見滝原の街が涙で滲んでいきます。

無数の街の灯りが、ぼんやりとした白い輪となって重なっていきました。

——こんなに、灯りがあるのに。

——こんなに、人がいっぱいいるのに。

「わたしの周りからは——みんないなくなったんだね」

それが、寂しくて、悲しくて、涙が後から後から、こぼれ落ちます。

「こんな悲しい思いをするなら——早く、魔法少女になっておけばよかった」

マミさんや、さやかちゃんと一緒に——戦っていればよかった。ひとりぼっちになるより、その方がずっとわたしは幸せだった。

その時——

『勝手に自分を粗末にしないで！』

そうわたしを睨みつける、ほむらちゃんの顔が思い浮かびました。

『あなたを大切に思う人のことも考えて！』

あの時、夜の公園で、ほむらちゃんはそう泣き叫んでいました。

——そうだ……どうして……？

どうして、ほむらちゃんは、わたしなんかにあそこまで言ってくれたんだろう？

『あなたを失えば、それを悲しむ人がいるって、どうしてそれに気付かないの？　あなたを守ろうとしてた人はどうなるの!?』

——わたしを、守ろうとした人……

その言葉を思い出したわたしは——今になって、はっとしました。

それって……ひょっとして。
わたしを大切に思う人って――
守ろうとしてた人って――
そのことに気がついて……わたしは、まだ本当のひとりじゃないことにやっと気がついて。
そこから、駆け出していました。
何かとても大事なことを自分が見落としている気がして――
急き立てられるように、夜の街を駆け出していました。

○

古いマンションは、くすんだ薄茶色をしていました。
いつか、和子先生からもらったメモを頼りにその住所までやって来て、エントランスのポストで〝暁美〟という名字を発見したわたしだったけど――
すぐにエレベーターまで行く勇気がなくって、そこに立ち止まったままでした。
――もう時間が、遅すぎるかな……？
――ほむらちゃんのパパとかママとか、厳しい人なのかな……？

そんなことをぐるぐると考えてしまうのです。
けれど、このまま帰ったところで——わたしの心にはもう居場所がないような気がしていました。
パパやママやタツヤや——この世界で生きているすべての人と立っている場所が違うような気がしていました。そして、今このわたしと同じ場所に立っているのは——唯一、暁美ほむらちゃんだけで……
そう考え直すと、わたしはおずおずとエレベーターに乗り込みます。
そして、四階にある暁美ほむらちゃんの家へと向かいました。
エレベーターから出て、廊下を渡り、その部屋の前に立つと——
401と印字された部屋の下には、几帳面な文字で〝暁美〟と書かれていました。
しばらく躊躇った後——わたしは、表札の横のチャイムを鳴らします。
部屋の中に、音が響く気配がして……やがて扉が開きました。
扉の向こうに、ほむらちゃんの白い顔を見つけて——わたしは、震える声で尋ねていました。
「……入って、いいかな？」
「……」
しばらく無言でわたしの顔を見つめていたほむらちゃんは——やがて扉を大きく開いて

くれます。

ほむらちゃんの家族に出会ったら、夜遅くすみません、って言おうと思っていたけど——部屋の中に一歩足を踏み入れた瞬間、その言葉は一瞬で消え去りました。

そこは——普通の部屋ではなく。

まるで生活感のない、映画に出てくる宇宙ステーションのようなひと続きの部屋で。

どういう原理なのか、宙に幾つものパネルが浮かび、そこにはたくさんの数値と、街の地図が映し出されていました。

タンスも、机も、キッチンすらなく——

ほむらちゃんは、どうやらひとりでここで暮らしているようでした。

呆然としていたわたしは——やがて、宙に浮かぶひと際大きなパネルに映し出される、異様に大きく、とても不気味な形をした魔女の姿に気がつきました。

「これが……〝ワルプルギスの夜〟？」

けれど、ほむらちゃんは、唇を引き結んだまま黙っています。

わたしには知らせたくないのか——それとも、魔法少女ですらないわたしが知ったところでどうしようもないと思っているのか——無言で、わたしに背を向けていました。

それでも、わたしは、すこし近寄って地図につけられた×印の場所を見つめます。

「——杏子ちゃんが、言ってた。一人で倒せないほど強い魔女をやっつけるために、ほむ

らちゃんと二人で戦うんだって。ずっとここで、準備してたのね」

それは、本当に街の中心でした。ちょうど駅のすぐ横に当たり、わたしたちがよく行っていたショッピングモールと重なっています。そこから、円を描くように赤く塗りつぶされていって——その範囲は、わたしの家も、学校も、すべてを軽く呑み込んでいました。

「……街中が、危ないの？」

そう尋ねると、ほむらちゃんは観念したように教えてくれました。

「今までの魔女と違って……こいつは結界に隠れて身を守る必要なんてない。ただ一度具現しただけでも何千人という人が犠牲になるわ。相変わらず普通の人には見えないから、被害は地震とか、竜巻とか、そういった大災害として誤解されるだけ」

こくん、とひとつ唾を呑んで——

「なら、絶対にやっつけなきゃ駄目だよね」

わたしは言いました。

「杏子ちゃんも死んじゃって、戦える魔法少女はもう、ほむらちゃんだけしか残ってないんだったら……」

——わたしも、戦う。

そう言いかけると——

「一人で充分よ」

ほむらちゃんは、厳しい口調で遮りました。
「佐倉杏子には無理でも、私なら一人で〝ワルプルギスの夜〟を撃退できる。杏子の援護も、本当は必要なかったの。ただ彼女の顔を立ててあげただけ」
「……本当に？」
そう尋ねると、またほむらちゃんは黙り込みます。
わたしと目を合わせようともせず、ただ白い壁を睨むように俯いていました。
その姿はとても小さくて、頼りなくって。
これまでの強くて、氷のようなほむらちゃんじゃないような気がしていました。
「何でだろう……？」
震え声とともに——ずっと我慢していた涙がこぼれます。
ここまで考え続けていたことが、堰を切ったように溢れ出していました。
「わたし、ほむらちゃんのこと信じたいのに……ウソツキだなんて、思いたくないのに……全然、大丈夫だって気持ちになれない。ほむらちゃんの言ってることが本当だって思えない……」
ほむらちゃんはまるで……この間の泣いていた時のように儚げで——ひとりで何か辛いことをじっと耐えているようにしか思えなくって。その苦しみを分けてもらえることすらできない自分が悲しくて、消えてしまいたくなるのでした。

そんなわたしに――

「本当の気持ちなんて、伝えられるわけないのよ」

ほむらちゃんは、壁を見つめたまま、静かに呟きます。

「だって――私は」

そう顔を上げたほむらちゃんの瞳には、溢れるほどの涙が溜まっていて――

次の瞬間、わたしはほむらちゃんに強く抱きしめられていました。

「ほ……ほむらちゃん……？」

「だって、私は――」

「まどかとは、違う時間を生きてるんだもの」

それは――とても、不思議な言葉でした。

ほむらちゃんが何を言っているのか、わたしにはまるで理解できなかったんだけど――

それでも、どうしてか、初めてほむらちゃんが本当のことを話してくれたような気がしていました。

「……私ね、未来から来たんだよ。何度も何度も、まどかと出逢って、それと同じ回数だけ、あなたが死ぬところを見てきたの……どうすればあなたが助かるのか……どうすれば

運命を変えられるのか……その答えだけを探して、何度も始めからやり直して……」

ほむらちゃんの声は、震えていて、とても小さくて。

弱々しくって、まるで親を亡くした子供のように頼りなくって。

けれど、その言葉は、どこかでとても大事な扉を開けた気がしていて——永く閉ざされていた、何か大事な宝物が仕舞われた部屋の扉が、今、開け放たれたような気がしていました。

「ごめんね……わけわかんないよね……気持ち悪いよね……まどかにとっての私は、出逢ってからまだ一ヶ月も経ってない転校生でしかないものね……。だけど私は……私にとっての、あなたは……」

どこかの、懐かしい景色が——頭の中で蘇ります。

次から次に、何か大事なことが頭の中を通り過ぎていって——

思い描こうとするだけで、せつなく胸を掻きむしるどこかの光景が浮かんでは、消えていって——

でも、それは白く霞んでいて。

曖昧で、頼りない形にしかならなくって。

「……繰り返せば繰り返すほど、あなたと私が過ごした時間はずれていく。気持ちもずれ、言葉も通じなくなっていく——たぶん私は」

ほむらちゃんは——わたしの肩に額を押し付けるように、言いました。
「もうとっくに迷子になっちゃってたんだと思う」
泣いて、泣いて、泣いて——
ほむらちゃんがとても小さく見えるほど、弱々しく泣いた後——
「……あなたを、救う」
やがて、ほむらちゃんはくしゃくしゃになった顔でそう呟きます。
わたしの顔を真正面から見据えるその表情は、悲しく歪んでいました。
「……それが私の最初の気持ち……今となっては、たったひとつだけ最後に残った、道しるべ」
ほむらちゃんは——自分に言い聞かせるようにそう告げると、
「わからなくていい。何も伝わらなくてもいい。それでもどうか——お願いだから」
わたしをもう一度強く抱きしめて、言いました。
「あなたを、私に守らせて」
私は——この時、この言葉で。
初めて、自分が立っている場所を疑いました。

わたしは、正しい場所に立っているのかな――？
わたしは、友達と呼べる誰かにちゃんと接することができているのかな――？
わたしは、ずっと――
何か大事なことを……とても大事なことを、見過ごしてきたんじゃないのかな――？

○

翌日の明け方から――
風が強くなっていました。
《本日午前7時、突発的異常気象に伴う避難指示が発令されました。付近にお住まいの皆様は、速やかに最寄りの避難場所への移動をお願いします。こちらは、見滝原市役所広報車です。本日午前7時――》
町中に鳴り響いたサイレンとともに――
避難を告げて回る市の車が、わたしの家の周りにも何度もやってきました。
「きょーは、おとまり？　きゃーんぷ、なの？」
タツヤが、楽しそうに飛び跳ねるここは――

わたしの通う、市立見滝原中学校の体育館でした。
「ああ、そうだよ。今夜はみんなで一緒にキャンプだ」
パパがにっこりと微笑んで——わたしたち一家は、みんなでこの体育館に避難していました。
百名を超える近所の人たちとともに、わたしたちは床に引いたシートの上で心細く座っていました。
「季節外れの台風ってやつかねぇ……」
「ここのところ、異常気象が多いから……」
そんな声が、周りから聞こえてきます。
けれど——わたしだけは。
それが、台風なんかじゃないことを知っていました。
「……ほむらちゃん」
胸の前で手を組んで——ただ、彼女が無事であることを必死に祈っていました。
この頑丈な体育館ですら、ぎしぎしと掴み潰そうとするこの強風が——
〝ワルプルギスの夜〟と呼ばれる、最悪の魔女であることが不安で仕方ありませんでした。
やがて、風の音に混じって、遠くで何かが壊れるような音が聞こえてきます。

避難している人たちも、顔を上げ、みな不安そうな顔をしていました。パパはわずかに眉を顰め、ママはいつものようになんでもない顔をしてのけて、タツヤの頭をぽん、と撫でてました。

「大丈夫だよ。台風は、温かい空気と冷たい空気がぶつかってできた風の神様なんだよ。いい子にしてれば、すぐに通り過ぎるさ」

そう言って、タツヤの頭を抱き寄せていました。

これが、本当に台風だったら——どんなによかったろう。

わたしがここでじっとしているこの間にも、ほむらちゃんはこの凄い力と戦ってて……

その時、ひと際大きな音とともに、地響きが伝わってきて……

遥か天井に吊るされた照明が不意に、暗くなります。

「うわ……地震!?」「停電だ!」

小さな悲鳴が体育館のあちこちで起こったけど、やがて補助電源に切り替えられた体育館の照明は、再び点灯します。

「……どこかで、何かが爆発したな」

ママが小さく呟いて——わたしはいよいよ不安になりました。

そして、ほむらちゃんの必死に戦う姿が頭の中にありありと思い浮かびました。

顔や衣装のあちこちに血の滲んだ傷をつけ、何度も巨大な魔女の力に打ちのめされ——

それでも、ほむらちゃんは唇を噛み締めて向かっていって——
そして、それは奇麗にあの日見た夢に重なっていきます。
ほむらちゃんが転校してきたその日の朝に見た、あの夢。
それは、世界の終わりのような場所で、見ただけで足が震えてくるような大きな怪物と戦っているほむらちゃんの姿で。
わたしは、何もできず、ただ崖の上からその光景を涙ぐんで見つめている夢でした。
あの時、わたしの背後にはキュゥべえもいて。
それに対して、ほむらちゃんが何かを叫んでいたのを思い出します。
必死に、わたしに向かって何か叫び続けていたことを思い出します。
あの夢での、ほむらちゃんの真剣な顔を思い出したら——
このままここに座っていることができなくなって、わたしは立ち上がっていました。
「……ん？　どうした、まどか？」
そんなわたしに、ママが尋ねてきます。
「ちょ、ちょっと。トイレ」
そう慌ててごまかすと、わたしはそこから駆け出していました。
体育館の渡り廊下まで駆けて、そこの大きな窓から真っ暗になった見滝原の街を眺めます。

町中が停電していて、どこまでも暗い世界がそこにはありました。
その遥か地平で——何かが時折、光ります。
それは、雷のようにも思えたけど……わたしには、なぜかそこでほむらちゃんが戦っている気がしました。
ふと気がつくと、足下にはキュゥべえがいて——わたしは、尋ねました。
「ほむらちゃんが、独りでも勝てるっていうのは、本当？」
しばらく黙っていたキュゥべえは、やがて、ぽつりと答えます。
「それを否定したとして、キミは僕の言葉を信じるかい？」
「……」
また夜の街に何かが光り、少し遅れて鈍い音と地響きが伝わってきました。
「今さら言葉にして説くまでもない。その目で見届けてあげるといい。〝ワルプルギスの夜〟を前にして、暁美ほむらがどこまでやれるか——。彼女は、これまでで最高の火力を用意している。数えきれないほどのロケットランチャーに、数百を超える地雷。それに、ガソリンを満タンに搭載したタンクローリー。それらすべてをあの最悪の魔女にぶつけようとしているけど……無駄だろうね」
キュゥべえは、まるで他人事のようにそう言います。
「どうして……そうまでして戦うの？」

わたしが訊き返すと、キュゥべえは肩をすくめました。
「彼女が、まだ希望を求めているからさ。いざとなればこの時間軸もまた無為にして、ほむらは戦い続けるだろう。何度でも性懲りもなく、この無意味な連鎖を繰り返すんだろうね」
その言葉で――
『……私ね、未来から来たんだよ』
ほむらちゃんの言葉が、蘇ります。
『何度も何度も、まどかと出逢って』
『それと同じ回数だけ、あなたが死ぬところを見てきたの』
『どうすればあなたが助かるのか』『どうすれば運命を変えられるのか』
『その答えだけを探して、何度も始めからやり直して――』
溢れ出る涙とともに語ってくれた、あの言葉の数々を思い出して――
わたしの鼓動は、早くなっていきます。
もし、あの言葉がすべて本当のことだとしたら――？
ほむらちゃんが、何度も時間を巻き戻してわたしを助けようとしてくれているのだとし

たら――？

「もはや今の彼女にとって、立ち止まることと諦めることは同義だ」

そんなわたしに構わず、キュゥべえは淡々と話し続けます。

「何もかもが無駄だったと、決してまどかの運命を変えられないと確信したその瞬間に、暁美ほむらは絶望に負けて、グリーフシードへと変わるだろう。彼女自身にもわかってるんだ。だから選択肢なんてない。勝ち目のあるなしに拘らず、ほむらは戦うしかないんだよ」

「……希望を持つ限り、救われないっていうの？」

「そうさ。過去のすべての魔法少女たちと同じだよ。まどか、キミだって一緒に見ただろう？」

キュゥべえに見せられた、人類の歴史――ううん、数多の魔法少女たちの歴史。

みんな、最初はささやかな希望から始まったのに、最期は絶望に呑み込まれていく歴史でした。

そして、今……無数の魔法少女たちの無念と哀しみが、まるでほむらちゃんひとりの肩に背負わされたように思えた瞬間――

その答えは、突然、わたしの中に落ちていました。

『騙されないで、まどか』

あの日、あの夢の中で、傷だらけになってまでわたしに叫んでくれたほむらちゃんの言葉が届きます。

それは――

わたしを救うことが諦められないから。

何度繰り返しても、諦められないから。

あの時、ほむらちゃんは――ほむらちゃんは、キュゥべえの言葉によって絶望への道に歩み出しそうになるわたしを、死に物狂いで止めてくれていたんだ……

『間違えてあげればいい』

いつか、ママが言ってくれた言葉の意味がわたしの中に届き――

わたしの頬に涙が伝っていました。

「……ほむらちゃん、ずっと、ずっと……わたしなんかの為に間違え続けてくれていたんだ……」

それは、どれほどの孤独だったろう。どれほど心細かったろう。誰にも本当のことを言えず、誰にも理解してもらえない、これ以上ないくらいひとりの世界。転んでも誰も起こしてくれない、それどころか転んだことにすら気がついてもらえないひとりきりの世界。苦しくっても相談もできず、無限に続く迷路みたいな世界――

――ずっと気がついてあげられなかった。

——友達がすぐそばでずっと……気が遠くなるほどずっと、戦ってくれていたのに。
そして、それに気がついた、今——
ずっと探し続けていた、わたし自身の願いがそこにありました。
魂のすべてを差し出すに相応しい、わたしが叶えるべき願いが目の前にありました。
それは——マミさんにしてあげられなくって、さやかちゃんにしてあげられなくって、杏子ちゃんがさやかちゃんの為にしてあげたこと。そして、ほむらちゃんがわたしの為にずっとしてくれていたこと。
それが、正しいことかわからない。
奇麗な解決方法じゃないのかもしれない。
けれど、諦めたくないから。
誤解されようと、救うことを諦めたくないから。
そして——わたしがただそれを、ほむらちゃんの為に、たくさんの魔法少女たちの為に、してあげたいから。わたしがわたしとして生まれ、わたしがわたしとして経験してきたすべての喜び、哀しみの意味がわかったから——
——ほむらちゃん、今行くね。
涌き出る不思議な力に突き動かされるように心の中でそう叫び、駆け出そうとした——
その時。

「とこに行こうってんだ、おい？」
わたしの腕は、突然、ぐっと掴まれていました。
「……ママ」
振り向くと、そこには見たことが無いほど怖い顔をしたママがいて——わたしの腕を掴む力はとても強くって。そこには、けしてわたしを放さない、という決意だけがありました。
「わたし……友達を、助けに行かないと」
そう言ったんだけど、ママは即座に首を振ります。
「消防署に任せろ。素人が動くな」
「わたしでなきゃ駄目なの——」
そう叫んだ瞬間——
わたしの頬は強く叩かれました。
じん、とほっぺが熱くなって、後から痛みが増していきます。
「テメェ独りのための命じゃねぇんだ！　あのな、そういう勝手をやらかして、周りがどれだけ心配すると——」
ママはそう怒鳴ったけど——
「わかってる。わたしにも、よくわかる」
わたしは、叫び返していました。

「わたしだって、ママのこと、パパのこと、大好きだから。どんなに大切にしてもらってるか知ってるから。自分を粗末にしちゃいけないの、わかる。だから違うの。みんな大事で、絶対に守らなきゃいけないから——そのためにも、わたし、今すぐ行かなきゃいけない所があるの」

「……理由は、説明できねぇってか？」

その言葉に、わたしが頷くと——

「なら、あたしも連れて行け」

ママはそう言いました。

その言葉が、とても嬉しくって、涙がこみ上げてきて——

ママが大好きだって、改めてわたしは思いました。今まで、どれほど守ってもらってきて、大事にされてきたのかを知りました。このままママが一緒に行ってくれたらどれだけ頼もしいだろう、とどこかで思ったけど——でもそれと同時に、わたしの中の誰かが、それはいけない、と訴えます。

だから、わたしは涙をこらえて、首を振りました。

「ママは、パパとタツヤの側にいて。二人を安心させてあげて」

それでも何か言おうとするママに、わたしは精一杯の言葉を告げます。

「ママはさ、わたしが良い子に育ったって、言ってくれたよね。嘘もつかない、悪い事も

しないって。今でもそう信じてくれる？　わたしを正しいと思ってくれる？」
するとママは――一度ぎゅっと唇を結ぶと、力強く、頷いてくれました。
それから、わたしの瞳を覗き込むように、顔を寄せてきます。
「……絶対に下手打ったりしないな？　誰かの嘘に踊らされてねぇな？」
「うん」
わたしが頷き返すと――
ママは、そのまま手を放し、ぽん、と背中を叩いてくれました。
その手が力強くって、嬉しくって、そしてまた涙が出そうになって。
わたしは、自分にできる最高の笑顔で――手を振ります。
「……ありがとう。ママ」
そして、嵐の夜へと――
わたしの大事な友達が待つ、あの暗黒の地へと――駆け出していったのでした。

○

夜の街には、誰もいませんでした。
明かりも無く、月も見えない夜は、ただ暗かったけど――

わたしの駆ける道だけは、ほのかな光でまっすぐと照らされていました。
それが、わたしの横を飛ぶキュゥべえの力なのか、魔女がわたしをおびき寄せているのかわからなかったけど……どうでもいい、とわたしは思いました。
だって——この先に、ほむらちゃんがいることだけは確実なのだから。
遥か先で不吉に輝く赤黒い世界に、〝ワルプルギスの夜〟がいることが確実なのだから。
進むごとに、瓦礫が増え、風は強まります。
崩壊したビルが倒れ、ちろちろと燃えているところもありました。
車がひっくり返り、電柱はなぎ倒され、切れた電線は光を弾いていました。
割れた窓ガラスは散らばっていて、傾いたビルの窓からはただカーテンの残骸が舞っていました。
駅があったはずの場所はすでに、何もなく——
広大な瓦礫となっていました。
わたしたちがよく学校の帰りに遊んでいたショッピングモールも、その姿を留めていませんでした。
そこが見滝原だと知っていても、そうは思えない、地獄のような光景が広がっていました。
そして、その中心には、黒く大きな影がそびえ——
それは、ゆっくりと回転しながら空にありました。

空全体を掻き回すように、うねうねと動き、時折、地を揺らすような嗤い声を響かせています。

「……ほむらちゃん」

わたしは、その巨大な怪物に構わず——

ただ、大事な友達の姿を探します。

耳を澄まし、目を見張り、どこかにいるはずのほむらちゃんの姿を探します。

やがて、風に乗って——すすり泣くような声が耳に届きます。

大きく傾いた駅ビルの残骸の方向——

裂けたコンクリートの割れ目から、それは聞こえてきました。

「……どうして……どうしてなの……」

吹き荒れる風の中——

わたしは、ゆっくりと一歩ずつその声に近づきます。

「……何度やっても……あいつには、勝てない……」

絶望にうちひしがれるその声に近づき——

そして、瓦礫にめり込むように倒れた、血まみれでぼろぼろになった友達を見つけました。

「ほむらちゃん」

「……」

何か言おうとして、立ち上がろうとするほむらちゃんにわたしは首を振りました。
「もういい……もういいんだよ、ほむらちゃん」
それから、ほむらちゃんはわたしの足下に佇むキュゥべえの姿を見て――
「まどか、まさか――」
そう声にならない声で呟きます。
ほむらちゃんが何を言いたいか、すぐにわかりました。
これまで、必死にわたしがキュゥべえと出逢わないようにしてくれて。
出逢ってしまっても、それ以上関わらないように仕向けてくれて。
誤解されても、恐れられても、どれだけ理解されなくても、たったひとりで、気の遠くなるほどの道を歩み続けてくれて。わたしは、そんなほむらちゃんの想いにも気がつかず、ただ泣いて、怯えていただけでした。
「ほむらちゃん、ごめんね」
そう謝った後――
「わたし、魔法少女になる」
そのままほむらちゃんに背を向けるように、空に佇む黒く巨大な影を睨みつけました。
「まどか、そんな……」
「わたし、やっとわかったの。叶えたい願い事を見つけたの。だからそのために――この

命を使うね」
「やめて！」
即座に、ほむらちゃんは叫びました。
「それじゃあ、私は……私は、何のために……」
「本当に、ごめんね」
わたしには、謝ることしかできなかったけど――
傷だらけのほむらちゃんを抱きしめることしかできなかったけど――
それでも、わたしの心は僅かにも揺らぐことなく、しんと静まり返っていました。
「これまでずっと、ずっとずっとほむらちゃんに守られて、望まれてきたから、いまのわたしが在るんだと思う。そんなわたしが、やっと見つけ出した答えなの」
ほむらちゃんの瞳から溢れ続ける涙に、わたしは微笑んでみせます。
「信じて。絶対に、今日までのほむらちゃんを無駄にしたりしないから」
そう囁くように言うと、キュッベえに向き直ります。
すると、すべての因果をつかさどる白の生物は、赤い瞳を輝かせて言いました。
「数多の世界の運命を束ね、因果の特異点となったキミなら、どんな途方もない望みであろうと叶えられるだろう」
「……本当だね？」

わたしが訊き返すと、キュゥべえは、こくりと頷きます。
「さぁ、鹿目まどか。その魂を対価にして、キミは何を希う？」
「わたし――」
一度、深呼吸をしてから――その願いを口にします。
「わたしは、すべての魔女を産まれる前に消し去りたい。すべての宇宙、過去と未来のすべての魔女を、この手で」
その瞬間――
わたしの中に、何かが生まれました。
それは小さな光だったけど――次第に大きく、激しく、うねり始め、やがて身体中を駆け巡るように疾走して、わたしの胸に集まっていきます。
「その祈りは――」
キュゥべえの声が、震えたように聞こえました。
「そんな祈りが叶うとすれば、それは時間干渉なんてレベルじゃない。因果律そのものに対する叛逆だ！　キミは……本当に神になるつもりかい!?」
「神様でも、何でもいい」

わたしは、胸元に集まる光に手を差し伸べ——それを抱きしめるように、言葉を紡ぎます。

「今日まで魔女と戦ってきたみんなを——希望を信じた魔法少女を、わたしは泣かせたくない。最後まで笑顔でいてほしい。それを邪魔するルールなんて、壊してみせる。変えてみせる。これがわたしの祈り……わたしの願い……」

力が——

凄まじい力が、わたしの中から溢れ出して——

そのすべてを解き放ち、わたしは全宇宙に宣言するように叫びました。

「さぁ、叶えてよ。インキュベーター!!」

○

どこまでも広がる、白という色が——わたしを包んでいました。

どこかで清らかな鐘の音が聞こえた気がして、やがて、熱いとか寒いとか温度を感じる力が消えていって——ものすごいスピードで、何かがわたしの周りを通り過ぎていきます。

でもそれらは心地よくて、優しくて——いつかわたしが見た、懐かしい何かであることがわかりました。もう、帰ることのできない、わたしの大切な世界がわたしに別れを告げているのだ、とわかりました。たくさんの温かい思い出が、溶けて、広がって、わたしを包

みます。

——ありがとう、ありがとう、ありがとう。

無数の星空がわたしの中に広がり、それが、無数の想いであると気がつきます。

ちっぽけなわたしは無限で、広大な世界の至るところに在りました。

世界中に散らばったわたしは、手を伸ばすとすぐに集まります。手を広げるとまた散っていきます。それがわかった瞬間、わたしの中からは、怖いという気持ちも消えていました。あんなに臆病だった自分がどこかに溶けて消えていました。ただ、優しい気持ちだけが、どこかからこんこんと湧き続けています。

そのうち、ふとずっと下の光に気がついて——

わたしは、そこに意識を向けました。

そこは、巴マミさんの部屋で——

そこで、制服姿のわたしがマミさんの淹れてくれた紅茶を飲んでいます。

目の前には、マミさんのお手製のシフォンケーキがあって、部屋の中は、ふんわりと安心だけが満ちていました。

「鹿目さん、それがどんなに恐ろしい願いかわかっているの？」

そうどこか心配顔で訊いてくるマミさんに——

「たぶん」

その部屋にいるわたしは、そう答えていました。
「未来と、過去と、すべての時間で、あなたは永遠に戦い続けることになるのよ？　そうなればきっと、あなたはあなたという個体を保てなくなる。死ぬなんて生易しいものじゃない。未来永劫に終わりなく、魔女を滅ぼす概念として、この宇宙に固定されてしまうわ」
「いいんです。そのつもりです。希望を懐くのが間違いだなんて言われたら——わたし、そんなのは違うって……何度でも、そう言い返せます。きっといつまでも言い張れます」
わたしが、そう強く頷くと——
「いいんじゃねぇの？」
横から、まるでケンカ腰のような声がしました。
「やれるもんなら、やってみなよ」
そこには——
佐倉杏子ちゃんが立て膝をついていました。
口一杯にケーキを頬張りながら——にやり、と笑います。
「戦う理由、見つけたんだろ？　逃げないって自分で決めたんだろ？　なら仕方ないじゃん。あとはもう、とことん突っ走るしかねーんだからさ」
「うん……ありがと、杏子ちゃん」
わたしが笑うと、マミさんもどこか吹っ切れたように微笑みました。

「じゃあ――預かっていたもの、返さないとね」
そう言って、マミさんが取り出したのは――
いつか、マミさんの部屋に置いてきたわたしのノートでした。
そして、そのノートには……わたしが成りたかったわたしが描かれていて。
あれほど憧れた、完全無欠のわたしが笑っていました。
どんなことも恐れず、どんな哀しみにも打ち勝つわたしが――
ピンク色の鮮やかな衣装とともに、きらめく魔法の力に包まれていました。
「あはは……」
照れたように笑うと、マミさんはそれをわたしの手の中にそっと置き、言ってくれました。
「あなたは、希望を叶えるんじゃない。あなた自身が、希望になるのよ。私たち、すべての希望に」
その言葉とともに――
温かなマミさんの部屋は光に包まれて、やがて白い世界へと呑み込まれていきました。
その光は――
たくさんの希望を背負った光は。

わたしの身体を包み、形を変えていきます。

肩から胸に降りる光は、鮮やかなピンクのドレスに。胸から腕を伝う光は、アームガードに。胸から腰に落ちる光は、ふわりとしたスカートに。そして足を流れる光は——深紅のパンプスに。

最後に弾けた光がリボンとなり、わたしの髪をまとめあげ、首元のチョーカーへと形を変えます。

ゆっくりと瞳を開いた時には——

わたしの中には荒れ狂うほどの力が、驚くほどお行儀良く整列していました。

体中に漲る力が、みなわたしの一言を待っているように、整然と寄り添ってくれていました。

暗かった空を黄金色に染め上げる光が、わたしの身体から溢れ出し、それは〝ワルプルギスの夜〟ほど大きな身体でさえも、照らし上げていきます。

地を震わせるほどのその嗤い声も、すこしも怖くありませんでした。

いえ、むしろわたしには——〝ワルプルギスの夜〟が、とても怯えているように思えるのでした。

……そう。

わたしの敵は、この目の前の巨大な黒い影ではなくって——

そのずっと向こうにいる、たくさんの友達を呑み込む〝絶望〟でした。
左手を伸ばすと、光が集まり——やがて大きな魔弓へと姿を変えます。そこに右手を差し伸べると、光の矢が現れます。それを力いっぱい引き絞り——
わたしは、矢を天空に向けて放ちました。
見滝原を覆う厚い雲を退け、〝ワルプルギスの夜〟の真上で拡散した光の矢は。
その瞬間——
空へ、地へ、遥か時の彼方へと無限に分かれ散っていきます。
千に、万に、億に、兆に、京に、垓に——そして那由他に至ったすべての光は、それぞれわたしでした。
そこは、とある時代の、とある街で——
黒く染まったソウルジェムを握りしめる、とある魔法少女のいる街で。
わたしは、彼女の側に寄り添い——彼女の絶望ごと、ソウルジェムを浄化させます。
また別の時代の、別の荒野で——
血まみれになって横たわる少女に寄り添い、彼女の哀しみごとソウルジェムを浄化させます。
別の時代の、別の処刑場では——
空っぽの心で人々を見つめる少女の横に立ち、彼女の恨みごとソウルジェムを浄化させ

ます。

王冠の少女がいました。甲冑の少女がいました。白衣の少女がいて、制服の少女がいました。みな、誰もが、胸に黒く染まったソウルジェムを抱き、涙に暮れていました。

「あなたたちの祈りを、絶望で終わらせたりしない」

そのすべての涙を抱きしめて——わたしは、叫びます。

純粋な祈りから始まったはずの願い。その無数の少女たちの、ほんのささやかな願い。願いを叶えるために、心をすり減らし、濁らせ、やがて自らが魔女へと変貌していったたくさんの友達。その哀しみのすべてを、わたしの中に取り込んでいきます。

一条の光と化したわたしの声は、届かないかもしれない。

その哀しみをすべて無くしたところで、問題の解決にはならないかもしれない。

——それでも。

「あなたたちは誰も呪わない。祟らない。因果はすべてわたしが受け止める！　だからお願い——」

だから、最後まで——

「自分を、信じて」

無数の哀しみの因果を束ねたわたしは——

そのすべてを受け止め、抱きしめて、わたしの痛みへと変えていきます。わたしの傷へと変えていきます。そしてその苦しみを、澱みを、愛おしいと感じ——生きていることそのものが、わたしの中に積み重なっていくことを愛おしいと感じ——そして、友達が抱える苦しみをともに味わえることに、感謝していました。無限の時間がわたしの中を流れ、無限の体験がわたしの意識と同化していきます。受け止めれば受け止めるほど、まるでわたしが増えていくようでした。果てしなく強くしていくようでした。鹿目まどかという意識が薄れ、より強い何かへと自分が変わっていくようでした。

そしてそれは……

鹿目まどか個人の幸せとの別れを意味しているのだろうけど——

それでも、わたしは幸せでした。

だって——こうなることで、わたしは初めて友達を持てたような気がするのです。

それも、ひとりじゃなくって。

いっぺんにたくさんの友達ができたような気がして。

ううん、友達なんて、いつもそこにいるんだって気がついたのでした。

こちらから友達になろうとさえすれば、誰とだって友達になれたはずなのです。

あらゆる時間軸の、あらゆる平行世界で生きる、すべての人たち。

わたしと同じ苦しみを味わい、それでも歯を食いしばって戦っているどこかの誰か。
そのすべてが、今、わたしの友達でした。
そして、それを知った今——
わたしが、わたしとしてお話できるのはあと少しなんだ、と気がつきました。

〝ワルプルギスの夜〟は——怯えていました。
どうしようもなく、怯え、世界を震わせるように哭いていました。
それは、竜巻となり、雷となり、見滝原の街を破壊していました。
彼女だって——
きっと、元はひとつの願いであったことを知ります。
苦しみの果てに願った、ささやかな願いのひとつであったはずなのです。
わたしが寄り添うと——
〝ワルプルギスの夜〟の巨大な身体のあちこちが、崩れていきました。
それにまた怯え——身体を激しく震わせるけれど、わたしは優しく話しかけます。
「もういいの……もういいんだよ」
その苦しみを。許すことのできない恨みを、絶望を。まき散らしてもこそげ落としても
消えない、真っ黒な想いを。わたしはすべて受け入れます。

「もう誰も恨まなくていいの。誰も呪わなくていいんだよ。そんな姿になる前に――」

――あなたは、わたしが受け止めてあげるから。

光に包まれていく世界の中で――

いつしか〝ワルプルギスの夜〟と呼ばれることになった想いは――小さな声を上げていました。

それは、悲しく、儚く、久遠の世界に響きます。

わたしの胸の中で、真っ暗な想いは激しく泣き伏していました。その想いは宇宙を突き抜けるほど、せつなくて、狂おしくて。胸が締めつけられ、張り裂けそうで。それでも、やっぱりその一番底にあるものは――

「そっか……」

わたしは、微笑みました。

「……あなたも、わたしと同じなんだね」

その言葉で――

〝ワルプルギスの夜〟と呼ばれた少女の顔が歪み――崩れ、溶けていきました。

わたしの中に溶けて、重なっていきました。

たぶん――
それはきっと、鹿目まどか、という存在が消えた瞬間で。
すべての哀しみは、ひとりで持つととっても重いけど――
くじけそうになるほど、重いけど――
みんなで持てば、重さなんて意味を無くすということを――宇宙が知った瞬間でした。

○

「……ここは」
黒髪の少女が目を醒ました、そこは――漆黒の空間でした。
上も下もわからない。
果てがどこにあるのかもわからない。
自分が中学二年の、魔法少女として契約した少女であるという自意識の他――
何も確かなもののない世界でした。
《まどかがもたらした新しい法則に基づいて、宇宙が再編されているんだよ》
聞き覚えのある声が、少女の頭の中で響きます。

憎しみと、奇妙な懐かしさの入り交じった、そのどこか呑気な声。
それで、彼女は理解します。
そこが、大宇宙の始まりの場所であるということを。
ここから、無限の増殖が始まり、すべての銀河が構成されていくということを。
次第に、少女の瞳には幾つかの光点が浮かび始めます。それは、やがて幾つもの連なりを見せ、原初の銀河へと揺らめいていきます。
《――そうか、キミもまた時間を超える魔法の遣い手だったね》
声は、どこか安心したように告げました。
《じゃあ、一緒に見届けようか。鹿目まどかという存在の結末を》
その言葉とともに――
遠い彼方に現れた一筋の流星は、やがて黒髪の少女の眼前に巨大な姿を浮かべます。
《あれが、彼女の祈りがもたらしたソウルジェムだ》
「そんな……」
それは――
ひとつの惑星といってよいほどの巨大さで、少女が顔を動かしたところで、その全容を見ることも敵わないほどの偉容でした。
《その壮大すぎる祈りを叶えた対価に、まどかが背負うことになる呪いの量がわかるか

い？》

少女が、はっとして見たその先には――

青く輝く、見慣れた美しい星がありました。

――太陽系第三惑星、地球。

《ひとつの宇宙を作り出すに等しい希望が、遂げられた。それは即ち、ひとつの宇宙を終わらせるほどの絶望をもたらすことを意味する――当然だよね》

声が、邪悪な響きを帯びた瞬間――

惑星ほど巨大なソウルジェムの中心点に、黒い染みのようなものが浮かびます。

それは瞬く間に周囲に広がり、滲み、やがて惑星全体を黒色に染め始めました。

その光景は、魔法少女として戦いに明け暮れた彼女にとって――見慣れた、苦い景色でした。消し去ることのできない、数々の絶望の記憶とともにある、魔女の孵化でした。

しかも――あの巨大な惑星級のソウルジェムから産まれ出る魔女は――

その力は。

ひとつの街ほどの大きさを誇った〝ワルプルギスの夜〟など比にならないほどの巨大さなのです。

「あ、あ……」

やがて宇宙を裂くほどの質量をまき散らして姿を現した、極大の魔女は――

地球に匹敵するほどの、その姿態を蠢かせます。
――結局、私には何もできなかったんだ……
黒髪の少女は、そう思いました。
どれほど時間を巻き戻し、繰り返し、そのことごとくでたったひとりの友達を救おうと奔走しようと――結局、この事態を引き起こしただけだったのだ、と悟ります。
いや、むしろ自分が何もしなければ。
同じ時間を繰り返し、あの子にすべての因果を結びつけるようなことをしなければ。
せめて、こんな巨大な魔女を産み出すことはなかったのではないか――
その重い絶望感が、自分の胸を、ソウルジェムを満たしていくのを感じていました。
――終わり、だ……
少女の心に入った亀裂が、そのヒビを広げようとした、その時――

(大丈夫だよ、ほむらちゃん)

――つい、わたしはそう声をかけてしまいます。
「……ま……まどか?」
狼狽え、四方を見渡す、黒髪の少女の背後から――

（わたしの願いは、すべての魔女を消し去ること。本当にそれが叶ったんだとしたら――）

それは、迫ります。

無限の時空に存在する、かつて〝鹿目まどか〟だった少女は――

手にした弓を引き絞り、宇宙を染めあげるほどの光を放ちました。

放たれた矢は、無数の光へと拡散し、地球を包み込む巨大な魔女を瞬く間に消し去っていきます。

その時に生まれた、膨大な光のその先で――わたしは、ほむらちゃんを守るように抱きしめ、そしてそのこわばった表情を確認して、ただ微笑みます。またすこしだけ逢えたことが嬉しくて、ほむらちゃんがしてくれたことのすべてが嬉しくて、そして、ただその体温を感じることだけでも嬉しくて。

その喜びは、わたしの中に強い勇気として生まれ変わります。

（わたしだって――もう絶望する必要なんてない）

その言葉とともに――

ほむらちゃんの意識は、拡散していくのでした。

《——まどか。これでキミの人生は……始まりも終わりもなくなった》

そこは、さっきとは打って変わった〝白〟の無限空間でした。

《この世界に生きた証も、その記憶も、もう何処にも残されていない。キミという存在は一つ上の領域にシフトして、ただの概念に成り果ててしまった》

その声は、掠れ、空虚で——

いつもの呑気な口調は影を消しています。

《もう誰もキミを認識できないし、キミもまた誰にも干渉できない。キミは……この宇宙の一員ではなくなった》

「何よ、それ……」

白い世界を流転しながら——ほむらちゃんは、震える声で呟きます。

「これがまどかの望んだ結末だっていうの？　こんな終わり方であの子は酬われるの？」

わたしの大切な友達は、そう泣き叫んでいるのでした。

でも、そのほむらちゃんの叫びも、慟哭も——白い世界に響くことなく、ただ拡散していきます。

「冗談じゃないわ！　これじゃ死ぬよりももっと酷い……」

ほむらちゃんは、全身に溢れるほどの哀しみを漲らせて叫び続けます。

——私は、まどかを守る自分でありたい、なんて願うべきじゃなかった。

——ただ、一緒にいたかったのに……いつまでも一緒に、鹿目まどかという少女のそばで幸せな人生を送れればよかったのに……それだけを願うべきだったのに……

溢れる後悔が、ほむらちゃんの胸を引き裂くようでした。

顔を覆い、どこまでも自分を呪うように、ほむらちゃんは泣き咽んでいました。

だから、もう一度だけ——

わたしは、ほむらちゃんに話しかけます。

（これで良かったんだよ。ほむらちゃん）

「……まどか」

（今のわたしにはね、過去と未来のすべてが見えるの。かつてあったかもしれない宇宙も、いつか有り得るかもしれない宇宙も、みんな。だからね、ぜんぶわかったよ。幾つもの時間で、ほむらちゃんがわたしのために頑張ってくれたこと、何もかも）

今、わたしの中には、ほむらちゃんが繰り返してきた無数の時間が流れていました。

病気の苦しみを誰に相談することもできず、ひとり苦しむほむらちゃんがいました。楽しそうにはしゃぎながら歩くクラスメイトたちを、避けるように帰宅するほむらちゃんがいました。わたしと出逢い、そしてわたしを失うほむらちゃんがいました。その結末を避

ける為にキュゥべえと契約し、何度も同じ時間を繰り返し、それでもわたしを失い続けるほむらちゃんがいました。

（……何度も泣いて、傷だらけになりながら、それでもわたしのために……ずっと気付いてあげられなくて、ごめんね）

その言葉で――

ゆっくりと、ほむらちゃんの頬に一筋の涙が伝っていきます。

（今のわたしになったから、本当のあなたを知ることができた。わたしには、こんなにも大切な友達がいてくれたんだって――だから、嬉しいよ。ほむらちゃん、ありがとう。あなたはわたしの、最高の友達だったんだね）

「……だからって、あなたは、このまま……帰る場所もなくなって、大好きな人たちとも離ればなれになって……こんな場所に独りぼっちで、永遠に取り残されるっていうの？」

（独りじゃないよ。みんな、みんないつまでもわたしと一緒だよ）

わたしは、無数の星々を背負いながらそう告げました。

（これからのわたしはね、いつでも、どこにでもいるの。だから見えなくても、聞こえなくても、わたしはほむらちゃんの側にいるよ）

「まどかは……それでもいいの？」

声にならぬ声で、ほむらちゃんは叫びます。

「私はあなたを忘れちゃうのに？　まどかのこと、もう二度と、感じ取ることさえできなくなっちゃうのに？」

（――ううん。諦めるのは、まだ早いよ）

それは不思議なんだけど――本当にそう思えて、わたしは言っていました。

まるで魔法のような、奇跡のような、わたしとほむらちゃんの出逢いは――互いの中に変化を生みました。ほむらちゃんは今までと違う価値観を宿すようになり、そして弱虫だったわたしは、いつしか弱かった自分を受け止められるだけの強さを身につけていました。魔女の存在を知り、それに対抗する魔法少女の存在を知り、この世の真の姿に怯えつつも――互いに、すこしずつ変化していったのだと思います。それぞれの時間軸でわたしはわたしなりに懸命に生きていて、ほむらちゃんはほむらちゃんとして、精一杯生きていました。何かがすこしずつズレて、何かがすこしずつ積み重なっていったけど――

それでも、きっと――わたしもほむらちゃんも、探していたものは同じだったのです。

わたしは、それを――

ほむらちゃんの頭の中に残るその姿を、描きます。

小さくて、華奢で、未熟極まりなく、果てしなく弱くて、懐かしい――その姿。

鹿目まどか、と呼ばれた少女をほむらちゃんのすぐそばに立たせます。ほむらちゃんが春色の微笑みと呼んでくれたあの笑顔で、泣きじゃくるほむらちゃんのそばに近づき――

「ほむらちゃん」
「……まどか」
目を見開くほむらちゃんの前で、自分の髪を結わえていたリボンを外します。
「ほむらちゃんは、こんな場所までついてきてくれたんだもの。だから元の世界に戻っても、もしかしたら、わたしのこと忘れずにいてくれるかも」
そう言って——わたしは、リボンをほむらちゃんの手の中にそっと置きました。
「大丈夫。きっと大丈夫。信じようよ」
「ま……どか……」
「だって、魔法少女はさ」
そこで一瞬、わたしの中に、黄色と藍色と深紅の笑顔がよぎります。そして、遥か昔から、この星のどこかで、懸命に戦ってくれた無数の少女たちの笑顔を思い浮かべます。その生を、業を、懸命に生き抜いた、眩しい笑顔の数々を思い浮かべ——
わたしは、ほむらちゃんに微笑みます。
「魔法少女は——夢と希望を叶えるんだから。きっとほんの少しなら、本当の奇跡があるかもしれない。……そうでしょう？」
その言葉とともに——
鹿目まどかの身体は、ゆっくりと薄れていきました。

「ま……まどかッ、行かないでッ！」
ほむらちゃんは、慌ててリボンを握りしめた手を伸ばすけど――
（ごめんね……わたし、みんなを迎えに行かないと）
わたしは、ほむらちゃんの伸ばされた手を握りしめるように、言いました。
（いつかまたもう一度、ほむらちゃんとも逢えるから。それまでは――ほんのちょっとだけ、お別れだね……）
「まどかぁぁッ！」
その声は、せつなく、悲しげに、わたしの背中に届くけど――
今のわたしには、信じることができました。
いつかきっと――また、わたしがほむらちゃんの元にたどり着けることを。
だから――
だから、今は。
この〝鹿目まどか〟という意識体で、成すべきことを成します。

○

あの悪夢の災害から、時が流れ――

壊滅的な被害を受けた見滝原市が、かつての町並みを取り戻し始めたある日のこと。
バイオリンコンクールの一次審査会場となったホールには、壮麗なバイオリンの旋律が響いていました。
時に激しく、時に緩やかに――
その四本の弦が紡ぎ出す音色は、聞く者の心に染み渡り、その心を裸にしていきます。
座席の最前列には審査員たちが並び、その指には皆採点用のペンを握っていましたが、評価用紙に何か書き込む者はいません。誰もが目を閉じ、ただその音色に聞き入っていました。
そして――
舞台中央で、そのバイオリンを奏でるのは、整った顔立ちの少年でした。
緩くウェーブのかかった前髪を揺らし、一心にその旋律と同化しています。
五百名は座れる座席のほとんどとは空席でした。
そして、やはり誰も座っていないホール中段の席――
そこには、しかし、確かにふたつの気配があるのでした。
――アヴェ・マリア。恭介が一番好きな曲だよ。
――うん。

ふたつの気配は少女であり、仲良く隣同士の席に座っていました。
——なんか、手間かけさせちゃったね……
ひとりの少女がそう言うと、
——ううん。こっちこそごめん。こういう結果しか用意できなくて……
もうひとりの少女は、静かに答えます。
——さやかちゃんを救うには、何もかも無かったことにするしかなくて……そうしたらこの未来も消えてなくなっちゃうの。でもそれは、たぶん、さやかちゃんが望む形じゃないんだろうなって。
訥々と語るその言葉を——さやか、と呼ばれた少女は黙って聞いています。
——さやかちゃんが祈ったことも、そのために頑張ってきたことも、とても大切で——絶対に無意味じゃなかったと思うの。だから……
——うん、これでいいよ。
さやかは、爽やかにそう言い切りました。
それから、とても満足そうに身を乗り出し——バイオリンの音に身を委ねます。
——そうだよ。あたしはただ、もう一度、あいつの演奏が聴きたかっただけなんだ。あのバイオリンを、もっともっと、大勢の人に聴いて欲しかった……それを思い出せただけで、充分だよ。もう何の後悔もない。

そう呟いた後——

舞台の袖を見つめて、さやかは笑いました。

——まあ、そりゃちょっぴり悔しいけどさ。

さやかが見つめるその暗い舞台袖には……ひとりの少女が、泣き出しそうな表情で少年を見つめていました。試験に臨んでいる少年よりも緊張し切ったその表情は、ただ一心に少年の成功だけを願っているようでした。

——仁美じゃあ、仕方ないや。恭介には勿体ないくらい良い子だし……幸せになってくれるよね。

その言葉で、もうひとりの少女も微笑みます。

そんな彼女たちを包むように——アヴェ・マリアは流れていくのでした。

そのメロディには、もうわずかの歪みも存在しませんでした。

そしてそれが——少年の尋常ならざる努力の果てに奏でられる音楽だということを、さやかは悟っていました。一度、音楽という夢を断たれ——そして絶望の果てに、自分にとって音楽がどれほど大切なものであったかを理解した者にしか紡げない音色なのでした。

——恭介は、大丈夫。

さやかのそんな横顔を、もうひとりの少女は眩しそうに見つめ——

——じゃあ、行こうか。

そっと、さやかの肩に手を置きます。
さやかは、強く頷き――
――うん、まどか。
そう隣の少女に、明るい微笑みを見せました。
そして、この言葉を最後に――
無数の思い出は、宙に浮かび、拡散します。
そこには、透明な笑顔だけがありました。人々の幸せだけを願う、ふたりの少女の想いだけがありました。それは、すぐにこの世界に届くものではないかもしれないけれど――それでも、ふたりはその想いを自分たちが愛した街に注ぎます。そこに暮らす人々に注ぎます。失ったものしか数えられない人々の心にわずかな温かみの種を植えます。
それは、いつか芽吹くことでしょう。
いつか、人々の中でしなやかな強さへと変わるでしょう。
そして、より弱きものたちを守る優しさへと変わるでしょう。
その日を祈りつつ――ただ、祈りつつ。
少女たち――いえ、わたしたちは、手を取り合い、微笑み合い、そして、
演奏は――終わった。

観客は一斉に立ち上がり、青年に向けて、そして青年が奏でた旋律に向けて——

今、広大なコンサートホールでは、惜しみない拍手が注がれていた。

それに対して、青年はバイオリンを小脇に抱え直し、丁寧に頭を下げる。

鳴り止まぬ拍手に包まれ、無数の思い出が彼の胸にこみ上げていた。

高校から音楽大学に進み、そこからジュリアード音楽院、そしてロドルフォ・リピツァー賞を受賞——長い夢を見ていたような心地さえする、青年が歩んできた道。

しかし、それはけして平坦な道ではなかった。

彼には、かつて、すべてに絶望した日々があった。

中学二年時、交通事故に巻き込まれ、気がついたら病院であったこと。

家族も、医者も、皆、蒼白な顔をしていたこと。

そして——

もう二度とバイオリンを弾くことは叶わない、と告げられた日のこと。

そこから、諦めと、絶望の日々は始まった。ほんの少し前まで、明るく開けていた道が目の前ですべて崩れ去ったような、暗黒の日々だった。あの暗く、長い道を……自分は歩き通した。諦めることなく、歩き続けてきたおかげで——自分は、今、ここにいる。

万雷の拍手の中、そう噛み締めた瞬間——

ふと、その暗い道に常に寄り添ってくれていた、誰かの姿を思い出した。

いつも明るい笑顔で、どんなことがあろうと励まし続けてくれた幼なじみの少女。
治らない腕への苛立ちに、失った夢への絶望に、彼は少女に八つ当たりしたこともあった。
しかし、少女はそれでも言ってくれた。
奇跡も、魔法も、あるんだよ——と。
「……さやか」
青年が、唇を噛み締めてそう囁いた瞬間だった。
——恭介、よかったね。
もういないはずの少女の声を聞いた気がして、青年は、はっと顔を上げた。
ホールの隅々に目をこらし、その姿を追い求めた。
だが、そこにあるのは——
彼の将来を目映く照らすような、無数の歓喜と賞賛だけであった。

エピローグ◎

最高の友達

私は、真夜中の駅にいた。
周囲はどこまでも暗く――そしてその暗闇に溶け込むように、結界は消えていく。
「……さやかは？」
辺りが現実を取り戻す間もなく――佐倉杏子は叫んでいた。
「おい、さやかはどうした!?」
柄の長い槍を抱え、長い髪を頭上で結わえた佐倉杏子からは、いつもの不敵な態度は消え失せていた。
そこにいるのは、ただ年相応に狼狽える、ひとりの少女の姿だった。
「……逝ってしまったわ。円環の理に導かれて」
やがて――
黄色の艶やかな衣装に身を包んだ少女が、呟く。
いつも颯爽としている巴マミの顔も、哀しみに沈んでいた。
「美樹さん……さっきのあの一撃に、すべての力を使ってしまったのね」
その言葉に、杏子は激しく柱を殴りつける。

「バカヤロウ……惚れた男のためだからって、自分が消えちまってどうするんだよ！　バカ……やっと……友達になれたのに……」

そう吐き出すように叫んだ杏子の瞳からは――今、透明な雫がこぼれ落ちていた。

その光景を――

違う――と、私は、ただ見つめていた。

違う、そうじゃない、と口の中でひとり繰り返していた。

「それが……魔法少女の運命よ。この力を手に入れた時から、わかっていた筈でしょう？　希望を求めた因果が、この世に呪いをもたらす前に、私たちはああやって消え去るしかないのよ……」

巴マミのその言葉に――

私は、手の中に残るそれを握りしめた。

柔らかく、手のひらにかかるその赤いリボンは――

すべては夢なんかじゃない、と悲しく告げていた。

――行ってしまった。

まどかは……私のたったひとりの友達は――すべての因果を引き受けて、ただの概念へと生まれ変わってしまった。

――ずっと気付いてあげられなくて、ごめんね』

まだ私の中には、あの耳奥をくすぐるような声がこんなに色濃く残っている。

『――今のわたしになったから、本当のあなたを知ることができた。わたしには、こんなにも大切な友達がいてくれたんだって』

あの言葉で――

あの時、孵化寸前だった私のソウルジェムの濁りは、消えていた。

ずっと報われぬ回廊を彷徨っていた私に気がついてくれたこと――そして最期の最期に、また私を救ってくれた友に、涙がとめどなく流れていた。

「……まどか……ッ」

思わず、その名を口にしてしまった私に――

「――暁美さん？」

心配するように、巴マミが私の名を呼び――

佐倉杏子が、尋ねた。

「……まどかって、誰だよ？」

その言葉に――その現実に。

私は、震える手で、リボンを胸に押し付ける。

まどかは、まだこんなに私の中に生きているのに――

今もすぐそばに、そのぬくもりがあるのに――もういない。

もう誰の中にも彼女は存在しない。鹿目まどかという少女が、そのすべてをかけてこの世界を繋ぎ止めてくれたということすら、未来永劫、誰にも知られることがない。

時間を繰り返すことによってたくさんの絶望を生み出してしまった私だけど――それでも、次の世界でまどかの姿を見ることで、自分の冷えきっていく心にほんのわずかな明かりが灯された。その姿を遠くから見つめるだけで、心は温かくなった。

それを、その安らぎを――今、本当に失ってしまったということが、私の涙を止めようもないものとしていた。

もう一度、まどか、とその名を叫びそうになって――

歯を食いしばり、こらえる。

しかし、そうすればするほど、まどかの優しい微笑みが胸に迫った。彼女との無数の思い出が押し寄せてきた。このまま彼女の笑顔に満たされて消えてしまいたいと思うほど、それは苦しかった。もう二度と出逢うことのない友の記憶を抱えて生きていくことに自信がなかった。

今、私は、元の気弱な暁美ほむらへと戻っていた。

何もかもが怖くて、足がすくみ、逃げ出していた日々。

まどかと出逢ったことにより、ようやく抜け出すことのできた、あの虚ろな日々。
自分が、あの頃にゆっくりと戻りかけているのを感じていた。
そして、戻ってしまったほうがまだましだ、とすら思えた。死ぬのを待つだけの空っぽの人生だけど、まどかを知り、そしてそのまどかとはけして逢えない今の自分より遥かにましだった。
けど――
けど――
けれど、それはできなかった。
自分が彼女を忘れてしまえば――今度こそ、まどかは本当にひとりになってしまう。
だから、どんなに辛くとも、苦しくとも、ここから私だけは、彼女の思い出とともに生きていかなくてはならない。彼女の体温をそばに感じ、彼女とともに戦わなければならない。
――立て、崩れるな、ほむら。
奥歯を噛み締めるように、その場に崩れそうになる自分を叱咤する。
沈みかかる心を、膝を、鼓舞する。
――あなたは、親友でしょう?
――鹿目まどかの最高の、友達でしょう?

ならば、たとえもう逢うことができなくとも、もう言葉を交わすことができなくとも、胸を張って生きていけ。鹿目まどかの友として、恥ずかしくない人生を全うしろ。

そして、いつか、まどかと再び出逢えた時――

ほむらちゃんがんばったね、と微笑んでもらえるように……

強く、強く……生きていけ……

そう、必死に自らに言い聞かせ――

かろうじて、崩れかけていた膝に力を込める。

巴マミや、佐倉杏子に、言葉を返すことはできなかったけれど――

私はただ、これから歩き続ける、死よりも厳しい道を――睨みつけていた。

○

休日の河川敷は、平和そのものだった。

爽やかな風がたなびき、夏の終わりの日差しが優しく注いでいた。

草のなびく土手に、私はひとり座っていた。

そして、飽きること無く――ひとつの家族の姿を目で追っていた。

それは、まだ若い夫婦と、小さな男の子だった。

男の子は、地面にしゃがみ込み、一心不乱に落書きをしていて——それを、父親と母親は目を細めて眺めていた。

やがて——私は、立ち上がる。

制服のスカートを一度叩いて、そのまま鞄を手に歩き出した。

「……まどかっ、まどかっ」

私が近くに歩いていくと、男の子はそう叫んだ。

微笑みながらその場にしゃがんだ私は、男の子の指し示す落書きの少女を見つめる。

そこには、懐かしい友の姿が描かれていた。

ふたつに結んだ髪。華奢な身体つきに、フリルの衣装。

なにより、春色の笑顔がとてもよく描かれていた。

「うん、そうだね。そっくりだよ」

私がそう言うと、

「……ぁぅ？」

男の子は、どこか不思議そうに首をかしげた。

それから、何かに気がつき、おもむろに手を伸ばす。

それは、私の黒髪につけられた、鮮やかな赤いリボンに向けられていた。

「こぉら、駄目じゃないか、タツヤ」

そこに、男の人の声が割り込む。
「女の人の髪を引っ張るの、駄目！」
それは、男の子の父親だった。
初めて出逢うまどかの父親に——私の瞳は、しばし吸い寄せられた。
優しげな目元に、日だまりのような微笑み。
親友の面影が、そこには色濃くあった。
「すいませんねぇ。大丈夫でしたか？」
そう頭を下げる父親に、
「いいえ。こちらこそ、お邪魔してしまって」
私も、挨拶を返し——
それから、父親の腕の中で身体をじたばたとさせる男の子に微笑みかけた。
「まどか、だね」
「うんッ」
タツヤと呼ばれた男の子は、元気よく頷いた。
そして——
私は、父親と男の子の背後で自分を見つめる母親に視線を移す。
そこには、つややかな髪をボブカットにした奇麗な女性がいた。

何かを思い出そうと見つめてくる彼女に——私は、丁寧に頭を下げた。

「まぁその……あの子が一人遊びするときの、見えないお友達ってやつ？　子供の頃には、よくあることなんだけどね」

まどかの母親——鹿目詢子（じゅんこ）は、そう笑っていた。

「ええ、私にも覚えがあります」

自分の場合は、子供の頃のことではないけれど——と心の中で続けた私は、胸の奥がつきんと痛むのを感じる。

私たちは、河原で遊ぶ父親とタツヤの姿を見つめながら、並んで土手に座っていた。

「まどか、ってさ、あなたも知ってるの？　アニメか何かのキャラとか？」

やがてそう尋ねてきた詢子に、私は小さく微笑んで答える。

「さぁ、どうだったか。聞き覚えがあるような、ないような」

「そうかぁ。あたしもどっかでタツヤと一緒に見たのかなぁ……う～ん、たまにね、すっごく懐かしい響きだな、って思うことがあるんだよね。まどか」

「そうですか」

その母親の言葉は、どこか寂しく、どこか嬉しかった。

完全にまどかが消えたわけではない、と思えた。

まだこの世界には彼女の何かがほんのわずかに残っているのだ、ということが私を力づけていた。

「……そのリボン、すっごく可愛いねー」

ふと気がつくと、詢子は私の髪に手を伸ばしていた。

「あたしの好みにド直球だわ。ちょっとびっくりしたくらい」

そう目を細める詢子の瞳には——

無くした宝物を、再び目にしたような輝きがあった。

その瞬間、私は思う。

あの子は本当に大事にされてきたのだ、と。

この両親に心から望まれて、愛されてきたから——すべての呪いに愛を注ぐことができたのだ、と。

「差し上げましょうか？」

私のその言葉に、一瞬、詢子は狼狽えるような表情をした。

それからすぐに、照れたように笑う。

「あはは、こんなオバサンには似合わないって」

——とんでもない。

私は思った。

鹿目詢子はぜんぜん、おばさんには見えなかった。
とにかく奇麗で、かっこよくて——そして何より、内面の強さを窺わせた。
そして、それは私の親友が秘めるものと同じ種類の強さだった。
すべてを温かく包む愛であって、そして、それを貫くことのできる強さだった。
「まあ——娘とかいたら、つけさせたかもしれないねぇ」
そう笑う詢子に、私は心の中でそっと告げる。
——まどかを、ありがとう。
——私に友達を与えてくれて……ありがとう。

○

風が吹く。
夜の静寂に、邪悪な風は吹き渡っていた。
私は、今——高層ビルの屋上から摩天楼を睨んでいた。
黒と白とグレーの衣装に身を包み、眼下に広がる私の戦場を睨みつけていた。
「——成る程ね。たしかにキミの話は、ひとつの仮説としては成り立つね」

後ろから、のんびりとした声が聞こえ――

「仮説じゃなくて、本当のことよ」

そう言い返すと私は、円状に並べた幾つかの小さなキューブの中央に、自分のソウルジムを置く。

それは、小さな宝石のような石で――かつてのグリーフシードとは違い、一度に複数を使用しなければ、濁りを完全に取り去ることはできなかった。

「だとしても、証明しようがないよ。キミが言うように、宇宙のルールが書き替えられてしまったのだとすれば、今の僕らにそれを確かめる手段なんてないわけだし……キミだけがその記憶を持ち越しているのだとしても、それはキミの頭の中にしかない夢物語と区別がつかない」

「……ふん」

鼻をならすと、私は使い終わったキューブをその声の主に投げる。

白い尾と、長い耳を持つ、白色の存在――キュゥべえに。

「……まぁ確かに、浄化しきれなくなったソウルジェムがなぜ消滅してしまうのか、その原理は僕たちにも解明できてない。その点、キミの話にあった魔女の概念は、なかなか興味深くはある」

投げつけられた黒く濁んだキューブを、背中にある口に入れながら、キュゥべえは呟い

た。

「人間の感情エネルギーを収集する方法としては、たしかに魅力的だ。そんな上手い方法があるなら、僕たちインキュベーターの戦略も、もっと違ったものになっただろうね」

「……そうね。あなたたちは、そういう奴らよね」

そう軽くキュゥべえをいなすと——私は、ぱんぱんと手の埃を払って立ち上がった。

そんな私を見上げながら、キュゥべえは言う。

「だってキミが言う魔女のいた世界では、いま僕らが戦ってるような魔獣なんて存在しなかったんだろう？　呪いを集める方法としては、よほど手っ取り早いじゃないか」

「そう簡単じゃなかったわ。あなたたちとの関係だって、かなり険悪だったし」

「ふ～ん……やっぱり理解できないなぁ。人間の価値観は」

キュゥべえの溜息を無視して、私は眼下に広がる無数の明かりを見つめた。

そして、そこに暮らす無数の人々を思う。

無数の想いが巡らす、無数の願いを思う。

そして、その明かりの向こうに広がる濃い闇の奥に——今も、無数の絶望が横たわっていた。

それは異形の影となり、魔女の使い魔とも違う、全く別種の怪物——魔獣と化して、今も迷える人々を喰っている。たとえ魔女が産まれなくなった世界でも、それで人の世の呪

いが消え失せるわけじゃない。世界の歪みは形を変えて――
今も、闇の底から人々を狙っている。
「今夜はつくづく瘴気が濃いねぇ。魔獣どもも次から次へと湧いてくる。いくら倒してもきりがない」
「ぼやいたって仕方ないわ。――さぁ、行くわよ」
キュゥべえの軽口を斬って捨て――私は、そこから飛翔した。
両腕を広げ――夜の闇へと、落ちていく。
風が髪を舞い上がらせ、私の顔を露にしていく。
夜の静寂にさらされていく私の顔は、人々の目にどう映るのだろう。
かつての気弱で、病弱な私だろうか。
それとも、氷のように、冷静なだけの私だろうか。
地上に降り立つと同時に、その顔を闇に向けると――漆黒の闇の中で何かが蠢いた。
救いようの無い人々の妄執を塗り固めた、異形のモノ達。
人が存在する限り、休むことなく生み出され続ける、魔獣の群れ。
いっそ見放したくなるほどの闇を冷たく睨みつけ――
それでも、と私は思う。
悲しみと憎しみばかりを繰り返す、救いようのない世界だけれど――

だとしてもここは、かつてあの子が守ろうとした場所だった。
それを憶えてる。けして忘れたりしない。
だから私は――

〝戦い続ける〟

刹那(せつな)――
私の手が発光し、その腕には大きな魔弓が現れた。
身体の中から強い魔力が立ち上り、同時に、弓は放たれる。
そして、それは、光の束となって拡散していく。
あらゆるものを呑み込むような、広く、濃い闇。
その中に、光は呑まれるように消えていく。
むろん、その結末は――危うい。
闇はあまりにも濃く、そして、私はあまりにもひとりだった。
けれど、私はすでに知っていた。
自分が、けしてもう真の孤独ではないということを。
かけがえのない友が、いつもいつだって、横にいてくれるということを。

その友の微笑みが。
その友の眼差しが。
そして、その友の言葉が、常に私とともにあった。
私の身体は、これからも傷ついていくだろう。
これからも、心を引き裂かれるような出来事に翻弄されるだろう。
だけど、私の心が潰されることはけしてない。
いつも、どこかで、誰かが、私の為に戦ってくれていることを忘れない限り。
そして、私がその誰かの顔を思い出す時——
けして私はひとりじゃない、とわかるのだから。

体が引き裂かれそうなほどの魔力を。
心が張り裂けそうになるほどの想いとともに、放つ。
いっそ死んでしまいたいと思うほどの、孤独な戦いの果てに——
いつも耳の奥で、あなたの声は響く。

崩れそうになるのは、わたしだって同じで、弱虫なのはわたしも同じで、友達がどういうものなのかすらわからなかったわたしに、あなたが教えてくれたんだよ。

世界のすべてから外れ、この無限の空間で戦うわたしが、けしてひとりじゃないってこと……

いつも、どこかで、ほむらちゃんが戦ってくれているから——わたしのことを憶えていてくれるから、わたしの心はけして潰れないんだよ。

今、胸を張って言える。

わたしには、私には、友達がいる。

最高の友達がいる。

だから——

〝がんばって〟

あとがき

名曲『月の光』は本作のあるシーンにおいてとても印象的な使われ方をされていますが、その作曲家であるクロード・ドビュッシーの言葉に『芸術とはもっとも美しい嘘である』というものがあります。今改めてこの言葉を思うとき、僕の脳裏には同時に「芸術は作るものではなく、もともと存在し、自分は石の中から取り出しただけだ」という言葉がよぎりました。こちらはミケランジェロを始め、多くの彫刻家がよく口にしたとされるものです。で——果たして「嘘」なのか。それとも「初めからそこにあった」ものなのか。ときどき自分にはよくわからなくなります。いわゆる「プロット」とは物語の設計図であり、神的視点から全体を俯瞰して制作するものです。そして優れたプロットを組み立てることに職人的技巧を発揮する作家もいれば、次の一行のことしか考えていない、という作家もこの世に存在して——どちらが正しいとか、どちらが優れているということではなく、結局は出来上がったもの次第だとは思うのですが、それでも自分にどちらが向いているのか、と未だ悩む日々を過ごしています。

そして、この『魔法少女まどか☆マギカ』を小説化するという仕事は、どちらかといえば最初にお話が決まっていて、それを文字媒体に起こすという、つまり、プロット先行型

に近い作業でした。そこに、キャラクターに成りきって文字をつづる書き方である自分は果たして対応できるのか。そんな不安が書く前に少なからずあったのですが、しかし、それは完全なる杞憂でした。この物語は、途方も無い箱を作った上で、そこに生きるキャラクターたちの感情の流れに誠実に寄り添っています。それぞれの魔法少女たちは、過酷な運命を前に、ひたすらまっすぐに清純な健気さを貫き、その感情曲線と物語のうねりが見事にシンクロして、まるで「誰かが掘り起こしてくれるのを待っていた物語」であったようにラストへと疾走します。

つまり、「美しい嘘」と「初めからそこにあった物語」は両立するのではないか、という驚きを、僕に見せつけてくれました。

かつてニトロプラスフックス版のあとがきに『良い物語には、視聴者をその世界に、否応無く首根っこを摑むように引きずり込む暴力的な何かがある』と書いたのですが、その「何か」はまだ僕にはわかりません。けれど、確かに存在していることをこの物語は感じさせてくれました。

そんな機会を与えてくださった星海社編集部の皆さん、ありがとうございました。

そして、何より文庫化の話が生まれるきっかけとなった、この物語を愛してくださっている皆さんに、ここに深く、深く感謝を捧げます。

二〇一三年九月　一肇

本書は、二〇一二年に芳文社より刊行された『小説 魔法少女まどか☆マギカ』に加筆訂正を加え、二分冊のうえ、文庫化したものです。

Illustration　原画／谷口淳一郎（たにぐちじゅんいちろう）・彩色／ざいん
Book Design　BALCOLONY.
Font Direction　紺野慎一

使用書体
本文――FOT-筑紫Aオールド明朝 Pr6 R＋游ゴシック体 Std D（ルビ）
ノンブル――ITC New Baskerville Std Roman

星海社文庫 ニ1-02

魔法少女まどか☆マギカ（下）

2013年10月17日　第1刷発行

定価はカバーに表示してあります

原　作——Magica Quartet
©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Partners・MBS 2013 Printed in Japan
著　者——一肇（Nitroplus）
©Hajime Ninomae 2013 Printed in Japan
監　修——虚淵　玄（Nitroplus）

発行者——杉原幹之助・太田克史

編集担当——太田克史

編集副担当——山中　武・林佑実子

発行所——株式会社星海社
〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14 音羽YKビル4F
TEL 03(6902)1730　FAX 03(6902)1731
http://www.seikaisha.co.jp/

発売元——株式会社講談社
〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21
販売 03(5395)5817　業務部 03(5395)3615

印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記の上、講談社業務部あてにお送りください。送料負担にてお取り替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは、星海社あてにお願い致します。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権上での例外を除き禁じられています。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-138957-1　Printed in Japan

星海社FICTION
一肇×安倍吉俊のタッグが描き出す、
ありとあらゆる怪異を詰め込んだ
極上の青春怪談小説!!
ようこそ、こちら側の世界へ
フェノメノ
一肇
Hajima Ninomae
Illustration /
安倍吉俊
yoshitoshi ABe
『フェノメノ 美濃木夜石は怖がらない』
『フェノメノ 弐 融解ファフロッキーズ』
『フェノメノ 参 収斂ファフロッキーズ』
星海社朗読館『願いが叶う家』
好評発売中
最新作
『フェノメノ 肆 画廊事件』
2013年11月発売予定

『フェノメノ』
＝ビジュアルノベル
ニトロプラス
フェノメノ 美精木夜石は怖がらない より、「願いの叶う家」をビジュアルノベル化!
現在、無料ダウンロード中
URL: http://www.nitroplus.co.jp/game/phchomeno/
星海社FICTIONS

これは始まりに至る物語――。
星海社文庫
Fate/Zero
フェイト／ゼロ
Gen Urobuchi
虚淵玄
Illustration
武内崇・TYPE-MOON
虚淵玄がその筆(ペン)によって描き出す七人の魔術師(マスター)の
究極の決闘劇『Fate/Zero』が、
星海社文庫の創刊ラインナップに堂々の登場！
武内崇による全巻描き下ろしのカバーイラストに加え、全扉絵をフルカラーで収録。
装いも新たに全六巻で「小さな愛蔵版」星海社文庫に見参する――！
http://sai-zen-sen.jp/sa/fate-zero/
詳しくは公式サイトをチェック！
作者のtwitterも併せてfollow!
虚淵玄：@Butch_Gen

☆星海社FICTIONS

龍と剣、そして目くるめく魔法の世界。

金の瞳と鉄の剣

虚淵玄の剛筆が唸り、高河ゆんの絵筆が華麗に舞う！
"虚淵玄×高河ゆん"、スーパータッグが
ファンタジーの歴史に新たな一章を刻みつける！

Gen Urobuchi
虚淵玄 Illustration／高河ゆん

最前線
星海社ウェブサイト「最前線」にて大人気連載中!!
Access Us!! >>> http://sai-zen-sen.jp/

SEIKAISHA

星々の輝きのように、才能の輝きは人の心を明るく満たす。

その才能の輝きを、より鮮烈にあなたに届けていくために全力を尽くすことをお互いに誓い合い、杉原幹之助、太田克史の両名は今ここに星海社を設立します。

出版業の原点である営業一人、編集一人のタッグからスタートする僕たちの出版人としてのDNAの源流は、星海社の母体であり、創業百一年目を迎える日本最大の出版社、講談社にあります。僕たちはその講談社百一年の歴史を承け継ぎつつ、しかし今くの真っさらな第一歩から、まだ誰も見たことのない景色を見るために走り始めたいと思います。講談社の社是である「おもしろくて、ためになる」出版を踏まえた上で、「人生のカーブを切らせる」出版。それが僕たち星海社の理想とする出版です。

二十一世紀を迎えて十年が経過した今もなお、講談社の中興の祖・野間省一がかつて「二十一世紀の到来を目睫に望みながら」指摘した「人類史上かつて例を見ない巨大な転換期」は、さらに激しさを増しつつあります。

僕たちは、だからこそ、その「人類史上かつて例を見ない巨大な転換期」を畏れるだけではなく、楽しんでいきたいと願っています。未来の明るさを信じる側の人間にとって、「巨大な転換期」でない時代の存在などありえません。新しいテクノロジーの到来がもたらす時代の変革は、結果的には、僕たちに常に新しい文化を与え続けてきたことを、僕たちは決して忘れてはいけない。星海社から放たれる才能は、紙のみならず、それら新しいテクノロジーの力を得ることによって、かつてあった古い「出版」の垣根を越えて、あなたの「人生のカーブを切らせる」ために新しく飛翔する。僕たちは古い文化の重力と闘い、新しい星とともに未来の文化を立ち上げ続ける。僕たちは新しい才能が放つ新しい輝きを信じ、それら才能という名の星々が無限に広がり輝く星の海で遊び、楽しみ、闘う最前線に、あなたとともに立ち続けたい。

星海社が星の海に掲げる旗を、力の限りあなたとともに振る未来を心から願い、僕たちはたった今、「第一歩」を踏み出します。

二〇一〇年七月七日

星海社　代表取締役社長　杉原幹之助
代表取締役副社長　太田克史

星海社FICTIONSの年間売上げの1%がその年の賞金に――。

目指せ、世界最高の賞金額。

星海社FICTIONS新人賞

星海社は、新レーベル「星海社FICTIONS」の全売上金額の１％を「星海社FICTIONS新人賞」の賞金の原資として拠出いたします。読者のあなたが「星海社FICTIONS」の作品を「おもしろい！」と思って手に入れたその瞬間に、文芸の未来を変える才能ファンド＝「星海社FICTIONS新人賞」にその作品の金額の１％が自動的に投資されるというわけです。読者の「面白いものを読みたい！」と思う気持ち、そして未来の書き手の「面白いものを書きたい！」という気持ちを、我々星海社は全力でバックアップします。ともに文芸の未来を創りましょう！

星海社代表取締役副社長COO 太田克史

最前線

詳しくは星海社ウェブサイト『最前線』内、星海社FICTIONS新人賞のページまで。

http://sai-zen-sen.jp/publications/award/new_face_award.html

質問や星海社の最新情報は
twitter星海社公式アカウントへ！

twitter

follow us! @seikaisha

星海社文庫 ―― 今月の新刊

魔法少女まどか☆マギカ(上)・(下)

一肇

監修虚淵玄×一肇のタッグで生まれた魔法少女まどか☆マギカ公式ノベライズ!

ちょっぴり気弱な女子中学生・鹿目まどかは完全無欠の"魔法少女"に変身することで、理想の自分になれると信じていた――その残酷な真実を知るまでは…―。

"魔法少女"ものの新境地を切り開いたTVアニメ『魔法少女まどか☆マギカ』を、虚淵玄監修のもと一肇が公式ノベライズ! これは鹿目まどかの目線から語られる、奇跡と魔法の物語。(10月17日頃発売予定)

鬼哭街

虚淵玄 Illustration／中央東口

虚淵玄がその剛筆を血に染めて抉り出す、相克の復讐劇――これぞ代表作。

かつては友と信じた男の裏切りにより、辱めの果てに命を奪われた自身の妹・瑞麗の仇を討つため、犯罪都市・上海へと舞い戻った孔雀羅。

一振りの後刀と必殺の電磁発頭「紫電掌」を武器に、凶悪無比な五人の仇敵たちへの復讐劇の火蓋はついに切られた――!

虚淵玄×ニトロプラスのサイバーパンク武侠片ノベルゲームを、虚淵玄自らが小説化。全てのバトルシーンを担当イラストレーター・中央東口の描き下ろしカラーイラストが彩る"完全版"として星海社文庫化!

DON'T TRUST OVER 30

TAGRO

僕たちは、良い大人になんかなれない――。

大人になれない大人たちのめくるめく狼藉、それは青春の残照――。表題作をはじめ、ゼロ年代に文芸誌『ファウスト』を中心に発表された珠玉の名品を収めた傑作短編集、待望の文庫化。新たに、著者によるあとがきと、同級生として若き日を共有したライター・志田英邦による解説を収録。

星海社文庫は、毎月10日前後に発売!

(お住まいの地域により、発売日が変わることがございますのであらかじめご了承ください)